

敢なる行動をなし得たものである。

一七〇

本所區長岡町四十三番地 和知金造君 (四十歳)

弟子 新田福松君 (二十一歳)

弟子 室賀要藏君

◎中風の老人の介抱

本所區横網町一丁目十五番地に鈴木金市(二十五歳)といふ大工がある。十五歳の頃福島市から出て来て、姉の家で働いてゐたのである。

九月一日の震災當時は姉の家におゐた。地震と思ふ間もなく直ぐに戸外に出た。自分の家は倒れもしなかつたが、十五番地にある長屋の多くは土煙をあげて全く倒潰してしまつた。黒煙は各所に起つて大きな入道雲のやうにもく／＼と天に沖して實に恐ろしい光景となつた。地震だ火事だと人々の狼狽する中に、金市は同番地に市川房吉(六十八歳)と云つて永年中風のために立つことさへ出来ない老人のゐることに気がついた。頻々と来る地震、刻々に迫る猛火、之から救ひ出してやりたいと考へた彼は、早速老人の家に駆けつけた。

不自由な身の悲しさにどうすることも出来ず、たゞ死を待つばかりであつた老人を金市は脊負ひ出して河岸まで連れて行つた。さうして戸板や藁で坐る場所を作り老人を休ませておいて、再び十五番地へ引返すと、三階建の倒潰家屋の下に下敷きとなつてゐる者があるから助けてくれと呼ぶ聲を聞いたので、彼は他の人の援助を得て、遂に之も掘り出し背負つて兩國橋の側まで連れて行つた。救はれた男は金田角八郎(三十八歳)と云ふ者である。

かうして兩人とも金市のお蔭で危い命を取り止めることが出来たのであるが、平素何の關係もない人たちのために私事を犠牲にして、その生命の救助に盡した金市の行は實に見上げたものと云ふべきであらう。

本所區横網町一ノ十五番地 鈴木金市君 (二十五歳)

◎北海道から人命救助に來た先生

九月一日午前、本横小學校では、北海道から來られた先生として出町寛一郎君を紹介した。

新訓進出町君は、校内を一巡して永い廊下を歩いてゐると、突如、大地震となつた。轉げる様に運

動場に出ると、校長と六七名の訓導がゐた。校庭に避難して来る者は、腰のたゝない母を負つた若人……泣く子供、ごつたませになつて、第二、第三と頻々と来る地震に泣き叫ぶ者もある。念佛を唱へてゐる者も有る、火事だ！ 消火栓は、と用意はしたが水が出ない、もう駄目だ。附近の人は歸つて火事の用意を……。

出町君は東京に来て未だ荷もとかぬ。宿の荒井町一番地に歸つた。猛火に追はれて厩橋にのがれた再び荒井町に引き返し消火に手傳つた。そのうちに異様な音響が起つた。火は風を呼び、風は火を呼び、猛烈な火勢になつたので生命がけで逃げた。ヤット、厩橋まで来た時は、ライオン工場は焼け落ち舟に乗るものは乗り、逃げる者はにげた。

橋は渡れなくなつた「もう駄目だ。」と其所にゐた人達と死を決した。巡査がゐて、この川はそんなに深くないから入れと言つた。皆言はるゝまゝに入水した。もう火の粉と熱さで死にさうである。この時荷物の中から、アンペラを見つけてバラ／＼撒いてくれた人がある。實にアンペラで幾十幾百の人命は救助された。又火を浴びせかけられるのでアンペラを水に浸してかぶり左手でさへ右手で水をかけてゐた。遂に泳げる者は川の中へ真中へ泳ぎ出した。

此の時三つばかりになる女の子供を抱いた三十五六歳の婦人が水の中ですがりついた。

「どうか助けて下さい」と生死の境に在る眞の叫びに動かされて二哩位は泳げるのだから救へるか知らんと思つた。そして出町君は二人をたすけようとあせつた。

水勢にまかせて流れてゐると筏から一本の綱がながれてゐたのを握ることが出来た。これをたよりに三人とも筏に上つた。感謝した母親と火と熱をさける爲めに約六時間水に浸つてゐた。溺死者は流れて来る。船は燃える。人は水に飛び込む。落ちる。惨又惨實に言語につくせぬ有様となつた。

午後八時過ぎた頃本所河岸の方は人も動く。色々と名を呼んでゐる様である。彼等二人を陸にあげて別れた。ぬれた洋服を餘焰で乾かして着た。飢えてゐた。

出町君は踏みつぶされた西瓜の一片を見つけ大川で洗つて食べた。二日朝になると焼跡を見に出掛けた。

電車通りも死屍累々、眼もあてられぬ有様である。死に類した二十二、三歳の青年を見つけて飯と水とを與へた。「今まで誰一人水さへくれる人はありませんでした。もう死んでも何の心残りもありません。」と言つた。

今一人の爛れ焦げた青年に救助を求められたので水を與へた。二日午前九時頃、宿の石井家の人々と會ふ事が出来て共に無事を喜んだ。涙が本當に流れて止められなかつた。其の後五日まで各所に世話

になつた。一人の職工道之助といふ者をつれて青森縣の實家へ歸つた。道之助は重い病氣になつたが九月廿四五日には快方に向つた。今も尚青森にゐる。

本橋小學校訓導 出町寛一郎君 (二十四歳)

●大日本麥酒株式會社の四勇士

吾妻橋を渡つて向島の堤を少し行くと、巨大な煉瓦造りの建物が眼につく。これが大日本麥酒株式會社である。九月一日の大震災には社員一同、避難民の救助保護に目ざましい活動をした。盲人三四名は社員が脊負つて安全な場所に避難した。職工中にもえらい働きをした者が澤山あつた。が、次に擧げる四勇士は會社の爲め、人命救助に一身一家を顧みず、最後まで奮闘した者である。上の行ふ所下之を習ふとは云へ、町餘離れた神谷酒造會社一同がさつさと自分たちだけ避難してしまつた事など考へるとこの會社には實に貴い氣風が流れてゐる。

小島龍太郎は本所區中之郷瓦町二十二番地に住し、同町一番地の大日本麥酒株式會社吾妻工場に職

工として勤勉に働いてゐた。九月一日の震災當時も會社で働いてゐたが、本所一面が土煙から黒煙に黒煙から猛火に、と化すると、避難者は南から悲鳴をあげつゝ火に追はれて會社の方へ逃げて來た。その有様は恰も潮の如く、荷車を引く者、自轉車、自働車を持つて逃げる者、或ひは荷を脊負ひ、老幼婦女子の手を引く者等、實に數萬の人々が狂氣のやうになつてゐる。會社に荷物を頼む者、避難のために逃げ込む者等限りがない。

暫くすると、火勢は愈々猛烈を極め、土藏造りも煉瓦造りも一紙めにせんと攻め寄せて來た。流石の大會社も忽ち猛火を浴びるやうになつたので、先づ避難民を逃かし、屈強な者ばかり居残つたが、家や妻子を思ふ者は三々五々立ち去つてしまつた。その時最後まで消防に努力してゐた龍太郎も終に堪え兼ね、河中に身を投じて逃れんとした。水の中には浮きつ沈みつ苦悶する者が數限りない。龍太郎は水泳の心得があるのを幸ひ、勇氣を振つて彼等を救ひ上げた。

それから更に火勢を見て上陸し、避難民に托された貴重品に對し防火の手配をした。が漂々たる黒煙は紅の火焰を吹き出し、さしもの龍太郎も再び水中に飛び込まなければならなかつた。河の中央にある船に泳ぎ着いて、避難しようと思つたが、助けて〜といふ悲鳴に呼び返されて、身に近い者から順々に救助して船の上にあげた。既に救助した者數十人、龍太郎は疲勞して船にあがつた眞紅に

焼けたトタン板は雨のやうに頭上に降りかかり、婦女子の頭髮はちり／＼と焦げる。龍太郎は疲れてはゐたが、元氣體力人に優れた者であるから、船中に入るや否や、船頭その他を勵まして指揮者となり飛火や火傷を防いで、翌日の夜明けに至るまで寸時も休まず働いた。

二

猪本成名(二十歳)は龍太郎と同じ会社に勤めて、家族は向島請地町一六六番に住んでゐる。

九月一日の大事變に際し、成名は龍太郎等と力を合はせて會社のために働いてゐた。危険は忽ち迫つて陸上には身をおく所もなくなつたので、水泳の心得のあつた成名は火焰のために眞赤に見える川の中へ飛び込んだ。川の中央には高瀬船とか云ふ大きい船のあるのが眼についたので、これに泳ぎ着き、何とかして浮きつ沈みつ流れる人々を救助してやらうと考へた。見ると、親船には一艘の小舟が繋いであるので、早速船頭に頼んでその小舟に打乗り、水上署枕橋派出所附近へ漕いで行くと、深瀬に入つて泳げない者が既に瀕死の有様である。成名はこれらの人を小舟に引上げて親船に送り、再び取つて返して送ると云ふ風にして、五十有餘名を救つた。船の中では船頭と共に水を注いで人々を保護し、翌曉は會社から食物衣類を持つて來て避難民に分け與へた。

三

松本弓治(二十六歳)は同志の者と會社のために働いてゐた。危険が刻々に迫つて來ると、それらの者も皆自由に逃げ出した。弓治は妻子の様子も不明であつたが、今は家族を觀る暇はない。兩岸の火焰が眞赤にうつる隅田川にざんぶと飛び込み、瓶を積んだ舟に泳ぎ着き、それにあがつて瓶を悉く川の中に投げ捨てた。川の中には泳ぐ力もない人が浮きつ沈みつして、そこにもこゝにも流れてゐる。助けを呼ぶ者もあれば、また聲さへ出せぬ者もある。弓治は船竿を見つけて川の中に差し出した。すると皆それにすがりつく。それを引寄せて舟の上にあげる。かうして二十有餘名を救つた。それから霰の如く降つて來る眞赤なトタン板や魔の如く荒れ狂ふ強風、水流を戦つて避難民の保護に努めたのである。

四

増田千代三郎(四十三歳)は龍太郎と前後して、何處の避難民の子とも分らぬ小さな子供を抱いて、猛火に脊をあぶられながら、逃げた。

けれども既に枕橋は焼け落ち、全く逃げ場がなくなつてしまつた。水上署枕橋派出所には誰もゐない。思案にくれてゐる中にも火は容赦せず迫つて來る。止むなく子供を抱いたまゝ、隅田川に飛び込んだ。幼い時から水泳が好きで相當上達してゐたので、泳いでゐると、瓶を積んだ船が浮んでゐるのが

眼についた。天の助けと打喜んで泳ぎ着き、瓶を河中に投げ棄てた、それから大きな丸太が船中にあつたのを幸ひ、それを差し出すと、溺れんとしてゐる避難民がこれにすがりついた。それを船に引上げて手當をし、かうして七名餘を救つた。けれども火勢と水流の猛烈さには流石もと海軍一等兵曹として活動した勇士も堪えかね、漸く川の中央にあつた大船まで竿さして、船中にある者を救ふことが出来たのである。

本所區向島大日本ビール會社

小島龍太郎君

猪本成名君 (三十歳)

松本弓治君 (三十六歳)

増田千代三郎君 (四十三歳)

●倒壊家屋より危険を冒して四名を救助す

東京市臺東尋常小學校訓導高島善左衛門君は、九月一日の正午近くに、四名の同僚と共に校門を出て、一丁ばかり語ひながら歩いて來た。すると、突然、物凄いゴーといふ異様な音を耳にすると同時に、今迄歩いて來た大地は、波のやうにゆらくと振れ、足は忽ちすくはれて、其の場に倒れやうとした。皆の者が一しよに抱き合つてゐる間に、路の左側の三島神社の堂が、一大音響を發して倒壊し

左側の二階建の長屋は何れも二三尺も左右に搖れて、屋根瓦は落ち、土煙が上つて、とう／＼其の家も半潰状態となつて傾いてしまつた。

難を避けんとする人々は、家の中から道路へ飛び出して右往左往する。救ひを求むる悲鳴が四方から起つてくる。一分二分三分……十分も過ぎたかと想ふ頃やつと震動が止んだ。

もう大丈夫だらうと、金杉上町の停留場を抜けて、車坂千住大橋間の電車路を車坂町の方へ向つた道には避難者がもう人垣を築いてゐる。氏は自分の下宿の事よりも、學校の事が急に安じられて來たので、一人舞ひもどつて見ると、學校には別に大した破損もなかつたが、それでも壁はくづれ、階段は曲り、雨天體操場は大分西の方に傾斜してゐた。

其の時、小使の柳原ゆき(五三)が、學校の前、入谷町一三六番地に、文房具店を開いてゐる越村外次氏(四七)の家が全く潰れて、主人及妻とく(三九)の二人が下積になつてゐるから、早く助けて下さい。といふ事を他の小使に話した。

元來非常に同情深い高島君はこれ聞きつけて、「ヨシ俺が助けてやらう」と叫んで、現場に一目散に駆けつけた。此の時はまだ大地震の後まだいくらも時間が過ぎてゐないから、餘震が頻々とやつてくるので、誰一人此の越村夫婦の者を救ひ出さうとするものがなかつた。それに潰れ家と校舎との間

は僅かに九尺位の狭い道路があるだけだから、若し校舎が倒潰したなら、命のないことは明かだつたからである。

高島君は、早速屋根に登つて、瓦をめぐり、板を剝し、鋸で棟などを挽き切つて、ぐらぐらと地震で氣味の悪いのを恐れずに、中に這つて行くと、主人は幸ひ店の戸棚の傍に座つてゐたから、別に大した負傷も受けなかつたが、妻の方は梁で腰の邊を強く打たれて、身動きも出来ない。それでも座蒲團が腰の上にかぶさつてゐたので、いくらかよかつたと見えて、やつと微かな呼吸を續けてゐた。

『今出して上げるから、氣をしつかり持つて……』

と言ひながら、其時丁度助けに来てくれた同番地に住む活版業石田傳氏(四〇)と力を合せて、梁をやつと肩にかついで、救出した。

次ぎに隣家の左官職齋藤金吉君(三六)と同人の母とくさん(六八)も、家が倒れて、壓死せんとしてゐたので、時を移さず、屋根を破り、天井を取りのけて、柱のために腰部を狭まれて、やつと藻掻いでゐる老婆を、漸く助け出し、金吉君は殆んど氣絶して死ぬばかりであつたが、これも非常に骨折つて救ひ出し、種々手當を施して、やつと蘇生させた。も少し時間が遅れたならば、到底命はなかつたといふ事である。

そればかりでなく、高島君は、これらの人々を學校の運動場に背負つて来て、何れも水を與へたり藥をのませたりして、非常に親切看護した。

尙同氏は、神田にあつた自分の下宿屋の焼失するのを意とせず、進んで當日の宿直を擔任し、學校の焼失せんとする際に當つては、校庭に避難し來つた二三百の民衆を指揮して災危を脱れしめると同時に重要書類の持退等に奮闘したるなど、眞に私事を捨て、職務に一身を捧げて働いた第一人者である。

東京市下谷區入谷町 東京市臺東尋常小學校訓導 高島 善右衛門君 (三十歳)

●神子島熊夫君の人命救助

深川區東仲町二二に、永年酒商を営んでゐた神子島熊夫さん(二八)は、あの地震と共に電車通りへ飛出したが、裏の方には可なり澤山の倒潰家屋があつて騒ぎ立て、ゐた。其のうち、佐々木さんといふ家には、二人の女の子が下敷になつて出られないといふことを告げる人があつたので、それは大變だといふので、すぐ鋸を持つて救助に赴いた。

神子島さんは、鋸を持って屋根を破り柱を切つて之を救出さうとしたが、仲々容易な事ではなかつた。その中に、他の人々も馳付けたので、其の人たちの手も借りてとうとう二人の女を家の下から引出すことが出来た。それは十歳と二十一歳になる姉妹で、姉の方は既に養子をしてあつたのだが、夫は勤めに出て家には居なかつたのだ。

神子島さんは、負傷した姉妹を負ふつたりして附近の醫師に馳付けたが、續いて搖ぐ餘震に慄えたお醫者さんには碌々治療も出来ないうちに、可哀相な妹は重い傷所のために生命を落した。さうかうする間に、四隣に起つた火が燃え延びてきて、其處に居ることが出来なくなつたので、深川公園の中に連れ出した。年とつた親が死んだ我が子を背負うて逝る有様がどんなに人を悲しませたか。それを見ると、神子島さんは尙ほ一層不憫になつて、姉の方を背にして出来る丈の世話をやいてやつた。——さうしてゐる間に自分の家には遠慮なく火の手が伸びた。一と先づ此の人たちを安全な地點に避難させて、さて引返して自分の家に来たときには、最早やどうすることも出来ないことになつてゐた僅かの家財を持出したものさへ空しく目の前で灰になつて行くのを傍観するだけであつた。

神子島さんには母があつて、今新潟縣南蒲原郡本成寺村金子に居るといふことである。而も此の家は親の代から熱心な眞宗の信者であつた。されば今日でも消息のある毎に佛の功德の偉大なことを證

讀し、束の間も南無阿彌陀佛を忘れまいぞといふことを誠めてくるといふことである。神子島さんはさうした親を持つた關係からか極めて慈悲心に富んだ人で、かうした場合には奮つて人の爲めに働くことをする。かつて此の方面に大洪水のあつた折には三俵の米を炊出して附近の人を賑はしたこともある。實は今度も二斗の米と釜は外へ出したのだつたがどうすることも出来なかつたといふことである。

本籍 新潟縣南蒲原郡本成寺村金子 西南 神子島熊夫君 (二十八歳)
現住所 深川區門前東仲町二十二番地

防
火
篇

● 浅草観音の防火に成功す

観音堂の焼け残つたについて、色々迷信的な流言がいひふらされた。中には常識で考へても判るやうな馬鹿氣た事がさも尤もらしく、信仰と結び付いてゐるが、かうなるとかへつて観音様の尊嚴を害することになる。観音堂が焼失を免れたについては隠れたる人々の努力が與つて大いに力ある。

浅草區馬道町五丁目十一番地に馬場斧吉といふ、今年六十歳の元氣な老人がゐる。浅草區第四番組の消防組頭で經驗に富み且つ信望の最も篤い齋頭であつた。君は南部信濃守の家臣、馬術指南役伊藤長政の後裔で、十代に亘つて組頭を勤め、馬場の頭といへばこの道の人は勿論、界限で誰知らぬ者がない程名高い人で、現に借地借家調停員として町内の爲めに盡瘁してゐるのである。

戦慄すべきあの猛火が浅草一帯を襲ふた時、千束町、花川戸、馬道町遠くは本所深川方面から數萬の人々が家財を背負つて公園に殺到した。公園内の空地といふ空地は悉く人を以て埋められた。而して一時の危険から免れてこゝに避難した人々は、或は怖しかつた事を話あつてゐる者もあれば、疲勞と飢とで荷物を枕に眠りに就いてゐる者もあつた。

誰もくこゝばかりは安全地帯と思つてゐたのもつかの間、午後八時頃になつて火は公園を全く包圍してしまつた。火の粉は吹雪のやうに降りかゝるかと思ふと紅蓮の焰は人も建物も一舐といふ勢で迫つて来る。人々は總立ちとなつて、喚く者、荷物を背負つて逃げまどうもの、觀世音を念ずるもの、お題目を唱ふるもの、今迄の極樂の巷が一轉してあはや焦熱地獄と化せんとする有様で、中に集つた數萬の人命は眞に風前の燈火であつた。

馬場の頭は家族及八名の組子を連れて、同じくこの境内に避難してゐた。

公園の北東の方面には淺草神社、披官稻荷、社務所御輿藏等皆民家に接近した建物が軒を並べて建てられて境内でもこの方面が最も危険區域である。北風に煽られた火が刻々に迫るのを見た頭は、組子を指揮して手にく鋸、玄能、その他の用具を以て北に馳せ、東に廻り、火の迫る先々をめぐめて力の限りに家をこはして防火に盡した。公園の裏手は高層な建物はないが小さい二階家が密集してゐて境内とすれくゝに建てられてゐる。又社務所の前の廣場には、神社改築に要する材料が處せまきまで積み重ねてある。東側が危ういと見れば、火の粉を滿身に浴びながら破壊してくいとめた。

北側の猛火は又もや一段と火勢が増すばかり。いかに死力を盡しても身は鐵石ではない。人力には限度がある。さすがの頭も遂に大聲をあげて、『公園が危険だぞ。命の惜しいもの皆出てこい。みんな

バケツを持つて集れ』と命令した。そして群集を公園の池の畔まで二列縦隊に並べて、水を汲みあげては手渡し次々に汲んでは送りして一生懸命に働いた。然し残念な事には既に東側の二天門に燃えうつり、又北側の披官稻荷も危険に類してゐる。これを見た群集は唯アレくくと悲鳴をあげるばかりで消さうともしない。もし境内中のどの建物に燃えうつしても觀音堂は助からぬ。觀音堂が焼ければ重圍の中にある數萬人は地獄の責苦を受けなければならぬ。これを見た頭は疲れ切つてゐる組子を勵ましく各持場をきめて、燃えつゝある二天門をはじめ披官稻荷、社務所等の屋根に飛び乗り、齋口で屋根をかきむしつたり、群集の運ぶ水をかけて必死になつて防火に盡した。氏自身は社務所に最も接近した土藏の上で水をかぶりながら死守してゐる一方、聲を限りに指揮を續けた。かくして數時間に亘る貴い努力によつて、午後十時半さしもの劫火も勢が衰へて、公園は危険界から脱し、數萬の人命は災禍から免れる事が出来たのである。鎮火後は馬場の頭に感謝の辭を呈する聲、鑼口を鳴らす音と和して一しほの賑しさにかへつた。

● 共同の力よく猛火を喰止める(東京驛)

大正十一年九月一日正午の大激震に次いで諸々に火災が起つた。東京鐵道機關庫(鍛冶橋内)主任岡本氏は事態の容易ならざるを見るや、部員各自が自宅の心配なるべきを同情し、直ちに歸宅を許した。併し其の安否を確めたならば至急歸還するやうに訓辭した。庫員一同は主任の情ある言葉に感じて皆自宅の安否を知らうとして馳せ歸つたが暫くして皆戻つて來た。銀座方面の火煙は物凄く見える有樂町の驛も最早危い。

岡本主任は部下の二十名に有樂町驛の防火應援を命じた。防火隊が高架線傳ひに驛に近づいた頃は全く手のつけやうもない。防火隊は手を空しくして引揚げた。折から吹き募る南の風に機關庫自らも風下に立つやうになつて來たので歸つて來た消火隊と共に全員は自らを防衛せねばならなくなつた。機關庫には鐵道運輸の原動力たる機關車がぎつしり入つてゐた。是を焼いてはならぬ。部員は二手にわかれた。一隊は機關庫の屋上に登り水をかけ、他は地上に落ちる火の粉に水をかけはじめた。水といつてもほんの少ししか出ない水道の水をバケツにためたのである。歸宅中の全員は皆歸つて來て其

の數六十名、火は刻々に迫つて來る。風は益強くなる。今は消防隊も手の下しやうがない。萬一を慮つて岡本主任は、重要書類を高架線上に運搬させた。機關庫は全部廣場に出動を命じたので部員の一部はこれに乗り込んで次々と機關庫から適當の所に運んだ。附近一帯は一物の遮るものがなくなつた火の粉が何處におちてもすぐわかるやうになつた。防火の配置は充分である。主任の指命一下すれば六十名の部員は手足の如く働かうとしてゐる。

有樂座は火の中に入つた。電氣局の三階は火をふいてゐる。そのうちに風向が變つたらしく今まで構内一帯にかぶさつた銀座の煙は來なくなつた。先づ安心と思つたも束の間、神田方面の火の手が遂に鐵道本省を襲はふとしてゐる。日は大分西に傾いた。

機關庫の屋根には時々丸太程の太さの棒が燃えながら墜ちるやうになつた。

先程から危ふげに見えた電氣局の火は、市の水道課の人たちがかけつけたので消えた模様。

東方の火は川一つ隔ててゐるし、ただ恐るべきは、神田方面からのである。本省に續いて官舎がある。列車電燈所がある。倉庫がある。引込線には列車がぎつしりつまつてゐる。此れに飛火した結果を思つた時、機關部員は一齊に奮起した。多數の力によつて此の火を阻止せんにはと固い團結の心が各の心に湧いた。官舎が危険に迫つたので荷物列車が編制される。列車は官舎の前のレールに入つた

舎内の荷物はどん／＼車内に投げ込まれる。先頭には機関車が黒い煙を吐いて出動命令を今やおそしと待構へてゐる。

とう／＼火は印刷局を焼いた。餘燼は忽ち鐵道省の屋根に飛んだ。危機は既に到着したのである。大震勃發と同時に必ず臨時列車編制の命がある事と思つて機関車の火は皆残しておいたが、後に本省から通知があつて線路の故障のために列車は運轉が出来ないといふ事がわかつた。そのために機関車の火は全部消してしまつたのである。處が此の有様、鐵道省の火は構内に散在する。大小の建物に移るだらう。レールの上にある列車に移るだらう。倒潰したホームの屋根を火が傳はれば東京驛の大建築は救ふことは出来ない。先づ移動することの出来る列車より先きに安全地帯へ引き出すにこした策のないのを知つた部員一同は再び機関車に火を入れた。先程官舎の荷物を満載した荷物列車は此の時運轉を始めて安全線に入つて行く。鐵道省は猛火の包む處となつた。列車の移動は迅速に開始された。列車の尾には火がついた。煙の一杯こもつた車内をおかして連結手が走つて行き最後の車を巧みに引はなす。こんな冒険が各所に行はれて列車は追々安全線に入つて行つた。

一方高田商會を襲つた火は電車線路を越して自動車の車庫に移つた。ガソリンの箱が物凄しい音をして爆發する。梁瀬自動車會社にも延焼した。ドンドンとガソリン罐の破裂の音が恐ろしく聞える

ガード越しにガソリンの雨が降つて来る。下では酸不足してゐると見えて上の方へ行つた時に眞赤な火の柱になる。此の時發車線上にはまだ列車が一つ置いてあつた。これに火が移れば猛火はガードを上下から越してすでに此の列車は危い。然し捨て置けば列車の火は必ずや附近に散在する諸建物に移り倒潰したホームの屋根傳ひに東京驛を焼くにちがひない。東京驛を急より救ふには先づ列車を救ひ出さねばならぬ。列車を救出するには機関車を派遣せねばならぬ。然し機関車といふ機関車は皆列車の先頭についてこれを牽引して安全線に入つてしまつたので容易にガード上の線に出すことは出来ない。此の時ただ一つの機関車が東京驛建築物の側面にあつたのに氣がついた。動かすべきは此の機関車を措いて他にはない。しかし異ふ線路にあるので轉轍を要するのだ。其の一回の轉轍のためには機関車をあの猛火の近くに持ち行かねばならない。然も轉轍終了までの若干時間を此處に待たねばならない。誰かよく猛火の中に機関車を乗り入れる者ぞ。轉轍時間の長短は運轉手の運命を決するであらう。忽ち機関車には決死の運轉手乗り込んだ。車は速力を速めて猛火に接近して行く。同時に轉轍手の黒い影はレールの上を馳せて行つた。ああこの時、轉轍手は跳いた。倒れた。煙にむせかへつたのだ。火の粉の煙を眞向から受けては到底進まれるものではない。轉轍手は息をつくために地に口をあてて呼吸をしたのであつた。煙の中から機関車の汽笛がなる轉轍手は再び起つた。轉轍器に漸くに

して駆けよつて轉轍器はかへされた。機關車は動き出した。此の間僅かに五分、列車は此の勇敢な運轉手と轉轍手によつて救ひ出された。おかげで東京驛は災危を免かれたのだ。

此の決死的行動が終つた時、錢道省は其の窓から火焰を熾に吹き出した。火はとう／＼東京驛構内に入つた。錢道省の火は官舎に移るであらう。官舎の火は寄宿舎に、寄宿舎の火は一等寢臺の備品(價格にして十數萬圓)を入れた倉庫へ、倉庫から列車電燈所が、列車檢車所機關庫と漸次火が移つたら……と誰れも考へない者はない。東京驛を回る丸ビル、中央郵便局、三菱銀行、東京市役所、東京府廳は類焼を免かれまい。如何にして鐵道省からの火を防がうかとは當面の問題となつた。如かず低い建物、小さい建物の所で防がんと、一團となつて列車電燈所と教習所の間を駆けつけた。教習所と電燈所との隔りはわづか一間、しかも其處には列車から捨てられた辨當の折などが山と積まれてある可燃性のないものは一つもない。機關庫部員と列車電燈所部員とは此處に協力して、可燃性物の除去と水を注ぐことに全精力を集中した。幸ひにして列車電燈所の洗面所の水道は五つほど水の出るのがあつたのでこれにホースをつけた。又客車に入れて置いた水はバケツに移しトロに乗せて消火の線へと運んだ。折も折八番線に入つてゐた急行列車が附近火災の熱によつて其のペンキは發火點に達した此の時人々は柄のついた雑巾を持つて側面からバタ／＼とぬらしたのである。多數の力は恐ろしいも

のでつひに火を此處で喰止めてしまつた。

一方對岸城邊河岸の火は又迫つて來た。川一つ隔てゝゐるのだが電燈所の建物は熱くなつた。此のままにして置けば發火する。此の時市役所の人々、水道部の人々がかけつけて來た。人多ければ火を壓する。バケツに紐をつけてあのお濠の泥水を汲んでかけ、かけては汲んだ。此の時濠には日本橋方面の避難者に乗せた舟が澤山あつた。皆城邊河岸が燃えるので電燈所の下の岸に舟をつないでゐた

「おい船頭さん、そこから水をかけて呉れ」
と陸から下を向いて頼むと、舟も此岸が焼けては命がないと、

「おー」

と一聲二十に垂んとする舟からは雨の如くに水を建物の側面に注いで呉れた。市役所からも應援の人が多勢かけつけたが中にも感心だつたのは馬力人夫だ。

「火がやつて來ちやアおれたちの馬が死ぬ、おれたちや、あの馬のおかげで喰つてけるんだ。馬を殺しちやすまない。こんな時に恩返しをしなけりやする時あないぞ、消せ〜」

列車に移らうとする火は此處でも亦人の勢ひに負けた。日が暮れたのも知らず、時の移るのを忘れた人たちは火勢が漸く弱るにつれて今何時頃かしらんと時計を見た。時方に午前五時。

機関庫部員が猛火の中から列車は百輛と安全に移動したのは偉功である。常に火に關する知識が深かつた點も勿論あるに相違ない。然し全く責任觀念の旺盛に歸する。東京驛が巍然として立つのを眺める度に、其の背後に之等の人々が身命を賭して働いた事を感謝せねばならぬ。

沈着なる機関庫部員は更に二日以後を職權以外の仕事に異常な緊張を續けた。

日本橋、京橋方面の住民は一日から三日にかけて、馬場先の廣場へ！ 二重橋外へ！

と陸續として鍛冶橋を渡つて來た。さしもに廣い馬場先も、もう人で埋まつてしまつた。立錐の餘地もない。機関庫の前も市役所の前も人と荷物で埋つた。老人子供のあはれな姿が見える。

機関庫の人々は、線路が修理される迄は、ひまになつた。誰れいふとなく、

「避難者の中の老幼を收容世話してやらうぢやないか、どうせ用はないんだから」

といふことになつて、門をあけて機関庫内を開放した。始めは老幼婦女に限つたがだん／＼に避難場所があることが知れると我も我もと押寄せて來た。其の數約三千人。岡本主任は遂に客車を開放した避難者中で病氣で因るものもあつた。それ等の人々は轉便寢臺を貸與した。又前から構内に置いてあつた古い材木を地面に並べて毛布をかけて置く、數千の避難者は此處に安全な避難地を得たのである。火を遁れるのと恐ろしさで夢中だつた人々は二日の晝頃になつて食料の問題を考へ出した。腹は

たまらなく減り出した急に咽が渴き出した。

機関庫の中には水の出る處は一箇所しかない。飲まうとする人は非常に多い。水の制限をしなければならぬので機関部員は水道の傍に立つて渴した人々を一行に並べて一杯宛考へた。

米を用意しなければならぬ。構内には購賣部といふのが今まで設けられてあつた。幸ひ少しの米が貯へてあつたので、そこから米一俵と麥三斗を出して來る。今度は炊出。釜を探して來た、竈がないので散らばつてゐる石を積み上げかまどを築き、炊き始めた。握り飯にして分配となると二日間も食へずに働いた人々だから直に不足してしまつた。少ない米を多勢の人にわけるのは粥にしなくてはならなくなつた。第二回からは茶碗に各一杯づゝ粥にして配つた。しかし人々は何一つ不平などは言はなかつた。

機関庫の部員はもうすつかり避難者救助係になつた。六十名の部員は交代になつて來た。そして人々の世話を始めた。粥にしても直きに米は不足してしまつた。構内には一粒の米もなくなつた。主任が代表して市役所に米を取りに行つた。玄米を八俵程貰へたので早速之が炊出を始めた。二列に並んだ人々は此の主任始め部員全體が心からの骨折に感謝しながら靜肅に米の配給を受けた。避難者も此の頃から少し許減つて行つた。半分位にはなつたらう。減つては來たが米は忽ちに不足する。部員は

家から通つて来る度に何かしら土産を持つて来る事にした。白米を風呂敷に一包み持つて来る者もあつた。駄菓子や新聞を包んで持つて来る者もあつた。かうして毎日避難者を慰め勞はつた。青物市場の焼あとでバナナの安賣りがあると聞いた主任岡本氏は一名の部員を派して三籠ほどのバナナを買つて來させこれを避難した人に頒けた。

三日四日と經つうちに大小便があらちらにしてあるやうになつて夜などはうつかり歩けなくなつた。此の掃除は誰がする、矢張り部員の手を借りねばならなかつた。傳染病などを構内から出しては申譯けがないと、主任の室に備へてあつた消毒薬は全部使つてしまふ。客車の中でお産をする人も出来る。その世話までやつた。湯に入らないでは病人が續出するかも知れない。風呂をつかはしてあげやうと考へた。水はあるし石炭は山のやうに積まれてある。浴槽は常に備へつけてあつたのを使へばよい。部員は風呂を立てて人々を喜ばした。これが九月四日の事である。水だつて澤山あるわけではなかつた。ためておかうにも晝のうちは始終使はれてゐるのでためやうもない。夜になつて皆が寢た頃明日の風呂の水を汲み溜めた。夜明けまでには湯がわく。何がさて、汗と埃とに塗られた人たちなので湯のわいた事を聞くと皆がどや／＼とやつて来る。そこで一回十五人に限り、時間を五分間とした。何遍も何遍も交代した。汚れるととりかへ／＼して數百人の人々が此處に汗と埃とをとおとした。

夜に入つて浴槽を見れば底の方に垢が二寸程もたまつてゐたといふ。

國へ歸りたくても金のない人のあるのが判つた時、岡本主任は鐵道省へ出かけて無賃證明を請求した。汽車は開通した。「金が無くても國へ歸れます」と書いた紙をあららに貼つた。これを見て歸つた人も大分あつて皆部員一同の勞を謝した。

二日の晩から恐ろしい噂が立つたので、夜警の必要を認め、避難者の中から志願者を募つた處が七十八名ばかりあつた。殺氣立つた人をあつめ、呉れ／＼も間違のないやうに、鮮人を見てもつまらぬ考を起さぬやうに、思案に餘れば主任に一應の相談をするやうに言ひきかせた。そのために構内にはそうした事件は一つも起らなかつた。

或仕事師の如き、部員の努力に感謝して、鐵道のためには何んなことでも致しますといつて涙を流して喜こんだ程だ。

そのうちに運輸事業が急がしくなつたので、避難者の收容も打切らねばならなくなつた。人々をあとめて其の旨を話したので人々は追々にこの私設收容所を出て行つた。

東京驛を火災から免かれさせたのは此の人々の奮闘の賜である。死も辭せぬ此の人々のお蔭であるひいて驛一帯の高層建築を恐るべき震火災から救つたのも此の人々であるといつても過言ではない。

續いて起つた避難者の收容にも喜んで當る。其の心の尊さ美しさ仰いで見るべきである。部員をしてこれだけの働きをさせたのは一に岡本主任の徳望の高さに歸する。又主任の部下を信頼し、部下も又主任を信頼した結果に外ならぬ。親分子分の情義は協同の努力、夫れは尊い社員の實であつた。

東京鐵道局詰

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 宮島秀四郎君 | 前島銀次郎君 | 山本重太郎君 | 瀬戸彌四郎君 |
| 杉崎佐七郎君 | 梁瀬 正明君 | 宮島 正君 | 相川三千藏君 |
| 杉本敬喜知君 | 大野 喜又君 | 長田 政吉君 | 田口 清人君 |
| 山本 寅吉君 | 大野 茂美君 | 鈴木 高雄君 | 戸村 征夫君 |
| 菊池 林藏君 | 山口 武尾君 | 山田 藤一君 | 鈴木 清君 |
| 森野 盛平君 | 渡邊 照君 | 小松 矩重君 | 松島 卓君 |
| 福地源一郎君 | 尾形 義一君 | 三田 正月君 | 税所 福松君 |
| 鈴木 幸吉君 | 川又 軍次君 | 吉見 正憲君 | 青山 政八君 |
| 古山 甚平君 | 森 三郎君 | 仁壽喜三郎君 | 古山宇忠治君 |
| 町田 高雄君 | 荒川 昇一君 | 生越佐與治君 | 内田豊次郎君 |
| | | 渡邊 保三君 | 佐藤 虎二君 |

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 佐藤愛太郎君 | 瀬戸又三郎君 | 高野 正木君 | 小澤清太郎君 |
| 影島 善策君 | 田中 義包君 | 近藤 軍七君 | 大森 三壽君 |
| 西村 直敏君 | 淺見 福藏君 | 浦部 喜重君 | 藤田 行夫君 |
| 淺見 良平君 | 山下 常次君 | 吉 川 君 | 川本 滋君 |
| 大澤豊太郎君 | 飯島 三郎君 | 眞保登代司君 | 前島幸次郎君 |

●豊國銀行はかうして助かつた

豊國銀行京橋支店は、鐵筋コンクリートの堅牢な建物なので、未曾有の大震災にも、壁一つ剝落しなかつた一方家族の安否が氣遣はれるので午後三時急いで歸宅した。所が同日夜半思ひがけなくも、日本橋銀座の方面から襲來した猛火が同支店の周圍を火の海に化したとの噂とりどり故、一刻も早く駆けつけたくは思ふが、何にせよ霞町の自宅より京橋への通筋に當る赤坂溜池、芝西久保巴町、御成門、金杉橋の何れも延焼し、交通は全く遮断されたので如何ともする能はず、不安の中に夜も白んだので、仕度を整へ焼失區域の割合に短い靈南坂米國大使館燒跡を踏み超え、虎の門丸の内の避難者混

亂の中を漸くきり抜け、午前八時頃鍛冶橋に立つて前方炎煙模糊の中に常々見慣れた支店の圓塔をかすかに認め得たので、苦勞も打ち忘れ一氣に駆けつけて見ると、小使室と應接室の窓からは物凄い火炎を吐いては居ても、嬉しや營業場はカーテンの色さへ變らで黒煙の中に屹立して居る。精限り根限り盡したなら萬が一助からぬ事もあるまい。と突嗟の間に決心の臍を固め、折よく現場に居合せた書記伊藤富作氏と協力して、附近の焼跡からバケツ針金など探し求めて釣瓶を急造し水面丈餘の石垣上から京橋川の濁水を汲みとり、交々猛火に投かけたが却て火勢を煽るばかり、効果は少しも見えぬ。一時は失望落膽したが、折よく次席和歌森利久氏書記小林安雄氏の駆け参じたのに力を得て、一人は河中に一人は石垣の中途に、残る二人は運搬放水と役割を定め、四人は全く根限り働いた。熱中の勞働として非常に渴を覺えたが、幸、隣家の水道より餘滴のチヨロチヨロと滴りをるに咽を濕しつゝ、凌いだのであつた。かくてさしもの猛火も次第に勢が衰へた。稍安堵の折柄又もや二階の扉が焼け落ちて營業場の金庫前の床に燃え移つて再び火勢を盛り返すの残念さこそは天井も床も半ば焼け落ちた四間程の廊下を隔てゝ居る事として、外から投げつける水もいつかな届かぬもどかしさ。今迄の心盡しもみすみす水の泡かと思へば無念口惜し。よしかうなつては肉弾以て火勢に抗せんのみと、「四人の中での年嵩て老先短いこの乃公いでや先陣仕らん」戲言交りに一氣に廊下に飛び込めば、脆くも蹠き焼け落

ちた熱土の上で右膝關節に火傷を負ふ。「何ぞこれしき」起つて難なく一杯を猛火にかくれば、續く和歌森伊藤の面々、飛び込み飛び込み數十杯の水をあびせた程に黒煙の漲つて居た營業場も次第にテール椅子等の影を認める様になつた。先づ一安心。疲勞困憊。さる程に一難は去つたがまた一難來る二階の食堂からしきりに黒煙を吐いて居るので、一同はまたしても勇躍して消火に努めようとはしたが、階段は既に焼け落ちた事として翼なき身の上らうにも由なく、空しく焦慮手に汗して見上げるばかり、折柄消防夫兩名、長い竹梯子を持つて通行するのを認めたので、天の助けとばかり打ち喜んで其の袖に縋つた。「數杯の水で此の建物は助かるのだから是非！」と只管懇願した。極度の疲勞と水の無いとの理由がなければ、手を貸さうとはしなかつたが、百方力説して兎に角も二階の窓から中の様子を覗みだけを辛くも納得させた。その階上に上るや四人は矢繼早に水を運び上げたので、彼等も勢消防に力を盡して呉れたのだ。流石は職掌柄少しの間に二階全部の火を消し止め得た。時は午後二時すぐる頃であつた。

劫火四面を包み、河中には石炭船の物凄く黒煙と沿岸の材木小屋穀物倉庫の焼ける煙とを強風に吹きつけられ、晝尙暗い百度以上の焦熱地獄の中に、僅々四名のものが、満足の防火具ももたで如何程根限り立働いたとて、あの狂暴な猛火を防ぎ止められようとも思はれない。然し前面の京橋川が自然

の防火地帯の用をし、第一相互館に面した後部に窓の少かつたのが、幾分大勢を減殺したからでもあらう。兎まれ思ひ設けぬ奇功を奏し得た。震火災後このあたり通行の人々の、唯一軒焼け残つたのは奇蹟中の奇蹟と噂に上り、又本店が差當りの側營業場として早々に開業し得たのを見ては、四名も心竊かに喜んで居るのである。

銀行からも認められて十月三日左の表彰をうけた。

辭令の寫し。

京橋支店長 太田 金 彌
京橋支店書記 和歌 森 利 久
京橋支店書記 伊 藤 富 作
京橋支店書記 小 林 安 雄

今回ノ大震災ニ際シ克ク其ノ職責ヲ盡シ當行ノ爲メ寄與スル處尠カラズ仍而金壹封を賞與シ其ノ功績ヲ彰ス(各通)

太田氏夫人は語る。主人は店を預つて居るのですから別に何でもないのでありますが、他の三人の方々本

當によく働いて下さつたのださうです。殊に伊藤さんなどは松澤村の松澤病院の御近所におすまひです。ので丸の内の避難の方々と一緒に假泊して毎朝早朝から勤めて下さつたさうです。それも御自分から御語りにならないので、知らないで居ましたが、幼稚園の先生から伺つてはじめてそんなにまでしてお働き下さつた有りがたさと功を誇りなさらぬ美しさを知つた次第でございます。(太田氏の幼兒が通つてゐる麻布笄町朝日幼稚園荒井嫁母は伊藤富作氏邸附近に住んで居るのである。)

二日には主人は三十圓餘り持ち合せただけでした。通り合はした消防夫に全部與へて助力を乞うたが水三杯程運んで行つてしまつたと申します。で主人も水一杯が十圓なんだからいくら金を持つて居ても、金の力では逆も覺束なからうと申しました。と、夫人は當日及翌日に着用したといふ夏服を示されたが、流石に苦心の程が察しられた。

尙太田氏に案内されて現場の方をも詳に見たが、窓硝子の燻り、假造りの階段、焼け残つた床天井等一つとして當時を物語らぬはなく、又屋上の圓塔内迄も事務室として活用されて居るのを見ては、復興の豊國銀行に如何ばかりか寄與したらうと思はせられたのである。

豊國銀行京橋支店長

太田 金 彌君

同

和歌 森 利 久君

同

伊 藤 富 作君

同

小 林 安 雄君

◎勇敢な甥、沈着な女中、周到な人夫頭

小石川區音羽町に岡塾榮川堂といつて雇人四人を置いて手廣に店を張つて居る菓子屋がある。九月一日の晝頃爐に火を焚き立て、菓子の製造に従事してゐるとあの地震がやつて來た。

第一震では店の棚の陳列品が落ちた位であつたが、どうしたはづみか第二震と共に家はグシャッと潰れてしまつた。妻はるさん(四八)は、すばやく表通りに飛び出したが、家族の姿が見えぬ。聲を限りに助を呼ぶと折しも町内人夫頭元齋職の佐藤龜次郎君(四八)が通りかかつて、

「どうした」

と駆け寄つた。

「親方頼みます。主人や店の者が下敷になつてしまひました。早く〜」
とはるさんは叫んだ。

親方は近所の金物屋さんから鋸をかりて屋根を破り屋内にはいらうとした。

家の下敷になつたのは、主人松太郎君(五九) 其の父の長兵衛氏(八一) 富子(八つ) 女中、田中すゑ

(二二六)の五人であつた。裏口から出た甥の山口敏雄君(二二)は、ハツと思ふ。其の際に、富子の悲鳴を聞きつけた。そして僅かに残つて居る隙間から這ひ込んだ。餘震はまだ激しい。頭の上に倒れて居る。柱が鳴る壁が落ちる敏雄君は其の中を物ともせず、探り入つて富子さんを抱いた。女中すゑさんもそこに這ひ出して來た。敏雄君は其の刹那菓子製造のために盛んに焚いてゐた火の事を思ひ出して早く消止めて呉れ、とすゑさんにいふと、すゑさんは落付きはらつて、

「すつかり消しましたからもう大丈夫です。」

と答へた。潰れた家の下敷になつたすゑさんは、落ちて來た材木に燃え附かうとする火を見て、一身の危険をも忘れて身動きもならぬやうな所で一人で消防に盡力したのであつた。若しすゑさんが消し止めねば其の頃一家は火に包まれて居たに違ひない。

其の間に近所の人々が駆け付けた。帳場に居た主人は倒れて來た柱に敷かれて身動きもならなかつた。屋根からはいつて來た一同は手足を取つて引出さうとするがどうもならなかつた、がさすがに長い間齋職をして多くの感謝状まで得てゐる佐藤龜次郎君は用意周到であつた。持つて來た鋸で其の柱を挽き切つた。

松太郎氏は助けられると同時にグツタリとしてしまつた。佐藤君は、

「なんだ、こればかりの事で弱つてしまつてどうする。家の者をどうする。」

など叱るやうにして元氣をつけて外に背負ひ出した。父長兵衛氏も共に救ひ出された。しかし松太郎氏は柱に挟まれたのが因で其の夜腸出血で亡くなつてしまつた。

佐藤君は小石川區關口町に住し親の代からの鳶職であつた。君は此の人命救助に努力したのみでなく災後逸早く焚出しを開始し各町會の焚出し所が完備するまでの四日間、寢食を忘れてこれに専事し九櫻自警團から感謝状をも受けてゐる。

東京市小石川區音羽町九丁目十六番地 山口 敏 雄君 (二十一年)

現住所 前記山口方 田口 すゑ子 (二十六年)

本籍 石川縣鳳至郡本郷村字内保

東京市小石川區關口町一七四番地 佐藤 龜次郎君

小石川區音羽町九丁目十五番地小四方店員 出井 益次郎君

同 區同 町十二 佐藤 留 作君

同 區關口町十五 深瀬 三 吉君

同 區同 町十六 山下 辰之助君

同 區櫻木町 八 遠藤 淺 吉君

●沈着な助手の働き

深川區東町二十九番地にある東京電燈株式會社東町變電所は、舊式ではあるが堅固な建物で、深川區の一部と本所區の一部に送電してゐる。

九月一日の勤務者は、木戸孝吉君(三十歳、山形縣米澤出身)、松永虎熊君(二十二歳、熊本縣人)、千葉繁太郎君、鬼澤康哉君、鈴木友三郎君の五人であつた。突如起つた震災に危険であるから一時外に出たが、この時すでに黒煙濛々として各所にあがり、それが忽ちにして天をも焦がさんとする猛火になつてしまつた。隣接した菊川町から出火したが、風は南から北へと吹いてゐたので、風上にある變電所は安全と認め、助手組長木戸孝吉君は、助手松永虎熊君を残し、他の助手全部は居住地が危険であるから歸宅を許した。

午後四時三十分頃になると、風向は反對に北から南へ吹き始めたので、變電所も危険になつてしまつた。そこで先づ機械油を安全な場所に移し、開閉器全部を開いて危険を避け、次ぎに防火扉の閉鎖に努めたが、この防火扉が舊式であるためと、種々の物品が積み重ねてあつたために、思ふやうに

シャリと閉鎖が出来なかつた。けれども、一寸でも開いておればそこから火が入つて變電所の焼失は免れないことゝなるので、兩人は力を合せて各種の用具を用ひて奮闘した結果、終に閉鎖することが出来たが、ただ右側の一ヶ所は如何に努力しても閉鎖できない。猛火はすでに近づいて危険は刻々に迫つて来る。たつたこの扉一つのために今までの苦心が水の泡となつて變電所を灰燼に歸してしまふのは如何にも残念と、二人は思案した。すると、運よくセメントの入つた袋と砂袋とがあるのに氣がついたので、兩人は早速これを扉の代りに積み重ねて、漸く閉鎖することが出来た。この時隣家の貴重物品も多少入れたので責任は益々重くなつた。

二人は色々な器に水を入れて二階に運び、これを以て此處に留まらうと決心しては見たが階上から眺めると猛火は實に恐ろしい勢で攻めて来る、悲鳴叫喚は各所に起ると云ふ有様で、とてもじつと止まつてゐることは出来なくなつて、午後八時頃二人は互ひに手を取り合つて避難した。

菊川橋の上まで来たが、そこで進退極まつてしまつたので、止むなく菊川町方面の焼跡まで煙をくゞつて来た。その時は丁度九時頃で、自分たちの死守すべき變電所は九時半頃全く紅蓮の焰に包まれてしまつた。

二人は餘焰のまだ甚だしい焼跡に立つてゐたが、渴のために酷く苦しめられて水が飲みたい／＼と思つてゐると、運よく菊川町の消火栓に水があることを知つたので、これを飲んで息をついた。二人はこの所にその夜を明かして、翌朝の四時頃焰熱のまだ甚だしい中を過ぎて、變電所まで辿り着いた。

見れば、變電所は焼野の中に依然立つてゐる、何やらビシ／＼と音がするので、内部如何にと扉を開いて見ると、全部無事である。兩人の眼からは嬉し涙がほとばしり出た。

午前六時頃までに全部調べ終つた。

この日、木戸助玉組長は、松永助手を居らしめて、妊娠中の妻が無事に避難したかどうかを確めに行つた。

三日から二人は出勤して變電所の安全に努めた。さうして九月二十四日頃から送電を開始することが出来るやうになつたのである。

かうして責任觀念に富んだ木戸松永兩氏が、危急に臨んで私事を犠牲にし、冷靜沈着に事に處したため、禍害が防止し得られたといふ事は、同會社所有の鐵筋コンクリート造りの他の變電所が焼失したのを見ても明かである。實に兩氏のために建築物及び備品數十萬圓は灰燼に歸するを免れたのみならず、當變電所送電區域にある住民は日々の仕事に無限の光明を與へられたのである。

●努力か天佑か宮家は焼けず

麻布市兵衛町一丁目東久邇宮家は、市兵衛町臺から芝西久保の斜面に後むきしてゐる。例の赤坂田町に起つた火は米國大使館を焼く前に、大使館の後の寺に飛火して次第に宮家に肉迫して來た。當時宮家では(稔彦王には御渡歐中)金井事務官以下を従へさせられて鶴沼御別邸に御避暑中であつた。留守を預つてゐたのは宮内屬田村捨吉氏であつた。

田村氏は米國大使館東伏見宮邸大倉邸等の大邸宅のある故に、東久邇宮邸迄は火の來ないものと信じて荷物を出さうといふ者があつても、堅く是を止めてゐた。そして警備に來た現役軍人に、邸内可燃性の建造物に警備させて、自分は火の手の最も切迫した裏門に廻つてゐた。狂暴な火は飽く事を知らず城山町をなめて裏門に迫つた。かうした時の常として二階の窓を閉める事も多くは逃げてしまふものである。田村氏は居合した人々を指揮して檜葉の枝を持たした。中には箒を持った者もあつ

た。夫等をよるつて飛び込む火の粉を叩き消した。飛火は火の粉の落ちた時は極小さいのだがそれがすぐパツと周圍に燃え廣がるので、遠くから眺めたのではまるで傘の様なのが飛んだ様に見えるのだ。飛ぶと直ぐ消す様にすれば比較的容易に消し得るのであつた。然し飛火は益々激しくなつた。人手は不足だ。かういふ時は長い檜葉の枝の如き物であちこちを叩いて消すに限る。勿論完全な消防具の無い時の事ではあるが、追々と火の近づくに従ひ飛火は益々はげしくなる。その中に開け放しの二階に火が飛んでしまつたので、驚破一大事と三四人が駆け上つて漸く大事に至らぬ間にもみ消した。又折々小さな旋風が起る。そして恐ろしく火の粉をもつて來る。簾をぬらしてそれをかむつて大地に打つ伏してちつとしてゐる。旋風が去ると起つて又消火する。其の中に邸内に避難してゐた人々の荷物に飛んだ火が意外にも早く燃え盛つて官舎に延焼する。もう檜葉の枝を振りまはしても追つつかぬ。萬事休すかと思つた時風呂水の一杯あるのを發見した。即ちバケツで汲んではかけ汲んではかけする中に辛く消しとめることを得た。かうして絶えず火との苦闘をつゞけて居たが、もう連もこれ以上は支へられぬといふ時が迫つた。恐ろしい熱さ、益々燃えさかる猛火、極度の疲勞、今は是迄と思つた折しも、天佑か神意か知らぬ風向きが急に一變して全く正反對に火を追ひやつてくれた。田村氏はじめ一同はほつとして努力の空しからざりしを喜び合ふた。時に九月二日の午前三時頃の事で、火と戦ひ

始めてから凡三時間の長きに達して居たのだ。午前四時半頃迄はまだどんな風の吹き廻しのあるやも知れず樂觀は出来なかつたが五時に到つて全く安心するを得たのであつた。

田村氏のこの努力は、素より宮家を衛る責任を感じてであつたが、鳥居坂署長が言明した様に、若しも宮家にして不幸、災厄にかゝつたら、麻布の高臺もまたなめつくされる事をも心配したためでもあつた。また、「宮家には火は來ぬ」と言明して荷物の執着を止めた。自分の言責をも感じてのことであつたと思ふ。田村氏はあの第一震の際は下町の某銀行に宮家の金八千圓程を預けに行つて居たのであつた。その際行員が金を机中に投げ込んで逃げだす様を見て「其の様に無責任にされるのでは預ける事は出来ぬ」と怒號して持ち歸つたといふが、自分が責任觀念の強いだけに腹も立つたのであらう。尙氏の所感に「軍隊生活の経験が多少、この好結果をもたらした様に思はれる」と、學ばねばならぬことである。

本籍地秋田縣、新田郡山瀬村山田
現住所東京市芝區、久保城山町一
東久懸宮附 宮内屬 田村 捨吉君 (三十七年)

●和泉町佐久間町等の防火と其の成功

今回の大震大火災のために、四周は悉く焦土と化したにもかゝらず、必死防火に努めて、外神田の一角、和泉町と平河町とは、而も一戸の焼失家屋も出さず、佐久間松永町の残存家屋を併せて、實に一千六百三十餘戸の一大區域を殘存せしめた偉大なる功績は、既に世上有名な話となつてゐるが茲に當時の概略を述べれば、

(一) ミツワ研究所焼失

大地震後諸方に火災起るや、和泉町佐久間町等の町内にても、多くは家財を整へ、上野方面に避難した。踏止まつた若干のものは、極力火の用心を怠らなかつたが、九月一日午後零時半頃、和泉町の北方ミツワ研究所から發火し、衛生試験所等にも飛火したが、まだ水道が止まらなかつたから、工場と社員の住宅とを焼いたのみで、幸に鎮火した。

(二) 神田川北岸の防火

九月一日午後三時頃、本石町方面より延焼して、神田川の南岸東龍岡町豊島町等を西より東へ燃えし時は、佐久間町二、三、四丁目は風下となり、危険に瀕したが、神田川の水を汲み屋上に上りて、夫々防火に努めた。二丁目三番地柏原吉五郎氏宅の倉庫、佐久間小學校等には、飛火を受けて燃上らうとしたが、漸く消止めた程であつた。

町内有志のものは神田川を渡り、柳原電車通の南側にて喰止め、電車通北側の河岸には燃移らざるやう防火に努め、殆んど成功したが、富松町附近に於いて、遂に河岸に移り東より西へ燃えて来た。併し其の時は幸に風上になつたので難を免れた。此のために佐久間町二、三、四丁目の河岸にある神田川倉庫の米が残つたのである。

(三) 和泉橋通の防火

神田明神方面よりの猛火は、西北風を以てあたりを焼盡し、佐久間一丁目の一部を焼き、秋葉原驛構内で喰止めんとしたが、力及ばず、遂に和泉橋の袂まで燃出で、俄に東南風に變じ、佐久間町一丁目の残部を焼いて、平河町が危険状態に陥つたが、道路の荷物は他に運び、丸太を以て燃めき看板等を取はずし、窓を閉ぢ、和泉橋附近より神田川の水を汲み、燃えつゝある家屋は平河町の反對側に倒し、佐久間町一丁目十八番地の青物商友光仁三郎氏宅と、同十九番地の下駄商池田芳藏氏宅との間の道路に於いて喰止めんとし、下駄屋にはトタン板を張りて水を注ぎ、青物屋を倒し、二日の午前零時頃漸く鎮火するを得た。

(四) 美倉橋通の防火

二日の朝五時頃、淺草左右衛門町向柳原より來りたる火は神田八名川町元久右衛門町二丁目餌島町

最後に元久右衛門町一丁目を經て、美倉橋通の東側延焼の時は、佐久間町四丁目の看板等を取はずしバケツ類にて水を注ぎ、東側の家屋を破壊し西側に燃移るを防止止めた。其の際特に活動したるは現役兵近衛歩兵第一聯隊第六中隊柏原金藏君（佐久間町二丁目三番地柏原吉五郎君の長男）で、家屋破壊の折單身二階屋根等に上り、或は點火せる家屋中にまで突入して作業に従事し一般人を刺戟したとである。

(五) 和泉町方面最後の防火

三方の防火成功に胸を撫下したのも漸く半日の間で二日の午後三、四時頃、淺草方面との二大火勢は合して一大火勢となり、和泉町を一帯にせん勢で燃寄せて来た。

今迄の三方面の防火は、比較的小人數であつたが、今度は外神田警察署員、在郷軍人、青年團員、町内會等の精銳數百名、婦人も參加、眞に身命を賭して、飽まで防火せんとの決意を固めた勇士の集であつた。

火勢は刻々に近づいて来る。

此の時和泉町一番地十號の持田喜太郎君（五十二）は同番地十五號の帝國ポンプ株式會社よりポンプを借りんことを思浮べ、同會社の重役竹田孝作君に交渉した。

ポンプ會社には、八月二十九日に完成した。府下目黒消防署に納むべき、發動機は米國タービン式で双口二十馬力のガソリンポンプが一臺あつたが、焼失せんことを憂へて、和泉橋向の焼跡に運んで置いたのである。

竹田君は直ちに快諾した。一同は勇氣百倍して、供給すべき水源を探した。幸なるかな改良下水中に瀧過した水がかなり在ることを發見した。次いでガソリンの調達を急いだ。

準備漸く整ふや、火の手未だ來らざる前より、和泉町の西側に水を注ぎ始めた。

午後四時市村座出版會社附近に火勢迫るや、天井を破り二本のホースを入れて消火に努め、又松永町方面に於いては、數軒の家屋を倒し、水の不足を告ぐるや七箇の井水を汲み、數百人相對する二列縦隊を作り、給水並に空桶を連搬し必死消火に努め、松永町五番地より秋葉原驛に通づる道路に於いて、二日の午後十一時頃全く猛火を征服したのである。

(六) 効果と功勞者

以上官民一致防火の成功により、神田川倉庫内に残りたる約一萬四千俵の在米は東京市當局に於いて、直ちに其中一萬九百俵程買入れて、市民最初の食料たる配給米となつたのである

其の他一千六百三十餘戸の殘存家屋には數萬の避難民を收容し、或は井水を開放運搬して附近の飲

料に供し、又和泉町には團長直江甲子三郎君の率ゐる團結力強き和泉町青年團を中心とせる和泉町自警團の活動となり、佐久間町平河町は合して、代議士作間耕逸君を團長とし、後備陸軍砲兵中尉奥住甫介君を警備本部長とせる軍隊組織の秩序整然たる神田君自警團の活動となり、共に消防警備救護に盡瘁したるは人の良く知れる所である。

特に功勞ありし團體個人の氏名をあげれば

1、ガソリン唧筒を發見し其の運用を提案したる者

神田區和泉町一番地十號 染料商 持田喜太郎君 (五十二年)

2、唧筒を提供し其の運用に努力したる者

神田區和泉町一番地三號 鷹職 岩城宗衛君 (四十六年)

本郷區妻戀町十番地 渡邊正久氏方 鷹職 渡邊正人君 (三十八年)

下谷區二長町一番地 福島金平方 鷹職 石田銀之助君 (三十年)

下谷區御徒町一丁目七十番地 鷹職 佐々木高太郎君 (四十年)

神田區和泉町一番地八號 荒物商 齋藤萬四郎君 (四十三年)

3、防火並に救護に努力したる者

神田區佐久間町三丁目三番地相原吉五郎氏長男 柏原金藏君 (三十二年)

近衛兵第一聯隊第六中隊 神田區和泉町一番地一號和泉町青年團 代表者團長 織物商 直江甲子三郎君 (三十年)

神田區和泉町一番地一號和泉町自警團 代表者(團長) 皮商 青木榮次郎君 (五十七年)

神田區松永町五番地 松睦會有志代表者 齒科醫 林紋藏君 (四十九年)

神田區佐久間町三丁目二十一番地神田川町會代表者 辯護士 石原金作君 (四十八年)

神田區佐久間町四丁目二番地佐久間四丁目會代表者 木炭商 作間耕逸君 (四十四年)

神田區佐久間町二丁目十二番地佐久二會代表者 府會議員 鈴木清次郎君 (五十六年)

神田區平河町四番地 平和會代表者 陶器商 細谷鎌太郎君 (六十三年)

神田區佐久間町二丁目八番地神田川米穀市場組合代表者 米穀商 野田卯兵衛君 (五十六年)

神田區佐久間町河岸十六號 帝國在郷軍人會代表者 班長 木炭商 松村金兵衛君 (六十六年)

神田區佐久間町三丁目二十一番地神田川自警團代表者 團長 辯護士 大橋長五郎君 (三十六年)

警備本部長 後備隊中尉 作間耕逸君 (四十四年)

奥住甫介君 (四十三年)

などである。

● 猛火の中に宮城を護る

九月一日の震災に次いで起つた火災は畏れ多きことながら宮城の周圍到る處に擴がつて一時は容易ならざる形勢を示し、皇居炎上の悲報さへ傳へられた位であつた。其の消火警戒には宮内省所屬の消防隊、皇宮警察等が極力盡瘁したのは勿論であるが、軍隊の活動も與つて力あるものであつた。

井手少佐以下百六十八名の近衛第三聯隊の將卒は同日上番として宮城の守衛勤務に服してゐた。震災後は特に警戒を嚴にして任務に就いてゐたが、各所に起つた火災は四方八方から宮城を押包んで、火の粉は雨や霰の如く熾に降りかゝつて來た、兵士等は手に手に木の枝を持つて飛び來る火の粉を叩き消しながら水の無い防火に苦闘した。

麴町區番町方面の火勢は段々と猛烈になつて來た。折からの風向は盛んに火の子を宮城に飛ばし、一日の午後五時十分には遂に振天府の附屬舎に飛火して、此の建物は遂に類焼の災を蒙つた。正門司令であつた藤岡大尉以下三十名は報を得て直に同所に急行し、振天府の屋根に上り、空手を以て屋根板をむしり取つて漸く火を消し、振天府に事なきを得しめた。

大手町方面、一ツ橋方面の火も猛烈であつた。番町方面の火は更に強く、火の手は全く宮城の上空になびき掛つて兵士は一瞬時たりとも油断することは出来なかつた。吹上御苑に於ては遂に松の樹二本を焼かねばならなかつた位である。二日の拂曉に至りさしもの猛火も静まつて遂に宮城をして大事に至らしめなかつたのである。

此の間幹部以下全く不眠不休、敏活なる行動は機宜に適し、犠牲的精神を以て奮勵努力を續けたのであつた。江戸時代の大火に當り幕府が其の厄に遇つた事に想到する時井手少佐以下將卒の功績は實に偉大なるものと云ふべきである。

近衛歩兵第三聯隊

陸軍歩兵少佐井手平馬氏以下百六十八名

●東京電燈株式會社兩國支倉庫の防火

本所區横綱町四萬餘の生靈を僅か數分間に焼死せしめた被服廠跡から西に丁余隔てた隅田川に面し焼跡から僅かに三間道路をはさんで三四棟の建築物が残つてゐる。奇蹟であらうか、天祐であらうか果た何者かの努力の結果であらうか。

建築物中最も南に在るのは東電兩國支倉庫である。野崎貞造主任の下に數名の書記、倉工夫、職工百三十餘名居つた。

九月一日野崎主任の命により、書記長、小田中三は危急に臨みて冷靜沈着、百三十有餘の職工を集め、頻々として襲ひ來る地震、避難民のため混亂状態である道路、寄せ來る猛烈な火勢等につき周到なる注意を與へ、戦々競々顔色愴然たる女工達を勵まし、同方向に歸る者一團々々となし、歸宅せしめた。此は實に多數の職工中に一名の重傷者死亡者をも出さなかつた結果をもたした一大原因であつた。

一方佐藤書記は、重要書類其の他の整理をなす。まゝ、帝大法科出身の青年書記秋山鐵雄君は倉庫夫寺川一君岩重清熊君櫻瀬一二君増田利明君野原丑五郎君を以て決死隊として居残り、倉庫の整理及防火に努むる覺悟をした。主任野崎君の周到なる用意の爲め、倉庫には、ガソリンボンブ一臺バケツ二十余個とが備へられてあつた。此の時附近の罹災民百餘名の爲めに東電倉庫地間を開放して呉れとて出入の齋職漆本辰次郎君が來た。彼等も秋山決死隊長の指揮の下に防火に働らく事になつた。向河岸の巨屋、高等小學校二葉小學校や、專賣局は猛火、紅蓮の海と化し、大川もものは足速やに、風さへ強く吹きつけて來た。

各所に起る悲鳴叫喚、その凄愴言語に絶す、折しも川の中には龍巻起り川の中に避難した船は木の葉の如く玩ばれ、船火事、焼死、溺死、救助を呼ぶ聲が頻り聞えたが應ずるすべはなかつた。

倉庫地内に在る五千餘の避難民は益々狼狽するのみであつた。

主任野崎君をはじめとし、書記及決死隊は、民衆の整理に防火に挺身努力飢えと渴と疲労の極に達した。對岸の火勢北進し、西方から攻め寄す火の手は漸く衰へた。折しも東方被服廠跡及安田家庭園方面は、悲鳴叫喚起り忽ち消え、數回繰り返された。

火焰の柱は天に沖し大旋風は起つた。倉庫に落ち来る眞紅な焼トタン、雨と降る火の子、之れと戦ふ事數回、ポンプ一臺の威力は大なるものであつた。

斯くして午後六時頃、再び風向一變し猛火は忽ち攻め寄せ、道路一筋の向側まで一面の火荒浪と化してしまつた。此の時倉庫地内の建築物に延焼し愈々魔の手は猛威を思ふがまゝにふるつて來た。

秋山決死隊長は必死になつて活動し、妻子ある主任、野崎氏及書記長小田氏に向つて、「最早やここまでです危険は刻々に迫つて來ました。後は決死隊に任せて此處を立ち去つて下さい。これまで、社員としての面目は十分立ちます。」といひ午後六時半頃雨氏を避難せしめた。勇奮努力、協戮一致消火に努め午後七時半頃一棟の類焼をやつととめた。されど危険は尙極はまりなき有様である。翌朝七時

半頃までは、間斷なく、ポンプ、バケツは秋山決死隊と共に活動した。

かうして五千餘の避難民も九死に一生を得、藤代河岸數個の建築物は残された。不眠不休の秋山等は罹災民の爲めにバラツクをつくり、飯食物を供給し、衛生上の注意も與へ、相當の手當をして居た四日頃から警察及軍隊に罹災民救助の爲めに倉庫建築物を貸與した。主任野崎氏の平素に於ける周到なる用意と、書記小田秋山兩氏の職工訓練と佐藤書記の敏活にして用意周到且つ挺身努力の結果は多數の職工の健在、建築物の残存、五千餘の避難民の安全を得たのである。實にこは天祐か、奇蹟か、眞に主任其他の美蹟であると信ずる。

● 瀕死の老婆を救ひ更に猛火を喰ひとむ

一日午後一時半頃吉原京町に起つた火は、見る見る中に其の勢を強めて、吉原、田中町等を灰燼に歸して南千住町に逼つて、下谷三輪及南千住三輪を一紙にせんとした。此の時坂本署巡查伊藤圓藏氏(二七)は自己の安危を物ともせず、遁げ迷ふ群衆を指揮激勵して同方面を災危からすくつた殊勳者である。

次ぎに同調査の直話を紹介しよう。

「私はあの大地震がやつて来た時、丁度豊住町の調査派出所に勤務してゐました。不意に大地がガラ／＼と波打つかと思ふ間もなく、身體は上下左右に強く揺れる。屋根瓦は飛ぶ、土煙が上る。塀や家などもがらがら音を出して崩れるので、實際びつくりしました。

暫く過ぎると、稍地震も静まつて来たので、自分の管轄區域を巡つて、若しこんな場合に火災を起しては大變な事になると想つたから、『火の用心』火の用心』と連呼して歩きました。それに豊住町十九番地には、材木屋が澤山ありましたから、倒れた材木や、潰れた家の上を登つて歩いて、怪我したり、下積になつたりして居る者はないか、と思ひ捜して廻りましたが別に被害者はありませんでした。交番に歸つて来ますと、『一人だけ残つて、他の者は全部本署に引上げろ』と言ふ命令がありましたから、時を移さず署へ馳せつけました。

すると『これから火災防止宣傳と、人命救助に行け。』といふ前田署長の命令がありました。私はそれから平山警部補殿に従つて、龍泉寺町方面の警戒と救助に出發しました。

龍泉寺町三七六番地先まで来ると、『助けてくれ』助けてくれ』と身を切られるやうな、悲しげな聲が耳に響いて来ました。『はつ』と思つて、注意して聞くと、通から少し離れた、潰れ家から起つて来

るのです。『そら助け出せ』と、同僚と力を併せて、一生懸命に屋根を破壊し、板をのけて、やつとの事で、薄暗い家の中にもぐり込んで行くと、婆さんが、梁と床の横木に、兩足を固く挟まれて、藻掻いてゐました。それから三四人で、やうやく梁を挺子で起して、外へ抱いてだしてやりました。よく見ると五十五六歳の老婆で、腰の邊も打たれたらしく、血が赤くにじんでゐました。よく見ると婆は、

『お蔭様で危い命を助かりました。御恩は一生忘れません。』

と兩手を合せて、ぼろ／＼涙をこぼしてゐました。

それに續いて、六七人も同様に、危機一髪といふところを助け出しました。

午後四時半頃、吉原上手に登つて、金杉下町の調査派出所で一同と別れました。

其れから一時間餘たつたかと思ふ中、吉原から地方今戸町、田中町等を全滅にした呪ひの火は、數百の生靈を奪ひ、惘れ無慘にも白骨の山を築いたにも拘らず、紅蓮の火は天を焦し、濃々たる黒煙は穴を蔽ふといふやうな、物凄いの勢で、三輪町に迫つてゐました。

此の火は、早くも南千住の角から燃え上つた火と、相合して、下谷三輪と南千住方面に突撃して来ました。群集は唯々『あれ／＼』と叫ぶ許りで、誰一人これを防ぎ止めようとする者もありません。

ん。

私は之を見て、すぐに群がつてゐる人々に向つて、

『呆然してゐれば皆焼けてしまふ。此處で喰ひ止めなければ、千住は全滅だ。火を消さうと思ふ元氣のあるものは集れ。見物人は邪魔だから彼方へ行け。』と抜劍して、大聲に叫びました。

間もなく私の傍に集つた群集を二列に並ばせて、バケツ隊を組織し、三輪町百貳拾壹番地にあつた井戸から水を酌ませて、順々に運ばせ、私自身は同町一〇三番地青物商鈴木勢四郎氏の家に、飛び上つて、瓦や屋根板を剝して、太い繩を漸くのことと、棟にしつかり結び付け、下にゐた多數の人に繩の先を投げつけて『さあ引け』と怒鳴ると共に路上に跳ね降りて、『フツシヨ／＼』と力を合せて牽きますと、流石にひとたまりもなく、『ドゥ』と大きな音をたて、横倒しに倒れました。其の潰れ家に運んで來たバケツの水をどん／＼やたらに浴せかけ、一方また先のやうにして四五軒も曳き倒しては、滅茶苦茶に一同の者が協力して、各自我が身の危険を打ち忘れて、消防努力しましたから、見る間に火勢はだん／＼弱くなつて、風も静まり、約三時間半で消し止める事が出來ました。

其の當時猛火は、僅かに九尺の道路を差狭んだ向側で盛んに燃えてゐたのですから、其の苦しさと言つたら到度想像する事も出來ない程でした。今思ひ出してもゾツとするやうな氣がします。云々』

下谷區三輪町九八岩瀬コト以下十八名の者は、氏の此の立派な働きによつて、火災を免れることが出來たといふので氏の功績を表彰するため次きのやうな感謝狀につけ加へて、金若干を贈つた。といふことである。

今回ノ大震災ニ於テ其火災ノ斯カル慘憺タルヲ致シタルハ地震ニ驚愕シテ人々唯々家族ノ安危自己ノ生命ノミ氣ヲ奪ハレ火ヲ鎮ムル方法ヲ蓋サスシテ其生命ノ恙ナキヲ以テ無上ノ幸福トセルノ故ニハアラザリシカ其間ニアリテ我カ坂本署在勤巡査伊藤圓藏氏ハ猛火ノ焰將ニ我南千住三輪二二番地ヨリ下谷三輪一〇二番地延燒セントセシ時人々ヲ指揮シテ防遏ニ勉メ其措置宜シキヲ得テ幸我々類燒ノ厄ヲ免レタルハ偏ニ伊藤氏ノ其職務ニ忠實ニシテ且ツ其技能精熟セルノ致ス所我々其危険ヲ免レタル者其功勞ニ對シテ感謝措ク能ハズ茲ニ同志相謀リ別卦ヲ送リテ熱烈ナル感謝ノ意ヲ表ス

北豐島郡三河島町町屋七四九番地 警視廳巡査坂本署警察署勤務 伊藤 圓 藏君

●男女擧つて防火

佃島も今日は離島ではない。京橋區明石町の方面は渡船連絡の外はないが、月島や深川方面には橋が架設せられてある。京橋の火には月島よりも近いが遂に焼焼つた。

隣の月島は一日の午後まだ明るいうちに火の手があがつた。猛烈な火を浴びてはもう全焼を覚悟するの外はない。午後七時頃老人と子供と丈は船に乗せて芝離宮の方面に避難させたが、多くの住民は一寸も動かさなかつた。

屋根といふ屋根には水を湛えた樽を抱えて在郷軍人と青年團長とが立つてゐる。家の裏表には手桶に柄杓を添へて主人も小僧も立つた。妻君も女中も若い娘も飯櫃を空にして川の中から水を運んだ。小學生も女學生も水に飛込んだだけつの水を順送りに陸へ上げる。水の入る限りのものは餌桶、澤庵桶洗濯盆の一切が利用せられた。濡雑巾と柄つきぶらしとで火の粉を追つかけて廻つた。石川島からガンリンポンプを借りて来た。一隊は力の限り器械を動した。漁業組合備附の舊式な手押ポンプを持つて来て、命の限り根限りに使はれた。それでも新佃島方面からの火が燃移り。始めたので長屋四軒は見間に叩潰されて仕舞つた。二間道路を隔てたさきまで燃えに燃えて来た火もこの協一致の防火には叶はなかつたか遂に一戸も焼かずに防火の功を奏したのである。

此の島に金子政吉君といふ仁侠の人がゐる。金子君は當年六十四、老人ではあるが元氣當るべから

ざる仁侠の勇者である。島の事件は昔から大小となく政吉君の手にかゝつて處理せられるのであつたが、今度の震災の折は入船町の自宅に居た。政吉君は市の方面委員でもあり、又漁業組合長でもある驚破島の一大事と見ると自宅の焼失も顧みず宙を飛んで島に来て一切萬事の指揮に任じた君の命令は適切でもあるが、平素の信望がそれを裏背して必らず行はしめるのである。

島には相當の朝鮮人が居た。火と人とは追はれて逃げ込んで来るのも尠くなかつた。政吉君は無辜の鮮人に怪我をさせては大變だとばかり、流言におびえて騒ぎたつ人々を一喝して唯一指をも觸れさせなかつた。三日の夕方まで四十餘人を浴場の一室に集めて保護もした。

罹災民に配給する大蛙の截断には京橋區役所でも困つて居たが政吉君の配當で其の道の玄人が毎日無報酬で働いた。警察署應援の船の配置や、食料、飲用水配給の船と船頭との總動員や、電話の架設や、河幅百二十間の底に二時の鉛管を沈めて飲用水を豊富にしたことや、傷病者の治療からの火葬埋葬。さては病兒の入院から家族生計の末に到るまで痒きを搔いて手の届かぬない繁雜な世話を深切にやくのであつた。

●島崎町の一家

さぞよく燃えたであらうと思はれる深川の木場町一帯を歩く人は、丁度島崎町五番地にたゞ一軒東屋風の小さい家の残つてゐるのを目がつくであらう。見渡す限り焼野が原で、赤黒い灰土の下、石や煉瓦の礎ばかりのある中に、だゞ此の一つ家のみか立つてゐるのはたしかに奇蹟である。そして其の奇蹟の裡には決死の防火をしたといふ美談がある。

此の一つ家は材木商太田徳九郎氏の庭に建てられたもので、二間半の小さい家作りであつた。平常は木材の取引などのある折りに同業者の休憩所に充てられる位のことと、他にはこれといふ使途もなかつたといふことである。其の小さい一軒家が、今度は大きな記念を残すことになつた。といふのはかうである。

深川一面の火が、木場町一圓を蔽ふやうになると、木村家に入出入してゐる人々の家族等は、各々取出した家財道具を、此の一つ家に押入れて、風上に當る方へはトタン板などを拾うてきては打付けて置いて、各安全な方へ避難して行つた。丁度、此の家の南北には材木の堀があつたので、萬一を望ん

で荷物を入れて行つたのであるが、不幸にして風向が變つた。初め、南から吹いてゐた爲めに、トタンで圍つて安全だつた此の家が、今度は反對の側から吹きつける火焰のために刻々と危険に瀕してきつた。丁度九月一日午後七時頃のことであつたといふ。此の時まで、踏止つて形勢を見てゐた店員田村愛助君(四一)は、林千代之助、山崎条次郎、望月金松の三君を指揮し、風上に當る池水の中に身を没して此一軒家を助ける爲めに用意をした。池には水はあり筏もあつた。四人の人たちは各々バケツ等を用意してゐたので、荷物の上に火のつく度ごとに、池の水を汲んで行つては此火を消した。それも一度や二度ではなかつた。さうしては再び池に入り、夜具を水に浸してそれを頭に冠り、かれこれ午後二時頃まで、疲労と、飢餓と、睡眠とを忍んで健闘した結果、四面みな焼き盡された中であつて、此の一つ家と澤山な家具衣類などのみは完全に残すことが出来たといふのである。

翌日になつて、近所の人たち七十人餘もが立戻つてきた。けれども、どこにも家らしい家はなく、たゞ不思議に助かつた此の一つ家に集つて、暫らくの間の雨露を凌ぎ、其處に焼残つた食糧や什器によつて露命をつなぎ得たのであつたといふ。

深川島崎町五番地 田村愛助君 外三君

● 不思議に残つた下谷の一角

下谷區金杉下町九三番地と、三輪町の一部が此度の大火災で、四方火に圍まれたのに、不思議にも焼け残つてゐるが、その裏面にはまことに感心な物語が藏されてゐる。

九月一日の午後五時頃、吉原方面を一越にした炎は勢すさまじく、龍泉寺に延焼して、金杉下町に及んだ。同町九三番地伊藤嘉七氏は、長い間町會長を勤めた人で、町内の人望も厚く、相當な財産家で、當時毛氈の敷物製造を業としてゐたが、此の時最早災厄を脱かれぬものと覺悟して、一家族の者を千住方面に避難させた。其の時分まで同君の干物場に難をさけてゐた近所の人々も、遂に雨のやうに降つて来る火の粉や、煙の爲めにゐた、まれず、逃げだしてしまつた。

此の時伊藤君の前、九尺位の道を隔てた向側には、三輪町の梅林寺といふ寺があつた。其處は境内が相當に廣いので、避難民一千人餘も集つてゐた。其の傍の青田邸内にも多數の人が、蟻集してゐた。だから是等の人々の運命は、ほんとうに風前の燈火のやうであつたのだ。

これを知つた町内の有志、松原藤太郎、大友實、植木伊三郎、堀江秀吉、田代伊之助、並びに龍泉

寺町二六五橋本徳藏、同九三橋本辰春、高橋又藏、鈴木竹次郎の諸氏は、伊藤氏の毛氈干場が空地で大分廣いのを幸ひ、此處でどうしても鎮火させなければならぬ。といふので、強い風がヒュー／＼と音を立て、、血紅の炎渦巻き、大きな火の粉が、バラ／＼と降りかゝつて来る中に立つて、暴れた仁王のやうに獅子奮進の勢で、金杉下町六八の長屋を破壊したり、伊藤氏所有の工場を倒したり、井戸水を汲んであびせかける等、實に非常な苦戰奮闘をした。

其の結果、さしもの猛火もだん／＼下火になつて、午後十一時頃、全く消えてしまつた。

斯かる際に當つて、伊藤氏は是等火災の消防に命をかけて働いて居る人々の危険なのを見て、再三再四、避難するやうに迫つたのであるが、耳にかけずして、此のやうな立派な手柄をしたとのものである。

伊藤氏曰く「私も最初踏み止まつて、消防に盡力したのですが、だん／＼火が身に逼つて、命が危険になつたので、皆さんに逃げるやうにおすすめしましたが、言ふ事をききませんから、とう／＼私一人で避難しました。二三時間たつてから、来て見ると、焼けてしまつたものと思つた、自分の住宅がこのやうに残つてゐましたので、大層驚きました。これは全く皆さんのお蔭です。もし私の家が焼けたら、それこそ田中町のやうに悲惨な事が起つたに違ひありません」云々と。

●士官學校を救つた勇士

牛込の中心から、直ぐ、南方に當つて、凄く黒く太い煙が立つた。やつと、避難所におちついたらばかりの人たちは、何んなに驚愕した事であらう。あの火が、廣がれば、牛込區は助からない。あれは士官學校だし目當てがついた時には、もう六七丈も高く煙が上つてゐた。こは士官學校附歩兵曹長石川義人氏が、副官勤務中、突發した出來事であつた。同氏は直にホースを準備して、消火栓を切る、危怪、フーンとふくれる筈のホースは、何の反應もなく横はつた。氏の目は異様に光つて原因の那邊に存するやを、詮索するもの如くであつた。「ヤツバリ水道の破壊、學校中のバケツ、水の入る器物を集めろ、そして琵琶湖（舊尾張公園）の水を運送しろ」命令一下、古代式消防法は猛烈に行はれたが理科講堂四棟は遂に焼失した。此時既に隣接大講堂に飛火した。この瞬間、氏は短かき梯子により、漸く達し得るか否やの處より屋上へ猿の様に跳り上がった、幾度か運び上げられた水を注ぎ込んで行つたか、火力に對して、あまりに水が少量であつた。火勢は益々盛になる。火勢が盛になるに連れて

氏の身邊は愈々危険になつた。仰ぎ見れば煙中、唯黒き影のあやしく動搖するのみ。形勢は秒一秒險惡になつて行つた。かくと知りたる上官は「危険下りろ」と大聲に叱呼した。然し氏は少しも恐るゝ氣色なく、潤れ天幕を頭より纏ひて尙猛火の根據に迫らうとしてゐた。この勇敢極りなき同僚の存亡危機を誰が觀望してゐられやう。應援の勇士は次第に増して行つた。さしにも猛威を奮つた火煙も、今は一寸去り、一尺去り、遂に氏の面前に降服した。歡聲は山も潰れんばかりにあがつた。

學校長津野氏は彼の功績に對し、懇なる感謝状を送つた。

陸軍士官學校附歩兵曹長 石川 義人 君

●根岸一面の危急を救つた殊勳者

下谷區根岸坂本一帶の殆んど全部は火の災厄から免がれたが、之は決して偶然でもなく、僥倖でもない。自己の生命を賭して奮闘した猛者勇者の賜物であることを記憶せねばならぬ。通行の二兵士（氏名を知ることに出來ないのは遺憾）一時は安全地帯として胸を撫下ろさせてゐた上野方面、此の方面

も二日の午後六時頃になつて俄かに魔の手に掴まれた。松坂屋から發した猛火は魔手を伸ばして上野驛、忽ち一紙めに舐めてしまつた。それより火勢は二手に分れて、一手は鐵道管理局を、一手は南北稻荷町から谷住町を襲撃した。二手の火勢は更に合して坂本根岸一帯を一舉に舐め盡さんとしたのであつた。此の時其の猛火の衝に當つてゐたのは下車坂町である。下車坂町の運命は實に坂本根岸一帯の運命の係る所であつた。けれども猛威に辟易したる群集は、あれよ／＼と叫ぶのみで誰も之を防ぎ止めようとする者はなかつた。時に一人の勇者が現はれた。

「よしおれの腕を見よ、家を叩き毀して防いで見せよう」

下車坂町のとある屋根にかけ上がり、之を破壊して棟に繩を結び附けようと努めた。けれども後に續く味方はなく前は旋風に煽られて雨霰と降る火の粉に攻立てられて口惜しくも退却の已むなきに至つた。

時に通りかゝつた二人の工兵、

「よしおれが」

と續いて倒壊を試みたが、これ亦猛火に敵しかねて退却してしまつた。火勢はいよ／＼猛り狂ふ。坂本根岸一帯の運命は危機一髪の間迫つた。此の刹那當地方防禦の大責任を双肩に擔へる坂本署長も

もう堪へきれなくなつた。

「誰か此の危機を救ふ勇者はないか、命を捧ぐる猛者はないか」

と自ら命を賭しての叱咤怒號、怒號の響は確かに徹底した。その聲の終るや否や、鏡面金平氏の印刷工場にかけ上つて猛火に向つてつつ立つた猛者があつた。誰かと見れば、坂本警察で劍道の名人であり自ら同署劍道部の師範代として、又精勵活動の模範部長として名高い本堂勝四郎君であつた。君は拾ひ來つた手斧を奮つて、或は瓦を破り或は屋根板を毀しつゝ暫し猛火と戦つてゐたが、地の利宜しからずと思つたか、ひとり身をかはして下車坂町十六番地迄退却した。と思ふと再びその古谷酒店の屋根にかけ上つた。降來る火焰を浴びながら辛くも繩を棟木に結びつけた。結びつけると又忽ち家の中へ飛込んだ。家の中は早や一面に渦巻く黒煙に占領せられてゐたが、それにも怯ちずとう／＼大黒柱を挽切つた。今まで茫然として見物してゐた群集も、部長の勇ましい此の活動に勵まされて思はず繩に手をかけた。流石に堅固な建物もエイヤ／＼の掛聲でとう／＼曳倒してしまつたのは實に壯快であつた。

續いて小山本間の二巡查も應援に加つて來た。應援を得た本間部長は勇氣百倍、隣家の野原菓子店を初め並びの圓山飲食店岡田洋服店の三戸を續げざまに倒潰した。

此の時火勢は僅かに二間道路を隔てたる谷住町へ押寄せて居たのであつたが、身命を賭したる三君は機敏と沈着と剛膽とを以て尙も破壊防火を繼續して已まなかつた。群集も之に勵まされて俄に活動を始め直ちにバケツ隊を組織して署長と共に一大活動を開始したので、さしもの猛火も三時間餘にして遂に喰留めることが出来て、萬歳を連呼する歡喜の聲は實に壯快絶快の極みであつた。時は當に午後十一時。

尙本堂部長については特に此に附記しておかねばならぬ功績が残つてをる。前日擔任區域龍泉寺町を巡視の折柄、鈴木重松の妻及び附近の子供三名が倒潰家屋の下敷になつてをるのを認めた。その時は恰も自宅の焼失せる最中であつたが、それをも顧みず危険を犯して四人の命を救ひ上げた。君の眞心は到る處に發露し君の勇氣は到る處に活躍したのであつた。

東京市下谷區坂本警察署勤務 巡査部長 本堂勝四郎君

巡査 小山菊太郎君 同 本間鐵藏君

●三橋訓導の行爲

強震と共に紅蓮の焰は市街から市街へ、南から北へ、北から南へと、江戸三百年の文化は炎焼三晝夜で灰土と化してしまつた。親は子を、子は親を尋ね、或ひは壓死、焼死、溺死……實にこの世ながらの凄慘極まりない焼熱地獄を演出してしまつた。この大災に數多い奇蹟の中に淺草觀音の残つたのがあれば、此處にはまた天祐とは云ひながら、本所區の北端に位する東京市牛島小學校は無事残存して今日千有餘の兒童が喜々として學んでゐる奇蹟もある。果してこれは奇蹟であらうか？

此の學校に三橋徳衛(四十六歳)といふ先生があるが、此の校に奉職して滿四ヶ年間精勤の譽ある人で、青森縣青森市大字大野字長島八十一番地に生れ、同縣師範を卒業して今日まで教育界に活動すること既に十有八年になる。文學方面の讀書を好み、處世法としては眞面目に實踐力行あるのみとの主義を有つてゐる。

九月一日、地震と云ふ間もなく校内の戸棚教卓諸器具の倒壊甚だしかつた折しも、校舎西北隅の二階から出火した。

強震は後から／＼と連續してやつて来る。土煙は一面に天地を覆ふ。既に多くの人々は安全地帯を探る有様であつたけれども、三橋氏は學校から火を出してはならぬと、ゆら／＼する校舎の中を出火教室に向つた。かくと見た首席訓導石井氏は、すは一大事と使丁を督してバケツの水で消し止めた。

此の時既に本所深川一面は黒煙濛々として天に沖し、火勢次第に北進し來り、炎々たる猛火は恐るべき魔手を振つて向島警察署を焼き盡し、黒煙はすでに校庭にも充滿し、今は呼吸も困難となり、校舎の危険は刻々に迫つて來た。

この時校庭にゐた岡本校長は二訓導と使丁を督して御眞影奉遷に出發してしまつたので、三橋訓導はたゞ一人廣い校舎に残つて警戒を怠らなかつた。避難民は物凄い叫び聲と共に潮の如く寄せ來り、また潮の如く去つた。と見ると猛火は校舎の北方約一町餘の所まで迫つて來た。校舎の西方は僅かに一列の小屋を除すのみとなつて、こゝに三面火に圍まれたのである。あゝ、我校も烏有に歸してしまふのか、今は人事を盡して天命を俟つのみ、心臓の鼓動の續くまで働かう、と三橋氏はバケツを手に取つて、折からの満潮に下水の水の漲るを之天祐なりと勇奮努力荒れ狂ふ猛火と戦つた。

天なるかな、午後十二時頃、終に校舎は火災から免がれることが出來た。さうして我にかへつた三橋氏は水を浴びたまゝ、我が家の焼跡を眺めて立つてゐた。

本所區牛島小學校訓導 三橋 徳 衛君 (四十六歳)

●暗室内に薬品の發火と闘ふ

ソラ地震だ！ と知つたとき陸軍砲工學校の小使齊木福松君は素速く傍の大卓子の下に這ひ込むだ厚く大きい三疊敷もありさうな頑丈な卓子は君一人を護るに充分な掩蔽物ではあつたが、此處は物理學講堂である附近には引火し易い劇薬類が夥しく貯藏せられて居ることは平素の勤務でよく知つて居る。危険は家屋の倒壊よりも、眞つ先に暗室内の薬品から出さうな豫感に襲はれたのであつた。

物理學講堂は約百五十坪の平家建木造で中央に大教室があり、西側が發電電池室、東側が寫眞の暗室になつて居る。暗室は方二間半、床は教室よりも一尺五寸ばかり下げてコンクリートで固めてある。東西北の三面に扉があつて、寫眞用の大卓子は南側に据えてあつたが、薬品類は北側の扉の側の木製戸棚の中に一杯入れてあつたのだ。激震と同時に戸棚は傾き劇薬の硝子罐は破れた。浸出した薬品は忽ち發火して物凄い煙を吐き始めたのであつた。

福松君は、大卓子の下から不安の胸を押へながら眼をかゞやかして凝つと暗室の方を見詰めて居た。すると微かながらも異様な物音がきこゆる。變な臭氣が鼻をついたかと思ふ間も無く、果して扉の隙

間からはブーッと一條の煙が漏れ始めたのだ。

「失敗つた」と叫ぶと共に福松君は飛鳥の如く身を躍らして卓子の下から飛出した。最早危候は自分一身のことではない、自分ひとりの安全地帯は、忽ち火事の火元となつてしまつたのだ。捨て、置いたら砲工學校全部を焼くばかりでなく延いては牛込若松町一帯の高臺を焼かねばすまぬであらう。命は捨て、も消留めねばならぬと決心した福松君は手ばやく傍にあつたバケツを水道栓の下に置き、栓をひねつて水の出る間を暗室の前に進みよつた。把手に手をかけて一二寸扉をソツと開くが否や、此處ぞとばかりに鬱積して居た室内の煙は、恰かも噴火口から吐出される毒煙のやうに凄まじい勢を以て迸り出る。それと同時に室内はバツと一度に明るくなつた。密閉せられて燃え溢つて居た火が木製戸棚に燃え移つたのである。床の上には薬品類が白煙を立てつゝぶつゝに泡立ちながら這廻つて居る。火と煙と臭氣とごつちやになつて暗室の中は全く恐ろしい光景に變つて仕舞つて居たのであつた。

見極めた福松君はハタと扉を閉鎖した。味方にするのは唯水ばかりだ。死力を盡しても水を注がねばと水道の口に来て見れば、無惨、斷水、この危急の場合に一滴の水すら出ないのだ。福松君は極度に昂奮した。地だんだ踏むで口惜しがつたが自然の暴力はこのとき一齊に東京市民から水を奪つて仕

舞つて居たのでどうすることも出来なかつたのだ。しかし福松君は決して落膽しなかつた。鋭く室内備付の幾つかの消火器に眼を注ぐと同時に奮う様に消火器を抱えて暗室の扉を開いた。北側の扉にははや火が燃えうつつて居る處であつたが、ある限りの消火液を注ぎかけてゆくうちに火勢は次第に衰ひ始めた。頻々として起る餘震の度に足踏みすべらせては劇薬の海の中に轉ばうとしたことも幾度かであつたが、君が勇敢機敏な奮闘によつて午後一時頃迄には全く暗室の火を消止め、完全に物理學講堂を救ふことが出来たのである。

家は傾き、起てば脚をすくはれる幾度かの激震の中にも屈せず他まで責任を重んじて其の功を全うした。齊木福松君の功績は眞に特筆大書すべきものである。學校長は直に此の殊勲者を厚く懐つて懇篤な謝辭を與へたのみならず、主務大臣に向つて適當なる表彰方を申請したといふ。若松町有志も亦三位牛込區長に向つて次ぎのやうな君の功績調査依頼狀を發して居る。

震災後早二ヶ月餘りを過ぎたる今日と言へ共榮職にあらせらるゝ御身のなほ日夜御繁忙の事と拜察いたします未曾有の震災に次ぐ大火の爲め各區の被害も甚しく、下町全體は全滅の悲惨さを見るに到りし中に幸に當區は火災をまぬがれ左程の被害を見ざりしは、我等の等しく嬉ぶ所で御座います然し當區殊に若松町余丁町一帯は一人の勇敢なる小使の働きなくば怖しき火災の爲め全滅となりし

やも計られず……その語を某所にて耳に致しました。第一震と同時に陸軍砲工學校内の化學藥品室より火を發し、第二第三震と共に火は益々盛んとなりすでに大事に至らんとする中に一小使の犠牲的なる働きに依つて辛くも消しとめたと云ふ事で御座います。

逃げまどふ藥品室の責任者及び續々到大ゆれに魂も身にそはず、彼の勇敢なる働きを手をむなしふして見て居る、仲間の奴者を尻目にかけて當時水道も出ぬ事として校内中を走り廻り輕便消火器を集め正に倒壊せんとする屋中に踏み止まり、徹頭徹尾彼一人の手を以て消しとめたと云ふ談を聞き我等大いに感激致しました。

當時あの混亂の中に彼の烈風にあふられたる猛火の若松町余丁町一帶をなめ廻る様を想像する時我等思はず襟を正しふして其の勇敢なる一小使の前に、三拜九拜せずに居られぬ程の感謝と感激を禁じ得られませぬ

牛込區の恩人、山の手の恩人たる彼の小使の姓名すら現に美談を聞いた私共すら知るを得ませんでした。

まして其の他の方々は自分等の今日の安全幸福の裏にかゝる陰れた働きのあつた事も全然知らずに居られるに相違ありませぬ。私は其をたまらなく残念に思ひます。

學校當局としては勿論相當の恩賞もあつた事と考へます。然し我々は我々で其の恩人に對し尊敬と感謝とを永久に記念したく思ひます。局外者の私共残念にも當時のくはしき模様及び彼の姓名をさへ知り得ぬのを心外に存じまして、強て無禮を願みず此の書を區長殿まで差出す次第で御座います。地震後すでに二ヶ月餘を過ぎて其の談を初めて聞知つたのを返す／＼も残念に思ひます。幸に區より學校當局に付いてくわしき當時の動き振り彼の姓名等を取調べ確實なる實證を得られましたならば我々區民にまで御發表願へれば此の上なき幸ひに存じます。感激の夜。若松町 有志

三位牛込區長殿

●家を倒して火の手を斷つ

震災當日 四谷區旭町六十二番地豆腐製造業籠宮政吉方では、丁度油揚を拵へてゐる最中だつたが第一回の大揺れと共に、家屋が倒潰して、忽ち出火した。消すものゝない火の手は折からの烈風に煽られて忽ち延焼し始めた。

宿直明で、自宅永住町三番地に休養中であつた四谷署の千葉巡查部長は、地震と知ると共に家を出

て警察署に出掛けようとしたが、途中、新宿方面は火事だと聞いたので、折柄同方面へ進行中の貨物自動車に飛び乗り追分電車停留所に行くと、既に旭町の半分は猛火に包まれ、風の吹くまゝに南から北へと、火はだん／＼新宿三丁目及淀橋町角管に移るところであつた。

角管方面には、郡部から出動した消防隊が淀橋署員と協力して消火に努めて居たが、四谷署管内には消防隊の影も見えず、只管居住民の避難にのみ努めるの外はなかつた。

程なく風の方向が西南に變らうとして、追分方面が比較的沈靜の状態になつたので、千葉巡查部長は火を喰ひ止めるのは今だ、何處か適當な場所で、家屋を倒壊しやうと企て、火煙の中を潜つて火災區域を一巡したが、火は既に東京貯蓄銀行の大建築物を襲ひ、其の屋上を焼き抜き、將に東隣に移らうとし、更に其の南方から延焼して來た火は屋根瓦の落ちた隣家に移り、やがて東隣のお湯屋にまで及ぼうとして居る。

其の時消防手十名ばかり集合して居るのを見つけたので、防火方を頼んだが、『消防署長の指揮でなければ行動せない』とはねつけられた。此の儘隣りのお湯屋に燃え移したら、最早消火の術がないと思つた千葉氏は、先づ地形上消火に最も効ありさうな西隣りの小川芳太郎氏の住宅を倒壊することに思ひ付いた。

直ちに附近の金物商岡田惣次郎方に駆けつけ、鋤を借り受け、盛に燃へつゝある東京貯蓄銀行から東方僅か三戸を隔てた小川芳太郎氏住宅に上らうとした。地震のために大部破損した函段をも構はず中途まで上つた時、餘震襲來して、轉がり落ちたが再び勇を鼓して階上に上つた、見ると二階の外部に面する場所は、約八分直徑の鐵棒の柵を廻らしてあるので、屋外に出られず、それでは活動が出来ないので、携へた鋤で鐵棒一本を打ち外し、同署勤務巡查笹島俊雄氏が後から上つて來たのを幸ひに一緒に二階の庇に出て、街上の民衆から得た大綱を天井の梁に結びつけ、出動中の署員や民衆に曳かせて一氣にこれを倒壊しやうとしたのであつた。

けれども、東京貯蓄銀行の火炎は一層猛烈で、煙は倒れかゝつた家屋内に充滿して刻々危険は迫つて來る、曳綱は數回も切れて建物は容易に動かぬ、或は結び合はしたりすること數分時、どうやら家屋が動揺し始めたので、先づ笹島巡查を危険より免れしめ、彼自身は尙も二階に踏み止り、綱の切断を監視して居たが西隣の屋根には既に火が移り、又一方盛に燃えつゝある東京貯蓄銀行三階の外壁が落ちたため、火炎は庇の鐵力屋根を焦し、強熱のため屋根裏一面から煙煙を吹き出すばかりでなく、倒壊せんとする家屋に密接した土藏は、屋根が落ちたため、其處から點火して内部に擴り、火さきは部長の衣服を焦し、毛髪を焼かんばかりに危険は分秒を争つて迫つてくるのであつた。

之を見た街上の民衆は「危険だ、危険だ、早く下りろ」と叫んだ。中には「馬鹿野郎、今に死ぬぞ」と罵る者さへあるのに、氏は尙も屈せず、曳綱の切斷を監視しつつ、街路で綱を曳いて居る署員や民衆を勵まし音頭を取った。この決死の勇敢な行爲に勵まされた人々は死力を盡して大綱を曳いたのでさしもの家も約四十度位の角度に傾斜したので、部長は裏手の板塀を傳はり、猿の如く燃えつつある土藏の裏に飛び上り、表電車通りに身を避けた。かうした署員と民衆との必死の努力は遂に午後四時頃までにこの方面の火の手を消しとめることが出来たのである。

四谷は此の火事で、旭町の一部と新宿三丁目の大部分四百五十七戸を焼失したが、若し此の場所で消し止めることが出来ず、東隣りのお湯屋に延焼し尙ほ電車通りの東方にまで及んだならば、到底消火の途なく、恐らくは、牛込區をも焦土と化さしめたであらう。

千葉巡査部長の勇敢な此の行動は、實に、四谷をして安全たらしめたもので、偉大なる功績として推賞すべきものである。

四谷警察署勤務 千葉巡査部長

●一族の努力防火に成功

省線電車がお茶の水から萬世橋驛に入らうとする左側の高架線下、昌平橋に並んだ市電専用の橋の袂に昌林堂朝田書店といふ新しい三階建の建物がある。間口は二間半、奥行は七間、それが今度の大地震火災の眞つたゞ中に立つて、焼けも壊れもせず原形その儘に残つて居るのは恰かも奇蹟のやうに思はるゝが必らずしも、風向や地の利の關係ばかりでは無く、残るには残つただけの美しい一族協同の人の働きが籠つて居たからであつた。事實は店主朝田金三君(二十四)の直話に明らかである。

「御覽の通り下は神田川に沿うた昌平河岸の柔かい地盤で細長い建物ですから知人は皆地震で潰れたものと思つてゐました。併し昨年やゝ大きな地震があつた時に建築中であつたものですから耐震上には種々念入にしたので(設計者は現在三階に同居の太田四郎君)震災の被害は少しも受けませんでした。

火災が起るとすぐ附近の松住町に住んでゐる父長右衛門(六十五)兄基一(三十九)次兄幸造(三十一)母とみ(六十三)の一族が自分の家を捨て、飛んで来てくれました、そして異口同音に一族中せ

めて此の一軒だけは残さなければならぬといふのです。妻は危険ですから親類の者に頼んで上野方面に避難させました。母にも避難をすすめましたが一族と行動を共にしたいといつて聞入れませんでした。

一日午後の三時半頃駿河臺方面からの飛火は一軒へだてた南隣の薪炭店に點火して燃えあがりました。そこで一族は手分して消火につとめました。炭屋のことですからなか／＼鎮火しません。恰度其の時刺子を着た二人の鳶職が水道のホースを一本貸してくれましたから、それを使つて防ぎました。間もなく水が出なくなつてしまひました。火は忽ち平屋の隣に移り附近にあつた材木も燃え出したので平家は丸太で倒し、材木は神田川に落しなどしました。其の中にそれまでの西風が急に東風にかはつたので大きに助かりました。此の防火中店の前に二臺の電車がありました。若しそれに火がつけば店は勿論向側も焼けるので向側の人達と力を合せて橋の上まで押して行きました。

一同やつと胸を撫でおろす間もなく夜の六時頃またノノ神坂の方から来た火がだん／＼あたりを舐めつくして向側に襲つて來ました。家の中を探すと十箇ばかりのバケツがあり、又地下室に紐がありましたから、バケツに紐をつけて神田川の水を汲んで二階や三階に駈上つて消しましたが暑くて／＼とても耐へられませんか。其の苦しみといつたら全く生きた心地もしませんでした。頭から

水を浴びては働き、働いては又水を浴びるといふ有様で、往來には最早人影も少なくなつて僅に四五名橋の上に逃残つたのが見えるばかりでした。捨てた荷物がゴロ／＼してあつてそれに火がつかますから夢中になつてそれを消しました。又窓下にあつた梅の枯木にも火がつかましたから苦心して漸く消止めました。

防火中は窓を閉ぢておきましたが家の中がむれるかと思つて窓を開けたこともありました。これで安心と喜んでゐますと二日の朝の四時頃それまで焼残つてゐた教育博物館が俄に燃えあがつて火の粉が盛に飛んで來ました。其の時も風下になつてゐましたから前にもまして骨が折れました。しかし一族の力のみで助かつたのは全く夢のやうです。

神田町昌平橋際 昌林堂 朝田金三君一家の人々

●不思議に焼残つた富士見小學校

神樂坂を下りて牛込見附から九段上に出やうとする右側に大きな建物が三つ並んでゐる。富士見町教會と日本齒科醫學専門學校と富士見尋常小學校とである。齒科醫專の鐵筋コンクリート三階建を間

に教會も小學校も木造であつた。

九月一日地震と殆んど同時に齒科醫專は火を發した。火は四方に燒え擴がつて牛込見附の附近、飯田町の電車通り飯田町驛、佛大使館までも燒けて行つた。此に不思議にも燒け残つたのがすぐ隣の富士見尋常小學校である。地震が終り火事が止んだ時、あの近所の人や道を通る人が口々に

「よく残つたネ」

と驚いて行つた。隣のコンクリートの窓からは紅蓮の火が舌を出して、何べん富士見學校を舐めやうとしたかわからなかつた。北に東に南に西に風向きは一晩の中に何度變つたかわからなかつた。然も富士見の三階建は燒けなかつた。表通りに面した三階の窓の右から二つ目に火のついたあとが今に残つてゐる。實際火がついたのである。然も燒失をまぬがれた。奇蹟であらうか。天運であらうか。實際一面から言へばあゝした際に燒けなかつたのは奇蹟である。隣りが火元であつた事からして確かに奇蹟といへば言へる。然しあの當時、富士見尋常小學校に踏み止つて防火に盡力した校長以下數名の職員の行動を聞いたならば、ただ奇蹟である、天運であるとのみは云へないであらう。あの當時、水も出なかつた。校内には消火栓もあつた。然し涙程の水も出なかつた。消防隊も直き近くに九段出張所がある。然し學校に對する防火は少しもしない。出来なかつたのである。

富士見小學校が燒け残つたために何の位の人が助かつたか。二日から學校を開放し千數百名の避難者を收容したのも麴町區が十月一日から中學教育を始められたのも此の學校の燒け残つたおかげである。

富士見小學校職員使丁の功績は没することは出来ぬ。震災直後から數日間學校に止まつて、我家を顧みなかつた、校長津田信雄君の手記をその儘轉載する。

九月一日大地震と共に隣接日本齒科醫學專門學校から發火したのを認め、直ちに御眞影を九段靖國神社社務所にお遷し申す(別紙御眞影奉遷記参照)

一方防火の爲消火栓を開いて使はふとしたが、直ぐに水が止まつて役に立たない。ただ下の水道は十數分間出水して居たからバケツに之を汲み職員と使丁とが協力して二階及三階に運べるだけ運んだ。

隣の火は見る／＼内に同校會堂を燒き拂ひ、急遽當校の右側面に迫り、羽目ガラス窓が熱し來る是を見るより用意の水を羽目に注いで防止してゐたが暫時にして此の水も斷たれてしまつた。火は南隅の土藏に移り、吐き出した火の粉は度々風に煽られて吾校の羽目を撫でたけれ共幸に燃え移るには至らなかつた。其の内に土藏は燒け墜ちたので此の方面の危険は去つた。

此の時已に一方の火は、風に從つて東北方に擴がり附屬病院（鐵筋コンクリート建物）を残して一方は遠く見附方面に延び、一方は近く吾校前の人家に移り、右に走りつつ我校の前面を襲つて來た。

此の時小數の警官と兵士等は民家を毀つて防止せんと企てたが事成らず、終に最端の文房具屋三角堂に移つた。此の時我校の正面は猛火に熱せられ、時に櫻樹に火がうつつて甚しく危険に陥つた。果然、羽目裏から白煙の出るのを認めた。三角堂は焼け乍ら前の路上に倒れた。之れに煽られた火は吾校の櫻樹に移り、火は之を走つて意外にも三階の縦樋のペンキ（剝けてういた部分）につき續いてを窓を間にして兩方の羽目に燃え付いた。

萬事休すと、直ちに警鐘を亂打して最後の處置を命じた。教員小使等は長柄箒に水を浸し、此の火を消さんと企てた折、猛風一過、火は偶然にも消えてしまつた。併し餘燼尙羽目を掩うてゐたが長柄の箒は直ちにこの餘燼を消した。時に午後四時である。（此時全く安全になつたことを區長に報告した）

之で全く危険状態を脱したものと安堵した處が、豈計らんや焼け残つたと思つた附屬病院の一端（二階一階）が突然火を發した。鐵筋コンクリートの内部は猛火炎々として凄まじく漸次に左室に擴

がり再び吾校の右側面を衝かん状態を示した。此の場合第一に氣付いたのは今焼けてゐる建物の、吾校の側面と相對する窓が數ヶ所開いてゐる事だつた。此の窓——防火用網ガラス（齒科醫專が昨年建築にあたり吾富士見小學校よりの出火の類焼をおそれ高價なガラスを此處に用ひた）を閉ぢる事は防火上最必要であると考へて職員小使、一二名の警官、數名の兵士と協力して、梯子、棒等を用ひ、先づ一二階の窓數個を完全に閉ぢた。尙下の一窓は重要器械を取出すために打壞してあつたから、他からなまこ板を持つて來て、敏速に防いだ。且出入口も同様になまこ板で掩ひ、倒れないやうに棒や梯子をあてがつた。然るに三階の二つの窓が開いてゐる。梯子も棒もなか／＼届かないただ下から見上げるばかりで最早せんかたなしと諦めるより外に仕方がなかつた。

「かくすべてを完全に閉ぢたのに、あの二個のみを閉ぢられないのは如何にも残念だ」
とは一同の嘆聲であつたが、最早策が盡きた。火は已に逼つた。

然るに此の時「加藤由五郎訓導」は、急遽三階に昇り、廊下の窓を開き、國旗の竿を出して、彼の窓を閉ぢようとした。彼我三階の距離は此竿の長さ程近かつた。竿の重みで何遍か落ちやうとするのを手に支へて遂にガラスを衝いて窓を閉ぢた。然し完全には閉ぢられなかつた。此の窓は中央に開閉の度を加減する金屬製の棒があつたが竿で閉ぢる時之を中に入れる事が出来なかつた。とう

く一寸程の間隙を残して窓は音を立てて締つた。

絶望であつた三階の窓が締つた事は下に見てゐた者が歓聲を擧げた程、驚喜された、併し私達はその一寸の間隙を思つて再び不安に沈んだ。此の場合之れ以上人力の如何ともすべからざる事と断念するより外はなかつた。

此の時誰れ言ふとなく、

「側面は先づ完全に閉ぢられた。風は正面へ吹くから前面の窓に石を投げて破らなければいけない。そうしたら室内の火は正面に吹き出すはず。」

と、一同正面の焼跡にまわつて、石瓦などを窓に向つて投げた。ガラスは凄まじい音を立てて毀れ、猛火は果然前面に向つて逸出てしゐた。

然し此建物の焼ける様子を見てゐると、前面も後部も恐ろしい火勢は内部の本質のあらゆる部分あらゆる物を焼盡しガラス窓は焼け溶け毀れ、そこから火焰を吐き出す私等の閉ぢた窓だけが溶けず溶けず毀れずのやうとは誰れが信じ得たらう。それがよし網ガラスであつても。

火は徐に、しかも強く恐ろしく順次に室を征服して接して來た。一同は三階や二階の——焼けるやうに熱い——火の室を慄え乍ら見上げて、

「どうかあのガラスのみはこはれずに」

と祈るより外はなかつた。しかし不思議にも閉ぢた窓は遂に火に耐えた。破れず毀れず、完全に火を防ぎ止めた。病院は三階を残して午後七時鎮火した。

私等は此の焼け残つた病院の三階が今から四時間の後再び火を吐かうとは思ひがけなかつたので全く安心して、再び危険状態を脱した旨を報告した。御眞影もお遷し申した。そして明日は早くから多くの罹災者の避難所として當校を開放するについて考へてゐた位であつた。

然るに意外にも午後十一時頃病院三階の一端の室が突然火を吐き出した。執拗な火勢は先づ三階を横貫した廊下に傳はり、先驅の黒烟は彼の三階の二窓の寸隙から噴出する。此の時風の方向は一變し、我校舍は全く此烟で掩はれる不利の状態に陥つた。午前一時に至り、烟は火と化し風と共に猛烈に我校を襲はうとする形勢を示した我々は手の下しやうもなく拱手して見てゐなければならぬ。

燃えるだけの物が燃えた。三階の物は皆燃え盡したのだらう。火勢は急に弱つた。吾等が胸撫で下したのは實に二時少し前だつた。

● 琴平町一角の協同防火

大正十二年九月一日午前十時、例によつて海軍省まで御用達に行く。

十一時半頃建築課本部の二階にゐた。十一時五十六七分突然の震動。大地震であつた。激震に次ぐに激震、瞬時にして大音響。隣接せる煉瓦造りの大建築物崩壊の音であつた。その飛散する煉瓦の破片の爲に、硝子窓はたちまちのうちに破壊され、實に危険千萬であつた。これでは自宅もやられたな……氣か氣でない。早速同所を辭して、自轉車で最大急行。途中到る處物凄く破損官舎の屋根も貴衆兩院もメチャク、加ふるに露國大使館の前は土煙のため、殆んど自轉車を走らすことが出来なかつた。それは破壊した土塀の土煙であつた。破損、倒壊、倒壊破損の間をやつと通りぬけて自宅に歸つた、案の定商品は残らず倒壊、破裂、店は殆んど沼の如く、足を踏み入れることさへ出来なかつたであつたが、日頃恩顧に預る東伏見宮邸のことが氣にかゝつた。店は其のまゝ打つちやつて直ちに御機嫌奉伺と駈出した。御被害の大きいのに驚いた。それにも關らず、避難民救助炊出しで大混雜の最中であつた。あゝお恵み深き大御心と知らず……有難涙がこぼれた。午後二三時頃にはあちらもこちら

らも火災、近隣鍋島侯爵邸、東京女學館等に延焼した。琴平町二番地にも新たに火の手を擧げた。火は忽ち同町を一掃めに舐め盡さうとする勢を示した。町民周章狼狽一方ではない。かゝる間に火焰は早や米國大使館を包圍した。大倉男爵邸に押寄せた、忽ち飛んで芝區西久保巴町より、明舟町へと移つた。折柄風は東と南とから吹きつける我が琴平町十二番地は全く風下となつた。もはや類焼は免れぬものと覺悟した。時に午後十一時過。

警視廳消防手が援けに來たけれども、水道は全く斷水して手の附けやうがない。虎の門下水を利用しようとした。これもホースがない。短くて水がつかない、消防は全く絶望に陥つた。時に工兵の一隊が猛火を侵して駈けつけた。明舟町一番地角、龜清鰻店の屋根にかけのぼると見るや直ちに直ちに破壊防禦に着手した同時にホースも到着して、消防に盡力してくれた。一方工兵の一部隊は明舟町表通りを同町廿番地東伏見宮邸前まで破壊してくれた上に消防手の消防、町民の誰れ彼となくが、殆んど三尺位の間隔でバケツ、手桶その他に水を運び、必死となつて防火につとめたので、僅か九尺の道路をへだて、我が琴平町十二、十三番地は全く火災から逃れることが出来たのである。

中にも琴平町一番地、在郷軍人磯部濱三君、明舟町十九番地大石義一君、同番地平野周次君の如きは最初から泥水を浴びつゝ必死の防火につとめた。就中、琴平町二番地の高橋作次郎君の如きは、自

家の類焼したのにもかゝらず、琴平町十二番地の前通りに火の移つた時など「こんな時に、消防のため水汲みをしらないものは全く非國民である。」と大聲でとなりながら、町民をばげました。そこで男子は言ふに及ばず數多の婦女子までが勇敢に防火につとめたのである。

斯の如き大火災は實に有史以來の大慘事である。殊に十數萬の人命が大慘死を遂げたことは、人力の及ばない天災とは言ふものゝ、畢竟國民に協同作業の訓練が足りなかつたとも言ひ得るのである。

芝區琴平町十二番地 酒商 村田 八郎君 (五二) の手記

● 残存小學校職員の奮闘

官民協力必死防火に努めて、千六百餘戸の焼失を免れしめた神田區佐久間町和泉町等の一角中にある佐久間小學校は、區内唯一の残存小學校として、校長川添誠一君を始とし、職員小使に至るまで、協力一致夜を以て日に繼ぎ、前後六十日間嘗て一日の休養なく、或は防火に、或は救護に、或は教育の復興に努力した。今同校に於ける記録中から其の一端を抄録して、其の功績をしのぼう。

(一) 震災と火災

九月一日職員晝食中強震あり、校舎の屋根瓦殆んど全部墜落し黒板大戸棚等倒壊す。

火の元に注意し、一同運動場に避難し、餘震の鎮靜するを待ち、被害を調査し、電話不通なるを以て森田訓導をして實況を區長に報告せしめ、部署を定めて校舎内外の取片づけに従事す。

午後二時前後には、既に市内各所に出火し、學校附近下谷區二長町三ッ輪化學研究所亦焼失す。四圍の形勢甚だ心痛すべきものあるを以て、新に分擔を定め、警戒避難救護の準備を整ふ。

午後四時頃には火の粉頻りに落下すれども、避難し來るものあり。依て炊出に着手す。

午後五時半遂に東神田方面の飛火を受けて、校舎中央の屋上より發火せし。米山訓導邊見小使等數名、或は玄關の屋上より屋根に掛けたる梯子により、或は階上教室の兒童用机を重ね天井を破りて、危険を冒し、火に近づきて撲消したるため、幸に事なきを得たり。

夜に入りて避難者次第に加はる。二日午後二時川添校長は火中を一橋高等小學校燒跡に立退ける神田區役所假事務所に區長を訪ひ、附近の實況を報告し避難者救護の法につき協定す。

(二) 救護

九月一日午後四時頃より三々五々避難し來るものありしを以て、備付の藎を與へ運動場に收容す。二日に至り漸次多きを加ふ。皆困憊飢渴を訴ふる者のみなるを以て近傍商家より穀菜を購入して臨機

炊出を行ふ、物資整はざるを以て鹽握飯に少許の福神漬等を配す。斯くして二日間に救護したる人員一千三百人に達し、白米壹石六斗を使用せり。

最初は罹災の状況判明せず、救護の程度も豫想し能はざりしが、漸次被害の甚大にして大規模に救助すること極めて必要なるを察知したる爲、一方に於ては職員の部署を新にして總務、收容、監督、給養、衛生、警備、調査、文書、庶務の九係に分ち、三百餘名の避難者を六分して之を階下の六教室に收容す。内一室には浅草區向柳原町の醫師野崎甲子郎君並に傷病者を容れ、各室外に氏名を貼出し別に門外には柵に黒板五枚を掛けて避難者の前住所及氏名を掲げ、各室より室長副室長を互選せしめ夜警は男子、炊事並に掃除は女子の當番と定め、門限を午前五時より午後七時とし、出入には門鑑を與へて之を取締り、搬入したる荷物の容積大なるものは、運動場の一部を區劃してこゝに整頓せしめ焼けたる亜鉛板の類を以て、雨覆をなさしめ、又他方に於ては佐久間町四丁目の有志者鈴木清次郎君等に依頼して、神田川筋の間屋より米穀二十俵の寄贈を受け、其の他澤庵梅干薪炭雜品を蒐集し、別に職員を山の手千住方面に派して衛生材料、蠟燭、日用品、野菜類の購入、糞尿汲取の手段を講じ、斯の如くにして九月三日には略ぼ救護の準備を了せり。(中略)

十月二十二日より避難者を區内各小學校燒跡に建造したる收容バラックに移轉せしめ、二十五日閉

所式を行ふ。九月一日より當日までの收容延人員は約一萬人に達せり。

(三) 教育の復興

今回の震災によりて校舎を開放し、罹災者を收容したりと雖へども、通學區域の殆んど全部は幸に類焼の難を免れ、児童中には他に避難したる者あれども其の多くは現住し居るを以て、簡易なる方法に依り教育を繼續するの必要を認め、百難を排して九月十日頃より僅少の時間なりとも授業を開始せんと企てたれども、實行すること能はざりき。依りて先づ避難のために二回搬出混雜したる重要書類を整頓し、職員の手を以てなし待べき校舎校具に修繕を加へ、九月十五、十六の兩日に亘りて現住児童と他より避難し來れる児童との學籍を調査し、十月十日在來の児童を召集し、十一日避難児童の入學を受付た、十二日始業式を行ひ十五日より二部に編制して時間割を定め、一週十二時間の露天授業を開始す。

十月二十四日より校舎の大修繕に着手し、廿五日避難所を閉鎖し、三日間職員小使の協方に依りて灰汁洗を行ひ、天長節祝日の儀式を挙げ、机腰掛全部を整理して、輕部榮次郎野村禮三兩技師に職員小使児童全部の健康診断を求め、十一月九日學校創立記念式を行ひ、翌十日より通常の授業を開始せり。

其の間職員の手に成りし四百枚に及べる各科教授細目を騰寫製本して区内其の他の焼失學校に贈呈せり。

東京市佐久間尋常小學校長 川添誠一君外職員一同

●奮闘克く赤坂區一ツ木町丹後町一圓の延焼を喰止む

九月一日の大地震後間もなく赤坂區新町三丁目二十八番地に火災が起つた。此の外にも數箇所を失して其の火勢は忽ちにして猛威を逞しうするに至つた。

近衛三聯隊の營舎は一ツ木町にあり、此の火災の西方約百米の地點には酒保や炊事場があつた。火の手は刻々に聯隊の方へ迫つて来て、危険云ふべくもなかつた。中村大尉以下九十七名の將卒は此の方面の防火に任じ、能く消火に盡力した。火先は多數の家屋を焼きながら漸次北方に移つたため、酒保、炊事場の方面は幾分危険の度を減するやうになつた。けれども聯隊の東北端に當り一段と低い地域にあつた機關銃隊の厩は北方に進む火勢を受けて危険極りなかつた。壁に手を當て、見ると已に焦熱を感ずるに至つたので、大尉は之を破壊せしめた。一度此處に火災を招いたならば地勢上の火は手

追々に聯隊の内部に侵入すべく、又一ツ木町三十七番地大野家具店にも燃え移つて深く同町圓通寺方面に延焼するに至つたであらう。勇卒等は僅かに十分間にして之を破壊し終つた。

聯隊に對する危険は茲に於て既に取り去られた。けれども新町の火災は容易に衰ふべくもない。北へ西へと進んで、遂に聯隊下、新町三丁目巡查派出所の傍なる瓦斯會社出張所に及んだ。一方山王下方面から田町を焼いて來た火の手と合して、折柄の烈風に火勢は愈々急である。大島特務曹長の指揮する手押唧筒を瓦斯會社出張所の方に招んで來たけれども搬水が意の如くならない。附近の井戸から水を汲んで漸く防火に努めたが火は愈々猛烈で瞬く間に同出張所を焼き盡してしまつた。猛り狂つた火先は道を越えて一ツ木町三十五番地角、澤崎鳥店、飯沼運送店に襲ひかゝり已に其の軒先まで焼くに至つた。

附近の人々とは見れば多くは地震に怯え、猛火に怖れて近寄るものとはない。此の時突如として運送店の屋根に現れたのは市川市輔君である。兵士等は手に手にバケツを携へ、列をなして水を運ぶ市川君は兵士等に指針を與へながら、其の水を受け取つては打ち掛け、受けては掛け、降りくる火の粉を浴びつゝ阿修羅の如く活動した。馬場源次郎君も此の時に働いた勇士の一人であつた。

軍隊は輕便消火器や唧筒を使用して死力を盡したが何分にも水の力弱く、荒狂ふ猛火に對しては殆

んど効を奏しない。第十中隊上等兵曾根清三郎君、同二等卒鳥海武治君、同二等卒須江又重郎君、第十一中隊上等兵關知次君、同上等兵澤上精君等は決然として鳥屋の二階に上つた。關上等兵は壁を破壊した。一同は此處から水を投げ掛けて暫く猛火と戦つた。外部からはホースで水を送る。兵士等はバケツで水運ぶ。既に軒先まで燃え移つた火先を遂に防ぎ止めてしまつた。瓦斯會社出張所と鳥屋との間にある。道路は實に一ツ木町から丹後町へはいる一つの入口である。此の火を喰止めたのは即ち一ツ木町、丹後町一圓の延焼を救つた事に外ならない。市民は驚歎の極思はず聲を揚げて賞讃したのであつた。

新町三丁目巡查派出所の附近で目覺しい活動のあつたのは午後三時頃の事であつた。火勢は尙其の鋒先を収めない。新町二丁目から同一丁目へと一ツ木通りの東側を焼き拂ひつゝ進んで時々西側の家屋にも移らんとした。聯隊の消防隊は火を追つて進み、將に焼け落ちんとする家をば東方へ押潰して西側への延焼を防ぎ、一ツ木側に飛火すれば直ちに揉消してなどして百方消防に盡してゐたが、何時鎮火するとも見えないので、一ツ木町威徳寺附近の三又路に於て全く火先を停めんものと決し、其の突角なる梅野薬店並に其の兩側三軒を破壊すべく、家毎に兵卒五六名宛を上げしめた。兵士等は水を通ずるために先づ側壁を破壊した。火先は已に背後に追つてゐるのだ。作業未だ半ばならずして猛

火の臨む所となつてしまつた。勇士の面々は之にも屈せず、火焰の中に奮闘して三戸の家を悉く破壊し、道路の反對側に倒潰せしめた。さしにも猛り狂つた火勢も此の一蹴に遇つて漸く其の鋭鋒を收めた。一ツ木町丹後町の一圓は殆ど全く無事なるを得たのであつた。

此の時田町二丁目、閑院宮殿下附近には第三消防署の出動があつて濠の水を用ひつゝ消防大いに力めてゐた。彼等が田町方面の火勢を消し止めたのは二聯隊勇士の活動と相俟つて赤坂見附方面への延焼を防止することが出来たのである。時に午後五時頃であつた。

近衛歩兵第三聯隊陸軍歩兵大尉 中村唯一氏以下九十七名

一ツ木町四十八番地 壽 市 川 市 輔君 (四十八年)

同 三十九番地 藤原商 馬場源次郎君

●勇敢な防火

大激震勃發當時、軍陣衛生學主席教官兼兵器研究室主任小泉二等軍醫正は化學兵器研究室内剖檢室に勤務して居つた。

第一震が起ると、重要器械を支持しようとしてかたはらに居た加藤雇員を率ゐて生物學室に馳せ入つた。室内の諸器械は倒壊散亂して手の下しやうもない。階下の血液瓦斯室からは毒瓦斯が漏れて来る。其の煙が朦々として階上を襲ふ。小泉軍醫正は直に各室を密閉した。毒瓦斯は漏れなくなり、炭酸瓦斯を放出するので火は消えかかった。

一方衛生學教室は第一震で被害の程度がひどい。職員一同は前庭に避難しようとした。職員の一入光岡雇員は階上實室の瓦斯が點火の儘だったので階上に駆上つた。瀕々と来る餘震にも恐れず瓦斯口數個を閉鎖し、尙階下理學業室内の瓦斯元口をも閉塞した。

青木一等軍醫は、此の時研究室内の酒精浸出口を閉ぢ且傍にあつた水甕を破碎して黄燐の上に灌ぎ床板の上におちて白煙をあげてゐるのを消し止めた。

瓦斯元口を閉鎖した光岡雇員は、窓からとび出たが階上實驗室から又白煙が朦々とあがつてゐるの氣がついた。勇敢にも再び階上に登り行き、實驗室をのぞいた。ケツヘルト分析器に附屬してゐる燐の壺が六つ床の上に墜して盛に發火してゐる。輕便消火器は破壊して用をしない。何か消火にかふ物はないかと、あたりを見まはすと幸にも濾過用の砂が澤山の甕にあふれる程入つてゐる。すぐに之を火焰の上に撒分した處が充分消止めることが出来た。光岡雇員は消火栓からのフォースを階上に

ひき上げ消火しようと思ひつたので教室北側の防疫部前庭に避難してゐる人々に向つて大聲に

「網を持って来て呉れ！」

と叫んだ。然し直ぐ應じて呉れないので、自ら階段を駆け下り教室外にとび出した。網を持って来る者にあつたので、氏は直ちに之を受けとつて二階に登り同時にかけ上つて来た。青木一等軍醫と協力して南側の窓から之を垂下し消火用フォースの一端を前庭に避難して居た者にたのんで連結して貰つた。そして前端を階上實驗室内に引き入れた。

「消火栓を開いて呉れ！」

と怒鳴つたが斷水である。一滴の水も出ない。それと知つた二人は一刻も猶豫すべきでないとしてフォースの前端と網を室内に固定し之を命綱として窓から教室の前庭へ通出した。そして折柄兵器研究室から馳せ來つた小泉教官に報告した。

小泉教官は、藥品置場の危険なるを非常に憂慮し、教室職員全部を督勵し、自分に従ひ来る事を命じ教室内に突入した。第一に隨行したのは勇敢なる雇員光岡氏である。薬品格納庫内に入ると向合つた薬品棚から倒壊した薬瓶が雜然としてかさなり合ひ、白煙は朦々と立ち昇つてゐる。金屬ナトリウム及黄燐が發火してゐるのである。直ちに窓を開き、窓の外に居る者に土砂の運搬を命じた。加藤

稻熊兩雇員は聲に應じて盛土を送つた。然し其の量が少ないので土砂の隙間から火焰、惡臭噴出して呼吸が困しくなつた。小泉教官は更に頭を窓から出し防疫部前庭に避難してゐた職員に向つて大聲で應援を求めた傭人小島イト、渡邊米の二人が馳参じ教室員と協力して土砂の運搬を援助した。倒壊した薬物は概ね土を載せ了つた。火焰は漸く消えたので小泉教官と光岡雇員は共に窓から遁出た。今少しおそれれば窒息したかも知れない。處が又教室の床下通氣孔十數ヶ所から白煙が噴出する青木一等軍醫以下教室諸員及此の時かけつけた川久保雇員（氏は定例休暇を得て麴町三番町の自宅にゐた。激震と同時に居宅附近から發火したので頼焼はまぬかれまいと覺悟し、歩行不自山の老父を背負つて外に出た。學校の方に煙が盛に昇るのをみると老父を妻に托し避難先を指示して出發させ自らは輕装して急いで登校したのである）を激勵して土砂を以て其の通氣孔を密閉し、尙教室東北隅の扉下半分を破壊して薬品にどしどし土をかけさせた。火の勢は其のために大分弱つた。青木一等軍醫に消防作業の指揮代理を命じ極力土砂の投入を續行させた。そして化學兵器研究室に急行し、臨機の處置を講ずると又現場に歸つた。床下通氣孔からの發煙は依然やまない。閉塞した土砂の間から白煙異臭湧出し且つ時々倒壊した薬品戸棚の空隙から火焰が舌を出す。危険は刻々に迫つて来る。此の時小泉教官は扉全部、及教室外壁の一部を破壊し、土の下になつてゐる薬品を其の格納戸棚と共に搬出しようとい決

心し、直ぐに破壊作業を講じた。機に應じた准士官學生長宗上等看護長及光岡靖君は鶴嘴を以て扉を全部破壊した。通氣と同時に白煙朦々附近一帯の外路を覆ふて火災は軒を嘗めるばかり附近の住民は柵外に集まつて來た。

「毒瓦斯は大丈夫ですか」

「大變々々。」

「早く消して下さい。」

喧噪は其の極に達した。

「大丈夫だから這入つてはいかん。」

「危険だから這入つてはいかん。」

と應答しながら益諸員を激勵し、危険薬品及焦爛つた物を搬出させた。光岡靖君の如きは手拭を以て鼻口を縛りシャベルを手にして朦々たる燐煙の内に進入し、點々發煙する混焼の土塊の投出に盡瘁した。

是より前近衛歩兵第二聯隊へ、圓匙を持つた消防隊の派遣方を請求してゐいたのが此の時到着した午後二時十分である。下士以下六名に消防作業は熱心であり、勇敢であつて、焦爛した床は忽ち切り

取られ、焦土は除かれ、燃焼しつつあるものは投出され、危険薬品は完全に地中に埋没された。是れに先だつて小泉教官は覆面装着のまま化学兵器研究室の地下薬室に突入した。中和剤容器を破壊して倒潰してゐる瓦斯筒から漏れる鹽素瓦斯の中和を敢行したが、酸素發生材料から發火した爲め、とても室内に居堪らず、急いで窓から遁出た其處に居合せた加藤雇員と協力して、土砂を室内に投入して、床上の火を消し、尙イペリット其の他の毒液を搬出し之を完全な研究室外の鐵室に移して密閉してしまつた。

かうして餘震續發の裡、前後四時間に亘る冒險な消火作業は機敏に敢行された、そして午後四時になつて研究室及教室諸員は漸く晝食をとつた。尙徹宵警戒の任を果し遂に克く教室の燒失及研究室の爆發を防いだのである。

陸軍軍醫學校教員

教官陸軍二等軍醫正

小泉親彦君

校附陸軍一等軍醫正

青木九一郎君

准士官生陸軍上等看護長

長宗覺藏君

雇員 川久保信義君

稻熊安次郎君

光岡靖君

加藤ナオミ子

備人 小島イト子

渡邊米子

小使 渡邊直七君

●橋場町を救つた十六軒長屋の奮闘

今度の大震災に、危くも奇蹟のやうに焼け残つた所が方々にあるが、淺草區橋場町の三百十八戸もその一つである。その中には、河岸よりに、有馬伯爵邸や、元代議士の今井喜八氏の邸などを初め宏莊な住宅が澤山ある。この町のこれだけの家が助かつたについてはかういふかくれた美談がある。

この邊は第一震と同時に、橋場町二三七番地の、有名な總泉寺の門前の油屋から發火した。そして見る／＼全町に擴がり、さしもの大伽羅も一溜りもなく焼け落ちてしまつた。

同寺内には、俗に十六軒長屋と呼ばれてゐる九尺二間の貧しいトタン葺の長屋がある。手を延せば屋根にとゞく様なバラック式の長屋である。住んでゐるものは、いづれも貧しいその日暮しの人達ばかりで駄菓子やか義大夫語りとか人夫とかいふ様な種類の人達であつた。

すは火事！といふと附近の人々は我勝ちに荷物をまとめて、有馬伯爵や、白鬚橋方面へ家を捨て、逃げ去つた。防火につとめやうなどいふものは一人もなかつた。その時敢然として踏みとゞまつて、猛火と戦つたのは、この平素訓練もなく貧しい生活を送つてゐると思はれてゐた十六軒長屋の人

々ばかりであつた。

彼等は、理髪業細田末吉君、印刷屋の伊藤常次君、義太夫語りの相川鐵五郎君を眞先に、長屋中で働けるものは男女を問はず悉く死力をつくして防火につとめた。

男の多くは屋根にとびのり、女は前を流れる溝堀の泥水をバケツで汲み上げて、男達に手渡した。丁度上げ汐であつたから、溝の中は水が一ぱいにあふれてゐた。その中に腰までひたつて、息をもつかず働く女達、煙にむせびながら、火の粉を浴びながら、トタン屋根の上をあちらこちらに飛び廻る男達。もしこの長屋に火がうつたら、河岸寄一帯の橋場町は全部焼け失せてしまふのである。「南角の家が危いぞ、そら行け、今度は義太夫語りの屋根に火がついた。そらバケツだ！」男も女も、満身泥まみれになつて駆けまはる。中には上から落ちたバケツの爲めに負傷したのもあつた。しかし少しもひるまず勇氣をつけ合つて働いた。

猛火は遠慮なく迫つて来て、彼等の貴い努力もその甲斐なく、あはや火はこの長屋を一紙めにしてしまはうとする。長い間の奮闘に力つきて誰も彼もへとくになつた。今は絶望だ。人々は茫然として手をつがねてゐた。しかし天はこれ等の人々を捨てなかつた。丁度この時、同町二一八番地の人々が應援にかけた。この長屋一つが、橋場町全體の運命に關はつてゐたからである。新しい力と新しい

バケツが無數に現れた。

これに力を得て再び人々は、こゝを先途と必死になつて防火につとめたのである。

かくすること三時間、たちまち天地をくつがへすかと思ふ様な旋風が起つて来た。人々は屋根や地べたに叩きふせられた様にしがみついた。幸に一人も怪我はしなかつた。まもなく風の方向が變つてこの危険から免かれることが出来た。

かうして十六軒長屋の人々は、死を堵してこの戦に自分たちの生命と、橋場町の三百十八戸を、この災禍の中から救ふことが出来た。然し何といふあきれた事であらふ。かゝる貧しい人々の、必死の努力をつゞけてゐる間に、彼等の家財の中目ばしいものは皆奪ひ去られてしまつて居やうとは。彼等は火災にこそあはなかつたが、その爲に罹災民と同様の境遇に落ちた。そして罹災民でない爲に、配米や慰問品の配給を受ける事も出来ず非常な困窮に陥つたのであるが、しかし自分等の努力が無意味でなかつた事を考へれば自ら慰られる事もあらう。感謝せねばならぬ。

浪草區橋場町二百三十七番地の人々

●手押ポンプ一臺のおかげ

自分の家のある月島は、先づ火事からは免れ得た、と思つた午後三時、越中堀に嫁いてゐる妹の家が心配になるので、後を妻や女中に頼んで出かけた杉原氏はあわてて舟に乗り、飛ぶやうにして妹の家を尋ねたが火事の危険が迫つて居るので、不敢取妹と三人のその子供とを引連れて、安全と思つた月島へとつてかへして來たのであつた。

その時はこの月島へも火の手が上つて渡船はまるで人がこぼれさうに積んで行つたり來たりしてゐた。やつと女子供をひつばつて月島の家へ着いた時には、もうあたり一面の火となつてしまつた。

路次から川へ突當りの川岸に、つなみを恐れて引上げた船があるので一先づ家の人たちをその船に逃してをいて、自分は裏の店子の人の荷物をどん／＼まとめてその船へ積んでやつてゐるうちにもう自分の家からは着物一枚出すことも出來なくなつてしまつた。

家族と附近の十何名かが逃れてゐる郵船會社のその船から、手押ポンプを見付出した杉原君は、女子供にまで手傳はせて、必死となつて頭の上から水をかけ始めたのであつた。杉原君の必死の苦戦も、

火の力にはかなはなかつた。さうしてとう／＼川上から流れて來た燒船のため、その船にも火が移つてそこから一同逃れなければならなくなつてしまつたのであつた。

それから間もなく、少し下流のかちどき渡のはしけの上には一同は現れた。そこには今發動機船一艘が流されて、火の船にかこまれながら波に弄れてゐるのであつた。さうしてこの船の船員は二人のみでどうしやうもないからせひ船に乗つて船を助けてくれと叫んでゐるのであつた。杉原君と君の率ゐて來た數十人の一同は夢中でこの船に飛乗つた。その時もうこの發動機船東榮丸には百人あまりの人が逃れて乗込んでゐた。杉原君と船員は二つのいかりを投げてその綱を力の限りひいては川の中程へといざり出し岸の火から遠ざかる事に苦心した。火にあぶられてゐる乗組のすべての人はもう此の世の終りと泣き叫んでゐた。杉原君も泣きさわぐ家族女七人子供五人をみんな帶で結び合せて死の用意をいひ渡した程であつた。しかし川の中程迄這ひ出した時東榮丸の機關が動き出したのでやう／＼死地から免れ得たのであつた。

杉原君は嘗て浴場を経営し現在では營業をやめていく軒かの貸家である日／＼を樂に過してゐたのであつた。しかし今では家もなし人の荷物は助けたが自分の家財道具はおろか着物一枚もないといつて嘆いてゐるのである。

●三度戦つて防火に成功す

淺草區新谷町十六番地に、田甫の幸龍寺といへば附近で誰知らぬ者のない日蓮宗のお寺がある。住職神保辨靜君は大正二年には日蓮宗務總監の職に就き現在でも、東京第一區教監をつとめて居る人である。

九月一日の正午に近くの十二階の崩潰によつて起つた。火はこの大伽藍をも一蹶にしさうに見えたが、表門に面した向側をかすめて東北にそれたため幸にも焼失を免れたので附近の焼け出された人々は先を争つて境内に押しよせた。その中には十二階下で負傷したものをれば、足腰の立たない重病人も居た。住職は之等の人々を喜んで收容した。暫くの中に本堂も書院も墓地も避難者で一杯になつた。住職はこの寺が焼けなかつたも皆祖師の加護によると深く喜んで、施米をしたり又焚出をしてこれ等の人々を喜ばせた。

一方下谷區入谷町を襲つた火猛は俗稱入谷田甫を焼き盡して、午後八時頃には寺院の西北約二丁に

當る金龍小學校を一蹶にする勢となつた。今迄安心してゐた群集は、「金龍學校についてはとてもたまらん」と一度に騒ぎ始めた。病人を背負つて逃げるもの、家財を纏めて走るもの、さしに廣い境内も忽ち修羅の巷と化してしまつた。辨靜師も最早運命の盡くる所と観念したが八人の子僧や寺男に向つてはかう叫んだ。「祖師日蓮上人の遺された教義の信諦はこゝにあるのだ。この伽藍は死を堵しても守らなければならん。お本尊と運命を共にせよ。」と嚴命した。日頃この主尊の元に訓練された役僧三名は、すぐ本堂に飛びこんで高さ五尺もある日蓮上人の坐像を擔つて墓地の真中に移して守護し參らせた。ある者は過去帳や重要書類を安全な場所に持ち出した。これと同時に劫火は書院の裏手の長屋に延焼して危険は刻々に迫る。書院にうつれば本堂はともだめだ。そこで同勢十二人は必死となつて活動した。書院の屋根が高いので水が思ふ様にかゝらない。それに水勢も不足であるし、一方防げは又一方が危険になる。人數はたつた十二人、どうする事も出来ない。火は遂に書院に移り、つゞいて本堂も見ろくうちに猛火に圍まれた。然し辨靜師は決して悲觀しなかつた。本堂や書院が焼けても庫裡はどうかしてと思つた。庫裡が焼けた。今度はせめて清正堂丈でも残したいと思つた清正堂と庫裡とは約四百間位離れてゐて、その傍に土藏と物置があるこゝでくい止めなければだめだと思つた辨靜師を始め全員は綱をかけて物置を壊し、バケツや桶を以て池の水を汲んではおつかけた。

水を運ぶもの、土蔵の屋根で防ぐもの、一同はたゞ無意識に活動した。この努力が二時間も續いたとき幸にも今まで真下に受けた風向が變つて南にそれた爲めに清正堂だけは安全に焼け残つた。

今まで殆んど無意識に活動を續けた一同は、鎮火すると同時に一度に疲れと飢えを覺えて地面に横ぼつたまゝ色々と苦心談に耽つてゐたが、見ると火は南へ〜と田島町方面を焼いてゐる。二日午前二時頃火は又此の方面に迫つて既に江川玉乗場の屋根に燃えついて居る。續いて角の天麩羅屋が危険になつた。天麩羅屋に移れば寺の表門が道一重である。折角十二人の必死の努力によつて焼け残つた清正堂及四十戸の長屋は又もや尻火で焼けさうになつた。今迄互に手柄話に耽つてゐた人々は猛然起つて又活動を始めた。一人の雜僧が大聲で向側の水泳場の水槽に水が澤山ある事を知らせた。雜僧達は手に〜バケツやお花手桶をさげて駆け出した。そして一團は天麩羅屋の防火に努め、一方は表門と板塀を水に漬けたやうになるまで、無我夢中に水をぶつかけた。愈々天麩羅屋についた。一同は雨戸を蹴破つて二階にかけ上り、疲れも飢も打ち忘れて必死に防いだ。その結果は二階だけ焼いてとうとうくい止める事が出来た。

鎮火後辨靜師は次のやうに語つた。「この雜團の真中で四十戸も残つたといふことは誰も人間業とは思ひません。

廻りに樹木や廣場があるじやなし、私等十二人の外は誰も居ないので。それでこの四十戸の人達は荷物を運び出して焼いてしまひ、歸つて見れば家がのこつてるといふ奇觀を呈したのでした。二度目に清正堂が残つてやれ嬉しやと思つてゐるまに、あの江川玉乗場の飛火でせう。三度危険に頻しましたよ。風向の變つた事も天祐でしたが、十二人が協力一致してよく努力した結果も認めて貰はねばなりません。何せふだんあまり重い物を持つた事のない人々が不眠不休の活動でせう。それに人間の頭位の火の粉が降つて来る、熱風が襲つて来て随分危険な事もあつたのですが熱いとか、危いとかいふ者もなく秩序よく働けたのは平素の訓練の然らしむる事と思ひます。こゝが日蓮主義の眞髓でせう。」と呵々大笑して少しも誇る氣色もなかつた。

淺草區新谷町十六番地 幸龍寺住職 神保辨靜君 (五十五年)

●一人の力

深川方面の猛火に追はれ〜た人々が、越中島から、糧秣廠からと漸次に追詰められた果だ、商船学校の内外に蟠集した避難民の数は實に數萬人に上つた。此の大衆は商船学校の校地から、門前から

ドック内にある明治丸の上まで、凡て人間の立つに耐へるほどの場所には立錐の餘地もないほどに充滿してゐた。

かくて此の人々は漸くのとて猛火の巻を免れて安全地帯に落のびたと思つたのも東の間のことであつた。俄に一變した風向のために、今までの安全地帯は直ちにして危険區域と變つた。糧秣廠の火焰は其の猛威を延して商船學校を焼き初めた。周圍に群り集つた人々は絶大の恐怖に襲はれて周章し狼狽した。群集は雪崩を打つては或は相生橋方面に逃げようとし或は海岸の防波堤に避けようとした。而も尙ほそれさへ成し得ないものは自ら海中に飛入つて萬一の生命を拾はうとした。

此の時、商船學校の練習船明治丸の上甲板にも中甲板にも多數の避難者が一になつてゐた。同校幹事小關教授は部下を指揮して同船の安全を期する爲めに働いてゐたが、同船の運命は刻々に危殆に瀕してきたのである。道を隔てた彼方の糧秣廠から流れ寄る黒煙と、激しい火の粉を防ぐさへ容易の事ではなかつたのに、火は畢に構内の風上にある氣象[※]に延焼してしまつたのである。明治丸にあるものは言ふまでもない、船をめぐつて地上にあるもの、水中にあるもの、其のすべての人々の眼は異様に輝いた。明治丸には火藥其他の爆發性藥品を多量に貯藏してあつたのだから、萬一船に火がついたならば附近一帯の避難民は悉く其の生命を奪はれなければならなかつたのである。船上の人々は船員

の人々と協力して、必死の防禦を黒煙に咽び烈火に堪へつゝ働いてゐた。折しも突如として明治のマストの上部に火がついた。柱の間に落ちた火の粉が烈風に煽られて燃出したのである。マストは見るまに火を大きくして、若し此儘にして置けば、明治丸の運命も、附近一帯の避難者の運命も絶望に瀕したのである。人々は「あれよ、よ、よ」と叫ぶのみで、俄にどうすることも出来なかつた。其の瞬間であつた。スル／＼と猿の如くマストを攀ぢ昇つて行く一人の水夫があつた。片手にバケツをさげだ勇敢な水夫は、苦もなく火に近づいて其の水をかけた。けれども火は消えない。再びドリ再び昇つたかくすること四五度に及んで、さしもの火焰も全く消えてしまつた。周圍に集つた數萬の群集は手を拍ち聲を放つて賞讃と感激の叫びをあげた。人々は今生死の境にあることを打忘れて、此の一人の力の偉大さに泣いたのである。かくて我が明治丸は周圍の建物といふ建物が殆んど焼盡された中であつて、獨り完全に其の存在を全うし、且つ多數の避難者を救ふことが出来たのである。

一人の水夫、彼れは榊原良一君（明治二十四年一月三十日生）といつて愛知縣知多郡成岩町に生れ今明治丸の水夫として忠實に立働いてゐるものである。

● 火災防止震災善後活動に

盡瘁した飯倉青年團の事業

猛火の中に一命を賭けて隣人の危険を救ふ。もとより尊い行だ。が當然焼くべき運命から救うてよく惨禍損失を未然に防止したといふ事は一層意義のある様に思はれる。

大震に殆んど相次いで起つた赤坂田町の火の一手は、溜池兩側を甜め靈南坂を下り米國大使館を焼き、更らに虎の門に出て琴平町田村町から新橋の方へと、巴町神谷町を焼いて八幡町に及んだ。時に九月二日の未明。風こそさまで強くは無かつたが、自家の荷物と家族の安危とばかり念してゐる様な個々の消極的な事をして居たなら、飯倉も續く高臺も古川の沿岸迄も恐らく焦土と化する運命にあつたらう。即ちそこには幾多生靈の無残な最後と多くの富の焼失とが十二分に想像されようし又人間の性の閃き——善行も美績も相當に幾多犠牲の代償として生れた事も想はれる。かう考へて見ると、あの狂暴な火勢を、兎も角も、西久保八幡町に支へ得た事實に對して、甚深の敬意と感謝とを拂はざるを得ないのである。

餘震の不安にも稍なれた。夜の明け行く事に元氣を惠まれた町民諸君——飯倉町森岡町我善坊町西久保八幡町等——は期せずして集つた。飯倉青年團員各町會員在郷軍人會員警官其の他で飯倉青年團がその主腦となつて活動したのは誰もの認める所である。消火の方法はたゞ破壊消防の一途あるのみと見て取つた一同は、八幡町の山崎金物店の針金を利用して同町の播磨屋染物店及岡本商店を犠牲家屋として引き倒した。持ち寄りの大工道具を奮つて全く潰し、俵掘井戸と半潰の湯屋とに水を求め得て之を持ち運んで注ぎ又、身を以つて防火につとめた結果午前六時少し過ぐる頃辛くも喰ひ止めて、八幡町以南の延焼は全く免れ得たのであるこの隣保共助の精神の下に奮闘した。現況を目撃した人は誰しも深い感激を覺えた。そして徳川家の二千圓を筆頭に幾多の感謝的寄附を受けるに至つたが、是等諸家よりの寄附金は悉く震災善後活動の資金とした。今その活動状況を左に抄録する。

罹災せる群集は、目黒へ、代々木へと郊外さして陸續するで流れる様に避難する。痛ましい傷病者飢餓と困憊との老若、それ等や携行の荷物にあへぐ男女。先づ飯倉二丁目に救急所を設け、大坪坂寄西海軍軍醫大佐等の後援を得て、是等傷病者の診療應急手當を施すこと震災當初より五日に及んだ又、炊きだしをいちはやくなして餌に苦しむ者を慰め、交通整理、避難所の選定等次々となされた。

野菜木炭木材其の他日用品等、或は産地より直接供給し或は蒐集し來り、或は配分し或は廉賣した

其の厚意に浴したものは附近住民諸君をはじめ区内各所及日比谷芝等に避難する人々にまでも及んだのであつた。

其の他團の活動に後援された池上青年團に團旗一旗を贈りて謝するあり、破壊消防の犠牲家屋に對して見舞を贈るなど巨細な處までも手を染めて居る。

團は飯倉町二丁目二鳥海方に事務所を有し、大正五年八月の創立にかゝる。實に聯合青年團創立前の事である。創立の當時有識者から「床屋や洋傘屋が輩の集り何ぞ能く事をなさん」と冷笑された程に名ばかりの有識知名を會員とはしなかつた。現團長は坂田貞治氏。今次の事變によく陣頭にたつて活躍したのは高瀬副團長鳥海石田兩理事高須瀧脇篠田三幹事其の他だといふ。同志相集るの主義で入團勧誘をしない事寄附の強要をしない等は過去の誇るべき事で、社會奉仕に手をそめたは東宮御歸朝の際貴賓接待係を拜命した事にはじまるとの事である。

● 追分青年團の活動

追分青年團は大正十年十一月創立された町内六百十五戸團員約二百名から成立し、市區名譽職長町

康夫氏は其の團長である。常に青年團の精神的訓練に重きを置き、登山を勤めて浩然の氣を養ひ、神社に詣でて敬虔の念を篤うし、剣道を獎勵して身體の鍛練をつとめ、盛に講話會を開設して團員思想の向上を計り、時に消防署長等の講話をも聞き且つ非常召集の訓練まで行つて、萬一の場合に備へた團長の團員を可愛がること赤子の如く、團員の團長を恭ふこと慈父の如くであつた。富山仲次郎、中村金太郎、副團長齋木兼次郎、(顧問)となり、獻身的に努力してゐる。

九月一日激震の突發するや團長は直に非常召集喇叭を吹奏せしめた。速時集る者十四名、直に町内家屋人事被害の調査をなす。屋根瓦落下位に止まり極めて輕少であつた。

其時隣接地大橋内工學部には火災起りしも延焼の憂なきものと認められた。

午後一時團員は更に、非常召集最乗寺境内に集合し、團長より此大災は如何様に發展するやも知れず、「各員は自己の生命財産を思はず、國家社會の爲に、平素訓練せる團力を盡せ」と言はれた。各自は重大なる責任を自覺して、直に活動に移つた。

先づ本郷共督教青年會販賣部に行き白米を購入し、其不足分を他店にて補給し、同學舍構内に事務所を設け、其一部分に大釜を据へ午後二時頃は既に炊出しをなし町内の人又は通行の人々に與へた。此大震災に當り炊出ししたる趣も數多くあつたが、斯様に機敏に行つた所は他に類例を見ない。

地震の被害も恐しいが火事の被害は又一層恐しいで。ガス、電氣の使用のみか各戸絶対に火氣を禁じて失火を戒めた。

幸に町内の失火は免れたが、太學構内の火勢は益々猛烈であつて、何時追分町内に延焼するやも知れず、加之、神田方面に起つた猛火は順天堂及女子高等師範學校に燃え移り、砲兵工廠の火と共に漸時本郷三町目の方面を襲はんとし、町内にも火の子が落下するに至つた、其爲人心動遙して之れを制するに困つた。因て本團は自轉車傳令を組織して火災區域の狀況を偵察せしめ、メカホンを以て町内に刻々の實狀を報告し迷はない様に勤めた。

大震災突發と共に、中村副團長は町内井上氷店に至つて東庫氷塊三十五貫全部を買ひ、町内病人及び罹災者に給與せんとした。然るに、井上氏は事情を察し全部を寄附せんと申込んだ。依て之れを受け、病人其他大學病院内に避難中の泉橋病院患者にも、其幾分を分配した。

九月二日

本郷三丁目方面の火災は幸に北方に延焼せずして鎮火し、大學構内の火事も外に飛火することなくして終熄した。けれども上野廣小路方面の火災は再び本郷方面を襲はんとしつゝあつた。尙昨夜來神田日本橋京橋區は全滅し、加之餘震は猶止まず、居住者の神經は過敏の極度に達してゐた。此機に乗

し不逞鮮人が爆彈と放火に依つて、東京市を全滅せしめつゝあるとの報告何所よりとなく疾風の如く傳はつて來た。其時鮮人一高構内へ逃げ込つたとの報告まであつた。

事態容易でないと思つた富山副團長は、町内の路次に警戒の急要を認め、各要所に立番するの案を講し嚴重なる警戒を行つた。且つ似せ者防止する一法として、特に青年團のゴム印を押捺したる腕章を帶用せしめた。斯くして漸く町内の人々を安心せしむることが出來た。

九月三日

前日來上野松坂屋を燒盡した火焰は漸次、不忍池畔仲町に燃え移り切通町岩崎邸も將に紅蓮の舌に舐め盡されんばかりになつた。若し不幸にして岩崎邸宅が猛火に包まれんか、隣接地茅町及び彌生町は瞬く間に類焼することゝなる。従つて追分町の火災は免るべき理由がない。故に岩崎邸の運命は直に追分町引いては本郷區全體の運命如何に係り、事極めて重大なることを知つた。因て此日午前三時頃十四名の防火決死隊を組織し、中村副團長及び上原氏指揮の下に岩崎邸に向つて出發した。時に東京瓦斯會社本郷出張所職工も亦參加した。現場に於て小泉本郷第四消防署長に逢ひ、來援の旨を告げ其指揮を仰いだ。幸に破壊消防の最も必要であるとするや、携帶せる三挺の鋸以て、岩崎邸前なる家屋の柱を切り、之れにロツブを懸け、引き倒し猛烈なる破壊を始めた。本郷軍人や今迄傍觀してゐた

群集まで加勢した。渦巻く火焰を物ともせず、決死的冒険の努力は大に其甲斐あつて、忽ち数軒を倒し得た。今迄猛り狂つた猛火も其勢にひるみ、茲に完全に喰ひ止むることが出来た。之れを知つた自轉車傳令は即刻此情報を本部に居残つた、團長長町氏に報した。團長は速時に「最早追分町方面に延焼なし安心せよ」と全町内に告知せしめた。之れを聞いた町民は其歡喜極度に達し、中には落涙して謝意を表す者さへあつた。左に決死隊に参加し偉勳を立てられた諸氏の姓名を記して敬意を表する。

中村 金太郎	富山 仲太郎	上原七五三造	木村 善吉
堀内 茂	福井 金太郎	福井 喜文	成島 宗太郎
高橋 由行	吉田 助太郎	峯岸 新造	富山 浦吉
吉田 福造	川村 道		

東京瓦斯會社職工

石田 關太郎	島田 重太郎	清水 理三郎	稻葉 梅吉
神山 喜三郎	鈴木 惣三郎	南雲 祐吾	

九月四日

區役所から玄米の給與を受けた。依て之れを配給する手傳役をなした。蓋し地震突發以來一切の營

業は停止し、食料の大欠乏を來し、白米の如きは如何程多額の金を拂ふとも決して得ること能はず、止むなく市民は玄米食を始めたのである。

地震火災の突發は水道、電燈、電話、及電車等の全滅を來し、其上警戒の中樞たるべき警視廳及び市内十數ヶ所の警察署を焼失したから、全市の秩序は亂れて容易に拾收することが出来なかつた。此處に乗じて鮮人陰謀の報道又は各種の流言浮説頻々として起つた。例へば電燈無き夜陰に乘じ下町の放火に成功した、鮮人は今本郷方面に襲來しつゝある。といふ如き風説も深く町民を恐れしめた。

其時戒嚴令は公布され、町内の人は之れに因て漸く安堵し更に團員は安寧秩序を保つ様に盡力した。始め不逞鮮人の暴戾なる話を聞くや長町團長は、悪事を企つるは必ずしも鮮人に止まらない事を語つた。團員に爆彈放火其他不都合の行動現状を見付けたる時は殺害するも止む無し、召疑問位丈では決して暴行するなと厳しく訓戒された。其爲本團員には、一人として鮮人を斬り又は内地人を誤殺する様な者はなかつた。否暴行を行ふ所ではないむしろ非常な厚意を以て扱つた。

追分町三十一番地第二中華學舎寄宿中の支那留學生五六名は宿舍の主婦（日本人）と共に追分町隣接町方面通行中不逞鮮人の一團と誤解され不慮の災難に遇つた。團員班長飯田七五郎氏は自宅の附近に於て、何事か一騒動起つたのに氣付いて直に現状に駆けつけ、其實狀を見るに善良なる支那人が

何人にか傷害を受けた様子である。氏は事件の誤解によることを着破し身を挺して其救護を圖つた。早速負傷學生を千駄木町醫專附屬醫院に連れ行き應急手当を受けしめ且其宿舍まで護送してやつた。

猶團員遠藤一郎氏は、三上義一氏と共に、右支那人學生の一部分が駒本小學校に逃げ込んだと聞いて同情し、其跡を尋ねたるに、數名の支那人學生が全身を緊縛され顔面を覆はれ、且つ無残にも地上を引摺られつゝある爲瀕死の状態にあるを發見した。因て其暴行者を排し右數名を擔架様の物に乗せ醫專附屬醫院に運んで應急治療を受けしめ幸に生命は取り止めた。遭難學生に自動車を以て支那公使館に護送さるゝ様希望した。間も無日華學會常務理事山井格太郎氏來訪され、一同を一高内に護送して幸に無事な解決を見たのである。

右宿舍は支那人の宿舍なる理由の下に一般商人から食糧の販賣を拒絶された爲非常に困窮してゐることが知れたので青年團は其後毎日米を配付し大いに救護してやつた。

以上の記述は火急の場合に最も合理的に活動した一班に過ない。其後は配給品の所置、衛生法又は夜警等に盡力したのである。

配給等は町内を八班に區分し、各班に班長を置き、其班長に充分責任を持たして極めて衡平に行はれた。米穀類其他の配布につきても、區の手を煩はさず、青年團員八人を撰定して東京瓦斯會社のト

ラックを一臺借り受け、芝浦に墨田驛に走つて配給品を運んだ。之れが爲何程區吏員の手を除いたか知れぬ。

九月十日頃に至つて騒は漸く落付き始めた。次に來るべき大災禍は、惡疫の流行と思つた團長は衛生に最も注意した。先づ町内の空地に大穴八ヶ所を作り、廢物不潔物一切を之れに埋め以て蠅の群集及び其發生を防いだ。又豫て用意のクレシン二百罐を各戸に配布し撒布せしめて、バイキンの發生を防いだ。

幾多の人が入り込んだのにも係らず、一人として惡疫に襲はれた者の無かつたのは消毒、衛生に周到なる注意の結果である。

夜警等は全部を八班に區分し三十分毎に交代して頗る嚴重に行つた。團長及び副團長は始めから終りまで毎夜午前二時頃まで詰切りであつた。其熱心さが推量される。一として事故の起らなかつたのも理由ないではない。

經費の如きも強制的に求めたのは一件もない。何れも青年團の熱誠なる行爲に感謝し多きは百圓、少きは二、三圓に至るまで寄附を申込んで來たのである。白米、牛肉、其他飲食物の日用品に至るまで、團員の要求してゐる様な物は何れも自發的の寄附によつて足りてゐた。

十一月一日に至つて憲兵隊は此町内に宿營所と事務所とを設くる必要あることを聞いたから、直に夜警團の事務所を提出し、聯合して記念の撮影をなし、警備は之れを一切憲兵隊に一任して夜警團の解散式を舉行した。

平素の修養訓練を怠らず、大事に當つて其指揮の宜しきを得、自己の生命財産を顧みず、真に國家社會の爲に終始活動した追分青年團の譽は、美舉中の美舉と云ふべきである。

所在地 東京市本郷區追分町七番地 團員約二百名

團長 長町 康 夫君 副團長 富山 仲法 郎君
顧問 齋木 兼二 郎君 同 中村 金太郎 君

●眞弓青年團の活動

創立 大正十年十一月

東京市本郷區眞砂町十五番地に、大正十年十一月に創立された眞弓青年團がある。眞砂町及び弓町の青年約百名を以て組織されてゐる。其團長は區名譽職山崎菊次郎氏で、副團長は長屋啓太郎氏及び

二木百太郎氏である。五班に分ち各班長を置いて、自治統一を計り毎月談話會等を催し相互の親睦を計つてゐる。

九月一日の大地震突發するや、團員は直に召集された、午後三時頃、神田三崎町神保町の猛火が本郷方面に向ひ元町一面を焼き拂つて、弓町眞砂町に迫り一方壹岐坂邊に起つた。火勢も盛に襲ひ來つて、危険は刻一刻に迫つたから、先づ町内住民の安全避難地として右京ヶ原を撰定し、之れを一般町内に傳達した。そして避難者の荷物は一時眞砂町の電車道まで運搬手傳をしてやつた。

彼れ此れする間に、火勢は次第に迫り、眞砂町弓町も延焼の危険に瀕して來た。夫れと見るや、團長山崎氏は各班に嚴命を下し、如何なる犠牲を拂ふとも、此防火に勤むべきを傳へた。平素手足の如く働いてゐる各團員は一層の奮勵努力を始めた。水道斷水の爲に頼みとする水は出ないからバケツ隊を組織して、井戸水を汲んで運び、場所に因ては錢湯の貯水なども運んで火を消した。けれども弓町一丁目二十番地から廿四番地にかけては、堀井戸も少く水に最も不便の所であつたから此所は破壊消防を行ふの外はなかつた。即ち鋸を以て柱を切り之れに繩をかけ引き倒しの方法を講じた。警官、在郷軍人、町内の有志等も加はり、團長指揮の下に非常なる機敏の働をした。明治館の大建物を始として並び屋七八軒を破壊し斷涯、石垣等地の理をも利用して、總員決死的努力をなしたる爲、眞砂町弓

町全部をひと背にせんと猛り狂つた猛火も、遂に勢を挫かれた。其時天祐とも云ふべきか風も西風と變り完全に防ぎ止め得たときは、眞弓團員は云ふまでもなく集り互に防火に勤めたる群集にとつと萬歳を叫んだ。

本郷區の全焼如何は此地點の防火如何に大なる關係を有してゐる。能く團長の命に従ひ、統一ある活動に因て防火が功を奏したるは此青年團の偉功として特筆大書すべきである。

防火に其功を奏するや、其元氣は、直に罹災者救助に注がれた。水道破壊のため飲用水に困る者の爲には井戸水を汲んで運んでやる。殊に町内特志家中原金三郎氏は白米三十俵を寄附された、因て之れか炊出しをなし罹災者の全部に與へ且つ通りかゝりの者にまでも與へた。

配給品の運搬は區役所の手を煩はさず、直接トラックを芝浦に走らせて魚類の運搬をなし、或は越中島から食鹽等を運んだ。罹災者の衣類が乏しいのを見ては之れを氣の毒に思ひ、町内を廻つて有志者の寄附を仰ぎ約三十點も集めて配給した。

此頃郵便物の扱ひも一時杜絶して非常な不便を來したから、私設郵便箱を各所に置き一般町内の人の投函に便し青年團は之れを本局まで持ち運んだ時に汽車の時間表を報し、又は日と曜日とを一般の人に知らせた。之等に因て如何程便利を得たか知れぬ。

晝間の勤務が容易で無い上に、夜は又夜警の任務を盡した、熱心に嚴密に行つた結果何等の事故も起らなかつた。鮮人騒があつても怪しい物、疑はしい者は、直に之れを警察又は憲兵隊に引き渡して一人の亂暴者も出なかつた事は、指揮其宜しきを得た爲である。

各團員は自家の私事を忘れ、社會公共の爲に眞に犠牲の精神にて盡したのである。

所在地 東京市本郷區眞砂町十五番地 團員約百名

- | | | | |
|-----|--------|-----|--------|
| 團長 | 山崎菊次郎君 | 副團長 | 長尾啓太郎君 |
| 副團長 | 二木萬太郎君 | 班長 | 宮濱源良君 |
| 班長 | 岩崎雅太郎君 | 同 | 野島傳造君 |
| 同 | 福本和吉君 | 同 | 澤田光太郎君 |

● 壯烈なる衛戍病院の活動

大正十二年九月一日、麴町三番町方面の猛火が西北風に乗じて威を逞うし、同夜午後零時二十分に至つて隣接した民家に延燒し餘焰は飛んで遂に東京第一の衛戍病院の一角を焼いた。

鳥居院長は部下の進言を

「御眞影と共に焼死する覚悟がある」

と言下に付けて叱咤激勵し、御眞影を守護し奉つて足一步も院内から出なかつた。餘震の瀕々たる中に患者を安全地帯に救出し、傍ら猛火を阻止した同院職員看護婦の行動は鬼神をして泣かしめる。

藥品貯藏庫内に單身飛び入つて格納棚から墜落發煙將に發火しやうとする硝酸の海に、重炭酸曹達を利用撤布し危機一髪に瀕した倉庫を危難から免かれさせた高橋一等藥劑官の如き、火の粉の雨を浴びながら平均約十四貫ある大きな醫扱（戰時衛生材料一揃が入つてゐる箱）を近衛師團所屬戰用衛生材料倉庫から單身克く二百十個を搬出し更に百個の醫扱を第一師團所屬戰用衛生材料倉庫から搬出した皆川雅雄上等工卒の働きの如き、蘆芭蕉の葉を纏ひ猛火の裡に身の危険を顧みず延焼する病室の消火に努力し、遂に第五第六番病室を死守し病院全焼の厄を脱せしめた勇敢な松前千龍一等看護卒圓部藏雄、村松忠者、芳井松太郎、内田弘二等看護卒の如き、二百六十六名の患者避難の命を完うした後第五、第六番病室の防火に死力を瘁し、翌朝午前七時鎮火したのを知ると同時に昏倒した。石井四郎軍醫の如き、震災のために重輕傷を負ひ治療を求めに来る人々の救護に不眠不休の外科職員の如き、實に感嘆の涙がわく。殊に同院看護婦が終始一貫職責を完うした健氣な行動に至つては拙ない筆の上

く盡くし得ないのを憾みとする。幸に同院二等軍醫石井四郎君の手記を請ひ轉載する事を許された。

原文のまま左に。

(一) 地震中患者救護及其指揮統率の概要

大正十二年九月一日正午數分前第十二番室の診療を終了し晝食せんとするや天地震動し前古未曾有の強震來る。恰も激浪に翻弄せらるる小舟の上に在るが如し。死なば諸共覺悟の躰は固まりぬ。廊下に集合せる看護婦に叱るが如く祈らるるが如く頼むが如き心境を以て大喝一聲

「職に殉するは此時なり。皆擔送患者を擔ぎ出せ！」

「落付け！ 落付け！ はかの患者は外へ出ろ！」

一同我に歸り命を守りて救護に着手す。予は手を以て壁を傳はりつつ東別室に駈せて、胸膜炎患者菱刈勝男を脊負ひて病理試驗室前の廣場に避難せしむ。直に返りて西別室に駈せ蟲様突起患者擔送患者清水竹司が寢臺より轉げ背位を取り龜の子の如く手足を上にはたたくしたるをも脇に抱へて千鳥足にて屍室前廣場に安臥せしむ。

杉江看護婦、露木看護婦は西別室の擔送患者結核性腦脊膜炎鷲貝を毛布に載せたる儘屍室前に避難せしめ更に直ちに引返して隣室胸膜炎重症小田原を同地點に健氣にしかも機敏に運搬したり。又堀

内及篠原看護婦は東別室に轉びながら寢臺につかまりつつ駆けつけ胸膜炎重症砂瀝を擔ひ出したり而も強震相次で更に病室顛覆せんとするや胸膜炎重症者中島鹿太郎は室外に出で廊下に轉び歩行不可能なるを肥滿身の機敏を缺く川久保看護婦遂に廊下に共に轉び膝にて這ひながら中島を小脇に抱へ立つて健氣にも十二番北廣場に救護したり。然るに輕症患者の外に飛び出たる者比較的少く或ひは集合し或ひは寢臺下に或ひは寢臺の間に在り恐れ慄きて途方に暮れつつあるもの半數なり。依而予は怒氣を帯び大喝して、

「貴様等は何故に命に従はぬか。承知はならんぞ！」

と叫び西室の床上に痰壺をたたきつけたり。途方に暮れたる患者は我に歸りたらん我先きにと屍室前廣場に避難したり。

依而予は第十三番室に到るや志願兵は各々第一回の強震に皆飛出し避難し居たり。強震去りて暫し後患者は室内に入らんとするをもつて一同を集めて一場の演説を試みたり。

「只今の強震は上下動なれば必ず餘震來る、命令下るまで決して室へ入るべからず」

一先づ無震時を覗ひ重症患者の藁蒲團及毛布を搬出し樹下に安臥せしめたり。重症驚見は脈搏結滯を新來したるを以て應急處置をなす。然るに果せる哉餘震頻々として來れるを以て直ちに患者の救

護區分をなす。即ち擔送患者十三名の寢臺を搬出し、テニスコート西側の大樹並木の下に二列とし看護婦三名(吉井、三井、植松)をして是が救護及處置に任す。獨歩及護送は一團と爲して患者小川軍曹をして監督に任じ、志願兵一團は關根志願兵をして監督に任じ、各二列縱隊となし點呼を取り佐々木婦長をして全患者の監督に任す、西宮婦長をして重要書類非常持出書類の監督殘餘の看護婦は廣崎婦長の指揮の下に病室内外の整頓及庶務傳令に任す。時に坂口看護婦は強震と同時に各々我が家を捨てて非番なるに拘らず、特に矢吹看護婦は自家に病人を捨てて平素己が優しき腕に看護せし病人の身上を氣づかひつつ女ながらも心強く直ちに(一時頃)病院に駆け來り共に無事なるを喜びつつ快く其の職に誠實を致したり。

嗚呼人誰れか己が生命を重せざらんや。己が財物を惜まざらんや。而も震天動地の此の際に能く命を守りて職に殉ずるの覺悟を以て從容として患者を救護し一の輕傷者すら出す無きは誠に平素職に忠實にして慈愛の念押へ難き其の發露と見做し得べし。一度其の行績を思へば女性の奮闘必しも男子の左に非ざるべく其の心事の麗はしき實に高嶺の月にたとふべく其の美しさは花にたとへん。其の花も無し。

(二) 火災の情況視察報告避難準備の件

無事避難するや小林軍醫正、梶塚軍醫來りて天幕開設の命あり。直に救護所及重症患者の爲めに天幕を開設す病院長來られて患者の無事にして一の離散者無きを喜ばる予は患者一同に警戒して曰く「古より地震には火事と海嘯は附物なり、只今の赤坂の火事は次いで我病院を焼かんとも限らじ依而一人たりとも離散せざらんことを望む」

と西に赤坂東に遠く北に遠く猛火強風を得て其威を逞うす我病院の運命は漸く氣に掛りたるを以て上官に第十三番破壊の準備を請願せしも時尙早く一笑に附せられたり。暮色凄蒼震火の行方は予の心を苦しむ。夕刻より五番町猛火大暴威を逞うせるを以て其の現場を視察せるに風の方向は宮城に向ふも南方の家屋は十間を隔て、尙火熱の爲め樹脂を吹き乾燥し火の子飛びて忽ち猛火となる。宮城の老松は飛火の爲めに燃え上り事の容易ならざるを豫告す。直に歸りて小林軍醫に數時間後は必ず病院に來るを以て 御眞影、患者、重要物品の避難所を決定し及避難命令の實行を請願す。

(三) 大妻高等女學校生徒を救護

其の歸途大妻高等女學校生徒は三百名土堤崩れて生埋となり漸く發掘し大使館(英)前に避難し、十數名重症あり。小林軍醫の命により直ちに自働車二臺にて收容し外科に渡したり。同校々長。舎監は陸軍を叫んで神なりとす。其心中察するに餘りあり。同行せし舎監の妻や今尙目前に髣髴たり。

(四) 本院並に地方患者輸送命令遂行の件

猛火紅蓮の舌を巻いて病院を呑まんとす。今や一刻も早からんことを祈る。暗中聲を啜して我名を呼ぶ者あり。駈せたるに患者救護隊長簡野軍醫正なり。

「君は士官學校に患者全部輸送の掛を命す直に準備を終了し命を待つて輸送すべし」

(一) 擔送患者は全部擔架に固定せらる。西門に整列す其の數軍人地方人合計八十三名なり。

(二) 護送獨歩患者二百三十二名

患者總員二百六十六名

各患者は私物必要品の外避難先の不備を思ひ各携帯し得る丈の物毛布及雜品を携帯せしむ。步行患者を持つて一團とし、各室毎に室附看護長卒附しあり。暗中命あり。

「只今より輸送を開始すべし」

「步行患者は北門より、擔送患者は西門より輸送せよ」

と、予は直ちに駈せて北門を偵察せるに既に猛火は大使館に至り火氣甚しく火の子は六番室に飛んで來る煙は熱氣を帯び咳嗽頻發す。依て直ちに歸て六番室の危機と北門より輸送の至難なるを報告す。然るに直に命あり。

「然らば直に西門より輸送すべし」

と依而命の如く一先患者の人員の異常なきを確め僅か五分位にして西門外に出し、一方自動車に搬送患者を收容し殆んど同時に輸送を開始す。時正に大正十二年九月二日午前零時分なり。これより先命あり。

『三科軍醫をして地方搬送患者の救護並に輸送を分擔せしむ』

と。自動車は『ナシヨナル號』の外無蓋貨物自動車二輛。終りに更に二輛の應接来る。一臺去り二臺去り。三臺去る。猛火刻々に襲來し、火の粉は飛んで散亂し風稍熱を加ふ。叫ぶ者呻吟するものあり、呪ふ者あり、就中記憶に新なるは

『己れを焼き殺す積りか』

ととなるものあり。依而予は輸送を敏活ならしむると同時に患者を慰撫し、

『火事が六番室より茲まで来るには中々の時間を要す。必ず無事避難せしむるから安心せよ』と。

然るに第四臺目の自動車は命に背き雜品、衛生材料を積込んで走らんとす。聲を限り之を制止するも尙きかず。依而自動車に飛び乗りて、看護卒を大聲叱責するも尙荷物にかかりつきて命に従

はず、亢奮極に達す。指揮力を以て積荷をたたく事一度ならず。聲は暖れて出ない。

『貴様人間の命と荷物といづれが大事か！』

心は矢竹にはやれども聲の出でざるを如何にせん。

『某軍醫殿の命令です』

極 抵抗す 依而予は自ら荷物を皆たたき下し患者を乗せて自動車を出さんとす。

『誰が何と云つても決して許さん。命は第一だ荷物は第二だ！』

時に某軍醫來りて火は已に五番を焼き四番に移つたといふ話なり。

簡野軍醫來り大喝一聲

『誰れかそんな事を云ふ奴は！ おろせおろせ、荷物を！ つめつめ早く患者を！』

積んでは去り、積んでは去るも中々思ふ様に進捗せず心中實に穩かならず。其の間の喧嘩たとふるに言なし。

幸なる哉各員の努力により一の輕傷者すら出すなく、午前一時無事輸送を終了したり。依て直に簡野軍醫正に報告す。

(五) 當院防火當時の概況

さきに輸送を北門よりせよと命せられてその状況を探險せし予は輸送中にも五番六番の安否氣に掛り某軍醫は五番室は已に焼け第四番室に向ひつつありとの報告に氣をいら立てつつ一刻も早く輸送して決然防火につとめんとせり。

當時猛火の丁度北門の道路北側の家屋を残し其れを今方に焼かんとする時にして五番六番の最も危険なる時なり。一列二階建の家屋は四方の窓より櫛の如く黒煙を吹き、次で火災となり。北方一面火の海と化す。暫時いかんとも手の出し様なし。熟々思ふに「五番室の焼否は院の存否に關す。況んや陸軍省をや」生死何するものぞ。焼死何するものぞ。「ベストを盡して斃死せんのみ」念中更に一物もなし。只一つ「とても駄目だ」「然しことに依つたら」一樓の望はあり其れも井中細草にしがみつゝ鼠の命に似たり。扉は一瞬時直に北側の櫛の木を焼くや、猛火は其威を逞うし渦を巻き六番室に向つて櫛の如し。

依而予は上衣をぬぎ西隅の芭蕉の葉を以て身を蔽ひ頭にかぶり、雨と降る火の子をさけつゝ、輸入の指揮力をふるつて六番室の北西隅に移りし火をたゞき消さんとす。横木を上りてたゞきたりたればたゞく程火の子は飛んで散亂し頭上に降り來る。遂に夢中の中に半ば焼けたる板は折れたるを以て柱の間に力を入れて遂にたゞき落したり。

猛火は背後に在り熱氣堪へ兼てひた走りに走り七番室の所まで逃れて一息つきたり。一息つくや直ちに引返したるに又々六番室の北口も上る。

時に工兵數名、歩一の兵二三名、看護卒四名あり、北口は工兵の一名と共に打消したるも落ちたる板は直燃え上りて柱を焼かんとす。依而工兵看護卒と焼けつゝある板多數を搔むしらんとするも捨て場所なしとて激しくて消す能はず。若し七番室の方へ捨つれば風の爲め七番危険なりさりとて六番室に入るゝ能はず。遂に窮して猛火の方即ち北の道路の方へ刀の先と櫛の先きにて火の板をけり轉がしつゝ捨てたり。實に火葬場の真中に在る心地せり。芭蕉の葉は黄色となりて用をなさず依而又新なるを用意す。

又六番室に入りしも板なき六番の北側は火の雨の素通りなり。火の子に非ず火の親は生木を以てたゞき消せど、たゞき消せどいかんとも盡きずして後より來る。下を見れば又墜ちたる板は忽に火となる。それも數名にて出來る丈たゞき消したり。呼吸は苦しく目も開けず。又草の中を這ひつゝ一息つきたり。六七番室を警戒す。又直に引返して見れば、努力は水の泡、上にも中にも一面に諸々點々として焼けつゝあり。或は工兵は室内の火をはきあつめ靴にて踏み消し居たり。工兵特務曹長は六番室の中央の家屋内に在り指揮す。其工兵中予をして最も激動せしめたるは残留數名なるも

特に川崎、藤枝の二士なり。其の態度の勇猛果敢なる例ふるに物なし。

已に予の六番室に到着せし時は工兵隊長(?)は三度迄退却命令を出し引上げ喇叭を吹奏して我病院特に六番を放棄し一隊は三宅坂に引上げ一隊は第五番室に行きたる後なり。然も其命に従はざるや又決死の覺悟なるや知らざるも最後迄六番室に踏み止つて死力を盡して防火につとめたる數名の工兵の如し。

予は僅に望を持ちたるを以て其れより少し前に園部看護卒をして院長及菅野軍醫正に報告せしめたり。

(一)予は命に従はずして士官學校に行かず、死力を盡して防火につとめつゝあり何卒命を變じて防火の任に當らしめられんことを

(二)六番室有望なり。今二十名許の決死隊増員ありたし。

待てど暮せど應援隊來らず又園部來らず。依而又看護卒枝松忠孝をして同様の傳命に任ず。直に歸りて復命し、院長閣下は「よしよし」と仰せられたりと園部は閣下「よし」と言はれたるを以て歸路を五番室に取り途中工兵につかまへられ五番室の防火に努め水汲を爲せられたりと。園部看護卒は生木を折りて火をたきけし、水を汲んで防火中の工兵に與へ、傳命をなし己がズボンに焼けた

るも屈せず防火に努めたり、彼は猛火中眞面目に命を守り最後迄防火に努む。其意氣感すべく其行亦實に勇敢なり。只傳命の復命なきは時の已むを得ざるに出でたるなり。

二等看護卒枝松忠孝は終始予と行動を共にし、而も傳命として容易に其の任を完うし西塀の火と化するや隣家より水を運び死力を盡して防火に努む。彼は沈着にして機敏善く猛火の中に在りて命を守り、傳令の任務を完うし而も最後迄防火に努む其意氣行動眞に賞すべし。

瞬時にして風は方向不定となり旋風となりて冲天に捲き上げ猛火は汚物焼却場を焼かんとす。予は數名の看護卒に命じ工兵と共にたき破らんとするも火は熱し建物はびくともせずする中に病院の西側に廻りたり。見る見る中に西の塀の西北隅より約八間位の處猛火となる。即ち猛火は北と西とにあり、愈危険なり。

依而予は予と同様防火にありし二等看護卒芳井松太郎に嚴命し、西塀の上を上らせ消火せよと命す。芳井は直ちに焼けつゝある塀に上り地方人數名、枝松、予等の運ぶ水を上よりかけたより一時火は下火となるも塀の外側に在りし炭俵は火焰をあげて塀を焼きつゝ、南方に進む。芳井の一步一步と左右猛火に包まれつゝ又堤の火に追はれつゝ後ずさりしつゝ水の來るを待ちて、又消火に努む然れども猛火は西方全部に擴がり西塀を焼いて我病院を越めんとす。約二十間も焼けたる時地獄に佛

二三十名の工兵應援に来る直に頼みて塀を火より約十間南よりたゞき倒す。其の機敏決心に不堪ものあり。芳井は沈着にして不撓不屈の精神を以て猛火の中に在りて善く命を守り死力を盡して防火に努む。其意氣行動真に驚くに堪へたり。

一等看護卒松前千龍は六番室に在り。予と暫時行動を共にし風の五番室に向ふや其防火を命ず六番室に移る火を生木を以てたゞき消し又六番室に入りて、發火したる藁蒲團を運び出し草中を這ひつゝ終始防火に努む。彼危機に際會してよく命を守り機敏に臨機應變の處置を取り工兵と協力して善く死力を盡して防火に努む其意氣行動賞す可く二年兵として死守したるは彼一人なり。

二等看護卒内田弘も先に暗中小林軍醫正の命「五番室六番室の危険とな 故防火せよ」に依り直ちに五番室に駆せて工兵と共に死力を盡して防火に努む。即ち桐の枝を折りて、移る火をたゞき消し、飛火を踏み消し避難者の濡蓋を以て身を纏ひ初は六番室に至りて防火し後五番室に到りて室内外の火をたゞき消したり。然るに最後五番室の工兵引揚喇叭を吹奏後工兵遂に五番室を去るに臨んで最後迄踏止りて防火に努む。其間工兵と協力し水汲消火毛布の運出等をなし五番室を死守す。枝松と云ひ、松前と云ひ内田と云ひ飽くまでも命を守り臨機應變の處置をとりつゝ猛火中に奮闘せし其の意氣行動賞讃の辭に苦しむものなり。

斯くして西塀は瞬時にして破壊せらる。其の前西北共に猛火に包まるゝや援助を求むる爲めに六七番室の間の草中を東に走り工兵の所に行かんとするや、六、七番の中央にて院長閣下に逢ひ當時の情況を報告せり。塀の全部破壊せらるゝや、又々工兵近歩三（奈良中尉指揮）及近歩四の應援來り、東方漸く白む。直ちに娛樂室の破壊を工兵中尉に計る。然れども彼は此の中にオルガンや貴重品あり且其必要なしと云ふ予は事の以外に驚き亢奮しつゝ再度逢ふ。工兵に頼む又肯せず軍曹に頼む半ば承諾す。尙不安なればそこに居らねし簡野軍醫正に頼みて工兵に又依頼す閣下又來らる。茲に於て工兵も心を一にして一大破壊作業に従事し先づ老朽の理髮所を破壊せんとするも柱中々倒れず。遂に到々娛樂室は工兵の全部近歩四の歩兵應援隊協力して柱を綱を以て引倒す。西方の猛火刻々として九番室及十一番十二番をねらふ。其作業中又飛んで屍室破壊を依頼す。軍曹の率ゐたる約二十名は直に應ず前兵應援し引倒す。倒れたる娛樂室は類焼して火焰九番に及ぶ忽ち屍室も焼けて十二番室危険なり、又々予は刀をふるつて工兵をして十二番室の便所破壊をなすも堅牢にして意の如くならず、然れども亢奮せる工兵は西室全部を破壊せんとする故極力反對して便所の方へ工兵を追ひやる。一寸目を放せば又西室を破る。南方に廻りて破壊區域を命ず、越權なりしなり。刀を以て予も一部破壊せり。時に十三番室の家屋に飛火す。家上に梶塚軍醫正外一名あり、防火に努む。

屋上より梶塚軍醫予に九番危険なれば直ちに應援せよととなる。予は折返し九番室に向へり。其の間工兵は西室を大部破りたり。九番室をたゞき初めたるも、其後は予は如何になりしか何もわからず。其儘八九番室の間に人事不省となりて倒れたり。其後我に歸れば予は判任官食堂の前の草原に酒や氷に圍まれつゝ金光軍醫、井上軍醫、看護卒二名に救護せられ居たり。井上軍醫は「氣がついたか」と云ふ。予は吾眩暈嘔吐頻發、頭痛にて、目はやにを以て閉され、ビリ／＼痛く聲は出でず敷時草の上にて同僚の厚き看護を受けたり。聞けば氣つけは小林軍醫正殿の賜なりと、御厚意恭なし軍醫部長閣下簡野軍醫正殿の見舞はれたるは記憶あるも嘔吐不快眩暈の爲め挨拶の氣なし、其の後見知らぬ偉い方來るもよく判らず後安井課長殿なりとなり。

午後四時頃全く正氣となり、法貴軍醫正殿と焼跡及麴町の火事を見る、時に強震相踵いで來る、朝やら夕やらさつぱり見當つかず。

病院無事、病院無事、嬉し涙に暮れたり。今にして之を回顧すれば誠に不可思議千萬なり寧ろ奇蹟なりといふべし。天道は仁者に與す。危機一髪の時、風は捲いて冲天に止りたるは幸の一なり。工兵隊の死守偉功を奏したるは其二なり。然れども翻て觀るに風は依然として南に向き平河町を燒き勇敢無比の工兵は退却したる曉に於て若し其儘に放棄せんか再度飛び移る火は必ずや六五番室を

燒き盡したるや必せり。五、六番室燒くるに於ては我病院焦土と化すや平河町の状態に依りて想像に難からず茲に於てか最後迄奮闘善く猛火の中にありて死守せし十數名の勇士亦無用の長物に非ざるは斷言して憚からざる所なり。此の項を終るに及んで衷心の敬意を工兵に捧ぐ。

(六) 救護班より地方患者收容の概況

徳川三百年の江戸文化は一瞬にして焦土と化し、東西亦判するに苦しむ。屍々累々、路傍の人之を顧るの暇なし人皆己が一日の生命を得るに狂奔す。如何に況んや他の傷病者をや。宜なる哉宜なる哉赤の十字の神に見えんとは其心境に在りし人ならで味ひ得ざる感激なるべし予求めて收容係りとなり閣下の快諾を得たり。心底一物あり曰く赤十字の眞意を緯とし、國家本位を經とし、最大收容能率を發揮せんと。第一日貨物自動車七輛收容總員百三十八名。快なる哉。

兩國方面は山田一等軍醫救護班長たり。國技館内に收容されたる傷病者九太の如し。惡臭充滿角力白鉢巻にて四斗樽を擔ぎ握飯を作る。其大さ頭の如し。重傷なる者多し。更に又重症と自ら定めて微動だもせざるあり。依而一策を案じ一應診斷の後一喝を見舞ふ。直ちに眼を開いて笑み腰を上げて立ち喜ぶ事限りなし、皆半正位を取らしめたるに。收容力三倍に増加す。快なる哉。

三歳の小兒積むに所なく、捨つるに情なし。糞尿に汚れたるをポロに包みて收容す。國家有用の材

とならば幸甚也。中に一人乞食の如き婦人あり救護を切りに頼む。閣下の慈悲に依りて助く。東京櫻井病院副院長の妻女とは天亦捨てざるといふべし。

第二日目は更に大舉して到る。兩國龜戸に至れば千葉醫大、第六師團救護班二百名を收容避難者七八百名、合計千名、救護大に努む。勢をねぎらひ重症を收容、大島小學校に至れば第八師團救護班救護に努む。新來患者三十名又勢をねぎらひ少數を收容す。砂町救護班に至る避難傷病者千名に近し之亦同様、暮色蒼然たるの時北走寺島町第七中學校に近衛第四救護班を見舞ふ病傷避難合計七百同校各班とも病院の厚意を謝し、御機嫌斜ならず。途中二度秋山閣下に逢遇す。暗中道破れ橋墜ち千住大橋亦渡るべからず。迂廻せんとするや小經羊腸急坂を爲し坂半ばにして自動車停止す。一尺逆行せば數丈の荒川に沈没、右折一步田中に投ず幸地方人と協力、九死に一生を得て暗中火焰に包まる、車坂を過ぎ日比谷に迂廻し夜九時半無事任務遂行、閣下初め各上官に御心配かけしは申譯に言なし。直に詳細第一師團司令部に報告す。

因に石井軍醫は千葉縣山武郡千代田村大里一三八二の人三十三歳である。現に澁谷町中澁谷四七五に住つて居られる。

東京衛戍病院職員

責 任 篇

●安田邸の忠實なる倉吉氏

大正十二年九月一日の大震災に、本所被服廠跡に避難した數萬の生靈が無残の最期をとげたことは何人も知る事實である。陰惨の氣はこゝを中心としてあたりには漂つてゐる。

この被服廠跡から二間餘の道を隔て、金權の王として世に時めく富豪安田氏の邸がある。費を盡したその庭園も、あの猛火と大旋風には一たまりもなく、忽ちの中に焦熱地獄と化して千に餘る死傷者を出した。安田保善社理事安田善雄氏及びその家族もまた多くの人々と共に本邸に於て無残にも焼死した。

この安田邸の地つゞきに安田邸に事へてゐる鈴木倉吉(五十三歳)といふ者がある。一日は妻と四男(十九歳)と共に楽しく物語つてゐた。地震と同時に善雄氏邸に悲鳴叫喚が起つた。倉吉氏は主家を思ふ餘り、強震のつゞく中を駆けつけた。

善雄氏留守宅の妻子女中六七人は驚きと恐怖のため、たゞ泣き叫ぶばかりである。倉吉氏は聲をはげまして子供を外に連れ出し、夫人を背負つて外に出た。それから直ぐに書生に命じて善雄氏を迎ひ

にやつたので、善雄氏は自動車で歸邸した。「負傷はないか？ 先づ安心！ 家の中へは誰も入るなよ」と主人は云つた。

折しも避難民凡そ六七百人、邸内に押寄せた。善雄氏は下男共に命じて、敷物その他を出させ、避難民には出来るだけ懇切にせよと注意した。

午後二時過ぎ、對岸淺草藏前方面の猛火は、折からの強風に誘はれて、隅田川を一足飛びに鈴木氏の邸にうつらんとした。倉吉氏は善雄氏と共に防火に努めて、約一時間奮闘した。善雄氏邸内の西洋館は外國の専門家が決して倒潰しないと云つた保證つきの物であつたので、主従一族をこれに入らしめて、倉吉氏は本邸に行つた。

午後四時過ぎと思ふ折、悲鳴叫喚各所に起り、旋風よと思ふ間もあらせず、火柱は天に沖し、赤熱した土塊、木片、トタン板等雨霰と降つて來た。人々は皆顔を地に押しあて、苦しまぎれに免れようとしてもどうすることも出来ない。

倉吉氏はこの中を、腰切袴に帽子を被つて漸く西洋館まで來た。この時體一面に打撲傷や火傷を受けて腫れ上り、出血も甚しかつた。

再び起つた旋風で倉吉氏は河中に身を投じた。この時である、龍卷は起り、水柱は立ち、船は焼け

或は轉覆し、多くの人は焼け、溺れて死んだ。倉吉君は泳ぎを知つてゐたが、龍卷にまかれて泳げない。漸く満潮となつたので、眞裸體となり、厩橋まで泳ぎ着いた。この時凡そ三時間餘、水中で火を避けてゐた。

倉吉君はやがて邸に引返し、河中にあつた衣類や襪を身體手足にまとひ、火焰をさけながら正門まで來た。あたりは死屍累々として愴慘極りなき有様である。ふと見ると、自分の近くに顔一面變色し焼け爛れた半死半生の一婦人が目についた。聲をかけて起して見れば、自分の妻である。驚きと喜びで五十間あまり抱いて行き、散水口で水を注いで冷した。漸く氣がついたので、耳に口をあて、勇氣をつけ、川の中からふとんを引上げて來て、頭から被せて休ませた。伴も若しや生きてはゐないかと、聲を限りに呼び歩いた。すると、川の中で、船のへりに抱きついて答へる者がある、顔は一面に火傷を負ひ、我が子とも思へぬ姿に變つてゐた。「父だ！ 氣を強く持て！」と勵ませば水の中で、「母は如何です？」と應じた。母は生存と聞くと氣力も加はつた。

倉吉は伴を連れて、勇奮努力又も邸内を探ることにした。

焼けたゞれてゐる者、眞黒に焼焦げてゐる者、手足のない者等が散亂してゐる中を、眼を覆ひ、念佛を唱へながら、安田の者は居るかと思ふ聲を限りに呼んだ。かうして門の側に來ると、本家執事の娘、

肉倉京子(一九)が倒れてゐた。大した負傷もないが、邸内の人糞肥料溜の中に浸つてゐたので、臭氣鼻をつくばかりである。これを川で洗はせて直ちに妻と伴の所で休ませた。倉吉君は竹の屋様くんと呼びながら探したが(善雄氏を邸の者は竹の屋様と呼んでゐたのである)答は更がない。

かうしてその日は妻子のゐる場所に歸り、二日の午後二時頃、大聲をあげて探すうち、向ふの方から一人歩いて来る者がある。近づいて見ると本邸の奥女中、加藤かつ(二八)であつた。かつは常に邸内の各所にある神佛の供物香花を整へる役であつたが、その御地藏様のある奥池の中で助かつたのである。神佛の御利益であると共に喜び、全身泥まみれになつてゐる。この女中も妻子と共に布團の中に休ませて、その夜を明かした。

二日の朝、日の出る頃、邸の者と思ふ死體を集めた。その中に娘京子の父、執事肉倉氏の死體を見した。京子は父の死體にすがりついて泣いた。その腕に田中傳次郎君と云つて佐々木の植木屋で善雄氏の自動車運転手をしてゐる者の兄の名刺がついてゐた。この傳次郎は弟渡邊平太郎の妻の名を呼びながら歩いてゐた。その聲を耳にして善雄君は、見る影もなく焼け焦げてゐたが、「渡邊々々」と呼んだ。「誰です」と尋ねると、「安田善雄だ、家内や子供はあちらで死んでゐる、邸の者は誰も居らぬか」と云はれた。此處に小出某が來合せたので、傳次郎君は小出君に邸の中に誰かゐるかも知れないから見

てくれと頼んだ。小出君はそこで倉吉君にこの事を告げた。すると倉吉君は、善雄様がい!! と驚き、布團の中の四人も氣を勵まし、共に駆けつけて、竹の屋様しつかり遊ばせ、と主人の看護手當に盡した。倉吉君は停車場から烏籠を持って來て、中に襪入れ、その上に主人を靜かにのせ、倉吉と田中であつた。妻子娘二人も連れてその場を去つた。善雄君は意識は確かであつた。兩國橋を越えて一臺の荷車を得て、襪や籠で動搖を避けこの上に主人を載せて、焼跡を迂廻し、九段坂上の陸軍軍醫學校はたどり着いた。倉吉君の伴は途中製氷會社から氷を持って來て、道々かみ砕いては善雄君の口に入れた。善雄は軍醫學校に着くと、倉吉君に向つて「鈴木、お前は邸の方を見よ」、傳次郎君に向つて「田中は布團を持って來てくれ」と云はれた。この時は午後四時過ぎであつた。

翌三日午前八時頃、田中が布團を持って行つた時には、二時間前に善雄君は逝去されてゐた。その後倉吉君は主家の焼跡に、衣食の不自由も意とせず、負傷の手當もなさず、伴や妻をも見舞はず、たゞ一人、九月九日まで、本邸を守つてゐた。

倉吉君夫妻は今本邸跡のバラックで、安田家に關係ある罹災者のために、何くれとなく懇切に世話をしてゐる。君はこの度九死に一生を得たのは豊川稻荷、不動尊、水天宮などを信じ、月詣でなど怠らなかつた御利益であると云つて、一層信心を重ねてゐる。さしも富豪安田君の邸宅は灰燼に歸し

たが、同家に事ふる者の数多い中に、眞に忠實なる倉吉君の善行は後世長く傳へられるであらう。

三二四

●主人思ひの勇さん

村山勇君は十六歳である。本所區横網町七番地帽子製造業加藤進方の奉公人で、こゝに來てから丁度五ヶ年になるが忠實に主人に事へて居た。家族は主人と妻光子(二四)長男忠明(二)長ふさ子(四)と都合五人暮しであつた。震災當日は一同は安田邸内に避難した。午後三時半頃旋風起つたので數千の避難民は狂亂の有様となつた。此の時主婦光子は忠明を背負つてゐた。主人進は荷物に注意してゐたが、旋風かと思ふまに見えなくなつてしまつた。

ふさ子は猛火黒煙の中に「清チャン〜」(勇は清チャンと呼ばれてゐた)と泣き叫んでゐた。勇君はふさ子を抱いて布圍をかぶつた。けれどもその甲斐もなく空中に吹き上げられ、吹落された。斯うして三回餘り投げ出された勇は、自分の生命がなくなるので、止むを得ずふさ子を其處にはなした。そして五六間離れると又「清チャン〜」と呼ぶ。その呼聲を聞くと勇君はバネの様に跳ねかへつてふさ子を抱き、「斯うして居れば二人共死ぬんです。清吉もふさ子様を背負つて逃げたいが、脊中を負

傷してしまつたから許して下さい」と逃げようとした。又「清チャン〜」と呼ぶ聲に遂にふさ子を抱きあげて居た。無情にも又旋風が來る。勇君は是非なくふさ子と共に同町七番地下水溝中に潜伏してゐたが火勢衰へたのを見て、勇君は安田邸裏の公園に避難した。此の時は既に見渡す限り死屍累々と、焼けたゞれた人、黒焼けの人、血にまみれた人で充ちて居た。ふさ子は親を求めて泣く。時は午後五時半頃であつた。何處の人かふさ子にバナナを二本下さつた。ふさ子も足に大負傷をしてゐる。危険はまだ去らない。勇君は泣き叫ぶふさ子を抱いて隅田川河岸で夜を明した。二日の朝主人を探してゐると漸やく會つた。お神さんは身體一面の大火傷で到底助からない。忠助さんは猛火が攻めて來た時に負ひ紐が焼き切れたので。其の時抱いて子供だけ助けようと川の中へ投げた。ところがその忠助は黒焦になつて船の上に死んでゐるとのことである。此の時主人は「清吉やお願ひだから生命があつたらふさ子だけは連れて何方へでも避難してくれ、今日はまた津浪が來るといふことだ。自分も思ふやうに脚が動かない。其の上妻も瀕死の重傷だ。どうか頼む」と言はれた。そこで清吉君も、不眠不休の奮闘の上に負傷をし、且つ飢えてゐたが、勇氣を振つて涙ながらに主人と別れた。痛さを堪へてふさ子を背負つて寺島村に來た。そこで軍隊に救助された府立第七中學校に來た。妻子をなくした主人は六日にびつこになつて學校に來た。清吉君はふさ子を抱いて嬉しいやら悲しいやら思ふだけ泣

三二五

いた。其後三人の負傷も漸次快方に向つた。丁度九月二十二日に主人の本郷の親戚を見に行つた。本郷では全滅と思つたお前は生きてゐたのか。ふさ子はまあよく助つたとて皆で泣いて喜こんだ。直ぐに主人を學校から連れて来て、世話になつてゐた。それから清吉君は主人も小使もない氣の毒だ。何とか自分のからだも動く様になつたからといふので、市や區の人夫に雇はれて僅かばかりの賃金を主人に出し、歸りはふさ子を慰めるため必ず何かと求めて来る。かうして十日間餘働らいたが、主人は清吉の有様を見て勞働もせぬ清吉が。若しや又弱くでもなつては困るとの美くしい情から、お前は人夫は止める。そして被服廠跡で繪葉書でも賣れと言はれて、其の後しばらく其所の南側で毎日繪葉書を賣つてゐた。

本所區横綱町七 帽子製造業奉公人 村 山 勇君 (十六年)

● 猛火の中を潜りぬけて

警察署の書類を助けた令嬢

牛込區市ヶ谷田町の醫師杉田武義君の長女で佛英和女學校本科四年の生徒喜代子(一七)さんが學友

の本所區若宮町の三島初枝(一七)さんと二人で、九月一日震災當時相生警察署の重要書類を守つて完全に避難した美談がある。

喜代子さんはあの日正午頃本所に初枝さんを尋ねる爲めに、電車から降りたが途端に地震が起つたので、驚きあわてたものゝ初枝さんの身を案じて、若宮町の家を訪ねて見ると倒壊してゐた。友の身を思つて混雜の間を尙附近を尋ね廻つて居るうち、やつと最寄のカトリック教會で初枝さんに廻會つたが、このときはもう附近一面火に圍まれてゐたので、二人は手を握り合ひながら、むやみに逃れ廻つてゐると總武總の電車の軌道で一人の巡查に遭ひ助けを求めようとする、其の巡查は後からま重要書類を持つて逃げて来るものがあるので、それを助けなければならぬから、二人とも此の包みを持つて私の代りに逃げて呉れと云はれる、助けて貰ふどころではない。二人は件の包みを手に夢中で火の中を駆け廻り辛うじて四日の夜二人とも市ヶ谷田町の家に通つたが、疲労困憊を極めた中にも托せられた包は始終大に持つてあるいたのであつた。あとで右の包は焼落ちた相生署の重要書類であることが分つた。杉田方を訪へば父武義さんが喜代子さんに代つて語る「喜代子が四日も歸宅しませんので、若し被服廠で死んだのではないかと、一同悲しんで居ました處へ。無事に二人で歸つて呉れました。渡された包は相生署の書類で、巡查は永野さんと云ふ人です。なか／＼立派な方で、僕

の娘たちを助けたばかりでなく、薄給をさいて、米を買ひ求め、一時は三十人位、家に置かれたそう
 ですからな……娘ですか、空のすいてゐる方、すいてゐる方へと逃れて行つた様です。それでもわ
 からなくなると、積上げた砂利や材木の上に登つて、逃れる方向を見極めた様ですが、この夏戸山學
 校で體操の猛練習をやつてゐましたから、それが爲めに、逃れる事が、出来たのでせう。」と自分の身
 一つをすらもてあました。本所の猛火の裡から署員の大部分を失つた相生警察署の重要記録の一部
 を保護して委托の責を全うした若い女性に敬意と表せねばなるまい。

東京市牛込區市谷町三ノ二番地 杉田喜代子 (十七年)

同 本所區若宮町六六番地 三島初枝子 (十七年)

●交通の杜絶に苦心の傳令使

君は岡山縣都窪郡万壽村の人でもう永いこと、エビスビールの吾妻橋工場に機械係として勤めてゐ
 た。丁度強震のあつた日、本所の松倉町方面の火が工場を甜め初めた時には、工場の職員と努力して
 ガンリンポンプを動かしてゐた。すると間もなく製品工場から發火して見る／＼中に工場は猛火に包

まれた。機敏な君は場長の許可を得て警笛を鳴らし、更に單身製氷室にあるアンモニヤバルブを閉ぢ
 た。そして雨の様に降つて来る火の粉を拂ひながら機械室に戻つて開け放しになつてゐた窓を閉ぢて
 隣家への延焼を支へた。

その頃は工場の人々ももうあきらめて皆吾妻橋方面へ避難してゐた。君も後から走り出た。寺松の
 来るのを待つてゐた工場長は、橋上で「君はこれから本社へ行つて吾妻橋工場の全焼した由を馬越社
 長に傳へてくれ」と命じたのであつた。年は若くて氣は利き身體も頑強な君は快くこの命を受けた。
 そして電車を一直線に上野山下に出て、動坂線に沿うて本郷大學前、それから小石川柳町、傳通院
 前、飯田橋へと人込を押分けて歩通しに歩いた。飯田橋には君の家があつたので、家族の身の上も心
 配になり一寸立寄つて行かうと少し進みかけたが、「いや／＼己は重大な任務を帯びてゐる身なのだよ
 し家が焼けてもこれ丈は立派に果さなければならぬ残念ではあるが思ひ留まらう」と思ひ直して、
 踵を轉じて四谷見附へと進んだ。その時はもう陽はとつぷりと暮れ、毒々しい火焰が日本橋京橋淺草
 一帯を甜めつゝあつた。赤坂御所に程近い處まで来ると君はもう亢奮と疲労とて一步も進めない程弱
 り果て、いきなり土手の芝生に腰を下して太い嘆息をついてゐた。ものゝ三分も休んで再び勇を
 鼓し火を避けつゝ不案内の町を歩いて麻布から青山へぬけ、午前の一時にやつとの思ひで本社に着い

た。本社には當直の外は誰もゐなかつた。早速吾妻橋工場の急を告げると、當直は目黒工場に副社長が居られる筈だから直ぐ其處へ行く様にといはれた。

君は疲勞の身をも顧みず深夜目黒まで重い足を引きながら行つた。そして鈴木副社長に面會を求め吾妻橋工場の焼失の趣を報じた。副社長も「あゝさうか惜しい事だが然し不可抗的な事だから致方がない。社長は本宅にゐるから君は歸りに寄つて行つて貰ひたい」といはれた。君は使命の半を果した淡い喜びで、又暗闇をぬけて麻布市兵衛町の馬越家を訪れた。そして逐一吾妻橋工場の焼失の顛末を物語つた。丁度この頃は東天が明けの喜びには、笑んで山の手の鶏が瀕に時を告げてゐた。馬越重役は「兎も角明日十一時半から工場長會議を開くから吾妻橋工場長にエビス迄來る様にいつてくれ」といはれた。そして朝飯とお茶を惠まるゝままに戴いて腹をこしらへ、午前の六時頃馬越家を辭した。足は重く歩みは次第に鈍つてくる。お晝迄には是れ本所迄と心はせき立てるが、何分火の廻らぬ方、橋の落ちてゐない地をと、選んで歩かねばならぬので平素ならものゝ三時間もかゝらぬ處を倍もかゝつて、まだ到着しないのであつた。その苦心と言つたら到底筆舌の盡す限りでない。でも綿の様に疲れきつて漸く午後の一時に工場へ歸つた。焼跡には工場長始め事務の人々が色を失つて呆然として愴愴な光景を眺めてゐた。

『やあ寺松が歸つて來た』と一人の事務員が叫ぶと遽かに活氣づいて『どれつ』と四五人の人が走りよつて『御苦勞〜』といつて迎へてくれた。『社長に會へたかね』と聞いた。『えゝ面會が出来ました。社長は大層心配はしてゐたがもうどうせ駄目だとあきらめてゐた。でもお前が來てくれて真相が解つた。明日十一時半から工場會議を開くから工場長に來る様に』との事でした。使命の要點を喘ぎ〜物語つた。そして安心したせいかどつと腰を下して暫くは何の言葉もなかつた。社を思ひ命を尊び終日終夜交通の杜絶した混亂の都を端から端へと歩き通した君の如きは、實に稀に見る勇工と稱すべきである。

本所區エビスビル吾妻橋工場 機械係 寺松 一 夫君 (廿六年)

●後藤風雲堂の殊勳者

神田區淡路町一の一醫療器械問屋株式會社後藤風雲堂では大坂に支店京城に出張所を設けて本店だけでなく四十餘人の店員を使用して諸官省諸醫學校を始め外國とまで盛に取引して手廣く商賣を營んでつた。

九月一日四方の形勢を見てゐた社長松田祐作君は午後二時半店員を集めて、

「火は幸に遠いから店は大丈夫であらう。諸君は自宅に駆付けて早く家族の安否を確かめるがよい。併し震災を受けてゐるから明日は日曜であるが皆出勤して貰ひたい」

と退散を命じた店員は家族の身の上を案じながら自宅を指して去つた。店に残つたのは僅に平澤友雄君(二四)と山本富藏君(二四)の二人のみであつた。

時は過ぎて三時となり四時となるや駿河臺方面の火は猛威を逞しうして東京商工學校附近まで襲つて來た。

此の時息を切つて駆付けたのは川島淳君(二五)佐藤龜三郎君(三五)大石貞曉君(一九)鈴木三郎君の四人であつた。

平澤大石の二君は急いで帳簿類全部を取纏め風呂敷に包み荷車に載せ御成街道から上野に向つたが非常な混雑でとても進めない。右に折れ練塀町御徒町方面を迂廻してゐるうちに六時頃になつてしまつた。平澤君は五十銭出して人夫一人を雇ひ店と連絡をとるべく引返した。大石君は人夫と不忍池の三橋附近まで漸く車を引いた。そして池の端にゐると消防自動車が來たのでそれをよける突端車上から荷が落されたので苦心して再びそれを積み一人で翌朝まで池の泥水を飲みながら帳簿を見守つたのを尋ねた。

であつた。

川島山本鈴木の三君は協力して先づ顕微鏡分光器膀胱鏡等の器械は井中に投入し、大きな器械は倉庫に入れて粘土を掘出して倉庫に目貼をした。佐藤君は工場の帳簿全部をかついで共に上野に大石君を尋ねた。

不幸倉庫は焼失したが井中の物は助かり、殊に帳簿全部出たので非常な便益を受けた。そのために十四、五萬の賣掛金は忽ち回収するを得べく又各所からの注文も明瞭となりすべての損害も明かになつて整理程なく進捗し復興の魁をなす原因となつた。

東京市神田區淡路町一ノ一株式会社後藤風雲堂

店員 平澤友雄君 (二十四年)

同 山本富藏君 (二十四年)

同 川島淳君 (二十五年)

同 佐藤龜三郎君 (三十五年)

同 大石貞曉君 (十九年)

◎身を以て鮮人を保護した共濟會理事

九月一日の大震災に續いて大火災が起つたとき、共濟會では十分沈着に行動したけれども、到底難

を避けることが出来なかつたので、一同は近くにある岩崎遊園に立退いた。居合せたのは三十餘人の同勢であつたが其の中には勿論朝鮮人も加はつて居たのである。

乏しい糧を分け合つて、三 餘人の人々が一日二日三日と避難して居つたところ、三日になると俄然鮮人騒ぎが初まつた。鮮人の不逞、凶暴、惨忍といふことが群集の心を昏惑せしめるに至つた。鮮人とさへ見れば捨て、は置かぬといふ状態になつてしまつたのである。極度の危険が此の人々の上にも臨んで来た。

『鮮人を渡せ』

『やつつけて終ふから、渡せ』

といつて脅迫する群集も漸次に殖えてきた。

事態容易ならずとみた中西さんは、即日事務員を勵まして會の燒跡にトタンなどを拾ひ集めて見すばらしいバラックを建てた。さうして先づ何よりも先きに許龍珠外十一人の鮮人を收容せなければならなかつた。

十一人の鮮人をバラックに入れて保護し初めると、更に四日になると林環憲外三名の鮮人を、警察から送られて一緒に收容することゝなつた。勿論此の間にも群集の來襲は一度や二度ではなかつた。

白晝白刃を閃めかして鮮人の引渡を迫られたこともあるけれども、一つには共濟會が世間に認められてゐるのと、又一つには身を以て保護する中西君等一同の決心に動かされて群集も納得したのであつた。

九月七日の夜になると、遊園のバラック内に一大事が起つた。それは朴慶雲外二人の鮮人が此の日まで巧に群集の中に交つて其の本體を見出されずにゐたのが、當夜になつて看破されたのであつた。群集は鬨の聲をあげて追ひまくる。鮮人は駭いて逃廻る。とゞのつまり、警察の手を経て、これも共濟會に廻つて來た。宅に當時の共濟會は鮮人の爲めの大安全地帯であつたのである。其の後九月の九日になつて朴宗碩といふ鮮人を收容した。これは東大工町の或家に寄宿して働いてゐたものであるが今度の騒ぎに東西に浮浪してゐたのであつた。かくて共濟會のバラックには、約二十人の鮮人が集まつて、恐ろしい周圍を眺めつゝも、自分たちの身の上の安全なことを喜んだ。それは、當時恩義を受けた鮮人から中西君へ宛てた廻らぬ筆の禮手紙を見ることによつてもよく看取されのである。

併し、中西君等は、かうして居る間にも決してこれ丈で満足はして居なかつた。社會事業に提げるとしては、成すべき事が山ほどある。たとひ其の何分の一でも、盡せるだけは盡さねばならないといふ意氣に燃えて假の事務所を拵らへて、其處で諸般の仕事を開始したのである。今、それ等を一

緒にした救護事業の報告が印刷されてあるから轉々してみよう。

第一報

事業種別	期間	件数	摘要
權災者宿泊救護	自九月二一日 至九月三十日	一、一七〇	鮮人を主とす
人事相談	同	一、七〇六	
羅災者避難先案内	自九月五日 至九月十九日	五、三三六	
無料代書	自九月五日 至九月三十日	一、六五八	羅災者證明私信書諸届書
施藥	同	五、〇九四	胃腸藥
歿死者吊慰	同	一、七〇八	
勞力提供	自九月四日 至九月二十日	四四四	無料奉仕 道路 橋梁 手傳
右従業員延人員	二百七十五人		
郵便事務	九月八日より郵便切手書臨時賣捌所を設け繼續		
事業種類	第二報	取扱件数	摘要
			(大正十二年十月)

- 羅災者宿泊救護 一、〇五二
- 人事相談 五二〇
- 法律相談 六四〇
- 無料代書 二八〇
- 歿死者吊慰 一一〇
- 慰問品配布 二、六五〇

右従業員延人員 二百七十七人

- 鮮人を主として保護す
- 葉書信書諸届願書類
- 衣類外日用品

此の外職業紹介の成績として、第一報には九、三七七(男九、一八二女一九五)の求人があり、一四、五九〇(男一四、四一四女一七六)の求職者があり、其の中六、七一七(男六、六四三女七四)の紹介成立のあつたこと、第二報には二、六五三(男二、三八二女二四九)の求人と、一、九二二(男一、七四七女一六三)の求職者があり、六三四(男五七二女六四)の紹介をなしたことが報せられてある(混亂の裡にも本務を忘れず飽迄責任を重んじて救護の責任を全うした上に、災後應急の仕事に全力を盡した努力の跡が窺はれるのである。

深川區西平野町一番地 共濟會理事 中西雄 洞君 (明治二十二年五月二十四日生)

● 猛火をくゞつて児童を送り届けし小使

這般の震災により等しく災厄を蒙つた數ある學校の中でも、とりわけ本所の三笠小學校は不幸な學校であつた。この學校の生徒は他の學校に見る様な通學區域といふものも一定せず、最もひどい細民の子弟ばかりを收容してゐるのである。丁度その時は生徒も同じ細民學校の菊川、太平の二校に分けられ而も一部二部三部までの教授をしてゐるのであつた。これ丈でもどの位惠まれぬ學校かといふ事が想像されるのである。そこへあの強震が見舞つたのであつた。普通の小學校はもう始業式を終へ兒童も皆歸宅してゐた。然しこの學校には二部の兒童が約四十名ばかり集つていたいけにも晝からの始業式を待ちわびてゐた。俄然強震が起り續いて火の手は近所から上るといふ混雜に教師も小使も二ヶ所に分れちりぐりの活動をせねばならぬといふ苦境であつた。

赤星訓導は素早く子供を集め通學町別にした。そして吉田小使を呼び君は御苦勞でもこの子を横川町まで連れて行つてくれと命じた。小使は頼まれた八名の子供の上級生に下級生の手をひかせ、人ごみと猛火の中をくゞつて横川町まで無事に送り届けた。歸つて見れば若宮町西岡町の子供が七名ばか

り救ひの手を待ちわびてゐる。再び萬難を排して第二回の送り届けを無事にすませた。踵を返して學校を見るともう火焰の直中にある。使丁は居残りの生徒と先生の事が氣になり、心も狂はんばかりであつた。已むなく途を厩橋に取つて進んでゐると運よくも太平校の小使に巡り會つたので早速學校の模様を聞くと、先生も生徒も皆徳川邸に避難したといふ。そこで使丁はその足で徳川邸に行つて生徒を保護した。間もなく此處も危くなつたので河畔に出て共に與に水をあびて辛うじて火氣を防いだ。幸にも此處へ避難した生徒は皆赤星先生に連れられて、寺島村へ逃れ永らく寺島學校のお世話になつて助つた。

翌朝小使は荒井町五番地なる自宅を訪れると家は全く燃え盡し、家族の行衛すら知れない。貧しき使丁の身としては實に氣の毒な事であつた。

本所區三笠小學校

使丁

吉田松太郎君

(五十九年)

● 羽織一枚の大心配

暑中休暇の始まつた時に、裁縫の材料にと受持の西松先生から縮緬の羽織を借りて來た岡田さんの

住居は京橋區新湊町にあつた。休暇の善い間に、自分でも氣に入つた程立派に繕上げて早く學校の始まるのを待つて居た。

九月一日始業式の日には朝からの雨なので、「若しや大切のお羽織を濡らしては」といふ母の言葉に従つて心を残しながら登校したのであつた。

學校からかへると間もなく起つたあの大災害。しかし花子さんは先生からお借りした羽織の事が氣になつて、とうとう持ち出して先生の手許へかへすことが出来たのであつた。

僅か一枚の羽織を返へしたに過ぎないが、責任を重んじてあの混亂の間にも終始心に懸けた心根には尊い教訓が含まれて居る。どんな氣持で花子さんがこうした事をしたのかは次ぎに掲ぐる、花子さんから受持の伊藤先生に宛てた自記によく現れてゐる。

岡田花子より當時の事實を記して伊藤教諭に送つた記録を其の儘に。

突如起つた大天災……それは恐らく誰も曾て味はつた事もない恐ろしいものであつた。人々はたゞ恐怖と恐怖とに色青ざめて唇戦き手足振ひながらも皆「きつとゆりかへしがやつて来る」と思はずしくむ外はなかつた。私も總身毒蛇に毒氣をかけられたといふ様な氣持でどうしていいのかわらなかつた。

私の逃げ出して居た通りは、もう怪我人が一ぱいゐた或る者は狂氣になつて泣き叫び、或る者は血まみれのからだを戸板に乗せて病院にかついで行かれた。

嗚呼悲惨……私はかすかに泣いてゐたのであつた。その内にまた、恐ろしい揺り返しが来た。キャット云ふ悲鳴……物凄いな家鳴り震動……私はもう誰彼かまわす抱きついた。それから震動はつづいて襲つて来た。

私はふるへながらもたゞ祈る外に考が出なかつた。

「神様よ、どうして私たちはこんな恐ろしい思ひをしなければならぬのでせうか。どうぞ早く静まりますやうに願ひです。願ひです」と。

あつちこつちに起つた火の手も、だん／＼四方に廣がつて京橋の方へも來さうに見えて来た。氣の早い人たちはどん／＼荷物を表へかつぎ出すのであつた。その時私の頭にはフト一つの大心配が起つた「大切なあづかり物かもしれないも焼けたらどうしやう」と。私はすぐに、そのあづかり物を取つて來ますと叫んだけれども出先から無事に歸つて來た父は、「品物が惜しいか、命が惜しいか」と私の行くことを止めるのでした。

私はもう氣が氣ではなかつた。もしもあの火が此處まで來たら……おあどうしやう！ このまゝで

責任も持たずに逃げるのか……だん／＼近よつて来る火を見ながら私は胸に思つた。「なるほど命は大切だけれども、果せるだけの責任を果さなければ生きてゐても恥しい。どうしても自分の責任は果したい」とさうしてあの羽織さへ出せばほかに何も用はないからと父に願つても父は断じて許してはくれなかつた。そのうちに誰いふとなくつなみか来るぞと言ふ聲に、今はもう誰もあわて、逃げまよつたが私は「そんなあらゆる天災で一度に責められてたまるものか」と強い反抗心さへ起してゐたが、しかし矢張り胸はドキ／＼不安の思ひが込み上げて、どうなる事かと四方を見つめて居たのであつた。火事はもう大變に廣がつてしかも私たちに近づいて来た。さすがに母は堪りかねて兄と一所に家にとんで行つた。さうして一人一人の袷一枚づゝとお金を持つて、兄は座布団二三枚と敷物一枚とを持つて来たのであつた。父は「もうよせ火は大丈夫だ。こんな處まで来て堪るものか。それだけ出せばここで野宿をしたつて寒い事はない」と云つて再び家へは誰もやらうとはしなかつた。私は本當に氣が氣ではなくなつた。自分達の物をたとへ少しでも出しながら、大切な人から預つた品物を出すことさへも出来ないのかと居ても立つても居られない氣持となつたが、近所の人と一所に兎も角學校前の天幕張りの中へ入れてもらつたのだつた。

もう日も大分暮れて、灰色だつた空がだん／＼一面に薄赤くなつて来た。火の手はますます／＼強くな

つて行く。物凄いつむじ風さへ吹いて来て、私たちのあるテントは張るそばから破れてしまつた。間もなく火は三方から恐ろしい勢で、私たちの方へ押して来るのであつた。父の止めるのもきかずに再び母と兄とは暗がりの中を走つて家へ行かうとしたのであつた。私は全く狂氣になつて「兄さんお願ひです。二階の机の上にある先生のお羽織を持つて来て……あれだけあれば外は何も……早く……それだけでいいから早く持つて来て」と後からすがりついて頼んだ。解つたか解らないのか走出した兄は唯黙つて暗の中へ行つて仕舞つた。私の其の時の心配は今でも忘れられない、「もし兄さんが持つて来なかつたらどうしやうと」

もう物凄く悪魔の呪ひの火は三方から燃え盛つて眼さへ開いて居られなくなつた時、母は佛様と商賣道具の二三を持つて兄はたゞ一つ私の大切な羽織を持つて来たのであつた。おおその時……私のうれしさ。私の安心。思はず堅く抱きしめて、兄に感謝をしたのであつた。さうして佛様と一しよに風呂敷に包んですぐ肩にしよつたらば、もう家の何物もいらぬから早く此の場所から逃げたい心となつてしまつた。

學校前の廣い道は、荷物で埋まつてもどうする事も出来なくなつてゐた。あまりに油断して居た私たち一家族はほとんど火に囲まれてから、あわてて逃げ道に迷ひはじめたのであつた。けれども父は

「あわてるな」とのみ言つてとう／＼丸の内へ出る事が出来たのであつた。まき上る砂埃と火の粉に一寸先きさへ見えない中を親子五人づれの私たちは、必死となつて鍛冶橋に來た時にはもう今通つて來たばかりの道が一面火の海と變つて居たのであつた。火と人にとに蒸される暑さの中で親は子を呼び子は親を呼びながらやつと市役所前まで來た時に、私の眼からはとめどなく涙がこぼれて來るのであつた。家を焼いたための涙でもない、着物を焼いたための涙でもなかつた、これにて危地から逃れ得たといふ喜びの涙であつたのだ。

少したつてから私は着中の荷物を下ろして調べて見たがあつた／＼たしかに汚れもせず先生からのお羽織があつたのだつた。

其の夜は熱病人の様な體を、アスファルトの道路へ、もうせんを敷いて家族五人悲しい一夜を明したのであつた。風呂敷の荷物をしつかり抱いて……

それから鮮人さわぎや食料や、雨風になやまされながら五日目にやつと市役所の下水課に入れていたゞき六日目から現在の家に世話になつて居た。

それから丁度一ヶ月たつても、心には思ひながらも先生の御安否お尋ねもせず過してゐたが、樂しかつたなつかしい有りし日の母校を思ひ浮かへては涙ぐましく、殊におあづかりしたお羽織の事も氣に

なつて、早くお返しし度いと毎日念じて居たのであつた。

それから數日の後お友達のお塚さんにお目にかゝつて、色々學校の様子をお尋ねすると先生はじめ皆様にもお變りなくて十五日からブラックで授業が始まつて居ることなど聞いた時には、私はたゞ無性に嬉しくて／＼たまらなかつたのだつた。その二日の後に學校へ出てお羽織を先生にお上げて尙諸先生の御無事なお顔を見た時には……たゞ涙が出て胸がドキ／＼して何からお話申上げてよいやら分らなかつたのであつた。さうして先生のお手許へお羽織をお上げた時、ああその時の私の心は……さうですちやうど、清く美しく晴れ渡つたあの天空……のやうな氣がするのであつた。

お手紙が有りましたので有りのまゝを御知らせ申上げます。お褒めにあづかり、ほんとおはづかしう存じます。唯おあづかり致しました品物故お返へしたに過ぎないので御座います。唯あの場合であるが故に何だか私には本當に嬉しく思へたので御座いました。

下谷區谷中天王寺町二十一番地林屋方
京橋區實業補習學校専攻科一年生 岡田花子 (十五年)

● 助手の忠實な活動

東京市深川區南部に東京電燈株式會社所有の深川變電所がある。九月一日は助手石川松男（二十五歳）津田孝三（二十五歳）佐野玲一（十九歳）が當番勤務であつた。

俄然起つた彼の電天動地の地震災に驚いたが防火用閉鎖戸を全部下ろし終つた。此時凡午後二時であつた。忽ち狂亂の如き猛火は午後三時頃變電所町内を一舐めに舐めつくしてしまつた。此の時助手三名は散々に避難民の波にさらはれてしまつた。

翌二日は石川助手は焼跡をたどり變電所に來て檢べるとシャッターは立派に成功して、所は全部無事であることを知つた。その喜びは言語さへない程であつた。當所は實に青年助手三名の沈勇と忠實なる活動に依つて禍害を免れたのである。會社の利益は勿論であるが深川西部と京橋區の石川島、佃島、月島に十月一日から送電することが出來たのもこれが爲めである。工業地區に於けるその光明と動力は社會國家民衆の爲めに如何に幸福であらう。想へば三助手の行動は美談として後世の鏡である

●怒濤を潜つて使命を完うす

愛國婦人會が、

（本部臨時救護班横濱出張所活動概況）として會員に頒布した報告の中に左の一文がある。

「神奈川縣下に於ける罹災者の救恤は前回報告の如く鋭意配給に努め横濱市を中心とせし配給は十月十八日を以て一先づ一段落を告げたるを以て同日救護班出張所を大磯町に移し交通の不便其の他あらゆる困難を排して活動を繼續し足柄下郡真鶴村及片浦方面の罹災情況視察の爲め派遣せる班員の如きは小田原町の連絡乗船に際し、既に薄暮且つ風浪荒くして上陸し難きに依り挺身海に投じ辛うじて海岸に泳ぎ着き豫定の使命を全うすることを得たるが如き事實あり云々」

文中に班員とあるのが我が山田嘉景君

君は明治大學法科の學生であるが現に配給事務の臨時雇員として婦人會本部に働いてゐる愛國婦人會が救護活動に熱中し神奈川方面に其の手を下すや君は願つて其の救護班に加はつた。始め横濱市に於ての配給を開始すると君は専心其の事にあたり朝は早くより夜はおそくまで休むひまさへなく働いた。其の餘の時間としても罹災者の爲に異常の努力を續けてゐた。

救護班は小田原、真鶴方面の救護の緊急なるを知つたために大磯に其の本部を移轉した。山田氏もこれに従つたのである。本部の最急に知らんとするのは真鶴片浦方面の窮狀であつた。誰か班員の中

から其の視察に行かねばならぬ。此の時、

「私が参ります」

と言つて進んで其の使者たらんとしたのが山田嘉量君である。

當時早川から眞鶴への沿道一帯の地は惨害甚しく、道路は山崩れの爲め埋没し、或ひは海中に陥落し、歩行すら容易に出来ない状況にあつた。途中憩ふべき家などは一軒もなかつた。

幹部から眞鶴町長へ宛てた一通の手紙を手にして嘉量君は單身大磯を出發した。時に大正十二年十月廿二日午前九時。早川、根府川、片浦などの町や村を通つた。何しろ地震と火災と海瀟の三方攻撃に會つたので何處を見てもその惨状は言語に絶してゐる。山田君は荒涼たる慘禍のあとを涙ながらに踏みしめ、午後一時頃眞鶴の町に着いた。

町は僅かに二戸を残すのみで外三百餘戸は悉く焼け死者百餘名糧食は全く盡きて辛うじて附近町村の救助を仰いでゐた。

嘉量君は直ちに町長草柳由太郎君に會つて婦人會からの手紙を渡し其の他の用件について會談する中はや四時になつた。陸を歸れば日が暮れる、海を行くにはモーターボートはあるが少し海上荒氣味なので町長は今から歸る事の危険なるを力説し一泊の上明朝早く出發するやうに勧めた。嘉量君は目

のあたり惨状を見てこれを一刻も早く大磯へ報告しなければと斷然歸途につく旨を告げ且モーター一隻及其の運轉手の周旋を頼んだ。町長も其の決心の翻すべからざるを思ひ、君の言を容れた。棧橋が陥没してゐるのでモーターまでは海中を徒歩した。モーターに乗ると小田原さして其舳を向けた。舟が小田原に近づくに連れて、いとど荒れ模様空には風さへ吹きつにつて浪は高くなつてくる。日は伊豆の山に入つてあたりは昏くなつた。荒れ狂ふ浪の彼方には小田原の町のあかりがチラ／＼と見え來た。濤は益々荒れ狂ひ舟は木の葉の如く動揺する。岸へ近づけるなどは思ひもよらぬ。残念ではあるが片浦へ引かへすと運轉手が言ひ出した。其の時の運轉手としては無理もないのだ。嘉量君も運轉手の一言に大いに弱つた。然し何であめ／＼歸れやう。自分は何のために使したか。今まのあたりあの惨状を見たではないか。そうして一刻も早く復命しやうと決心したではないか。町長の言を何といつて斥けたか。と考へた時、嘉量君は堅い決心をした。「自分の今行ふ道は唯だ一つ」と忽ち洋服をぬいだ。運轉手の止めるのも聞かばこそぬいだ服はバケツに押し込んでザンブとばかり身を躍らせて海中へ、泳ぎにかけては猛者である。荒れ狂ふ濤を物ともせず扱手を切つて小田原の海岸へ泳ぎ着いた。

婦人會は翌日早速衣類三二四〇枚、木炭二七匁白米五九俵、芋一俵、雨傘五六本、菜二五〇〇匁、

罐詰十一函を眞鶴へ、衣類一二〇〇枚、白米二二俵、慰問袋一四〇五袋、豆三俵を片浦村へ持つて行った。

三五〇

一分早ければ一人多く助かるとは米大統領クーリツヂ氏の日本震災救助ボスターの標語であつた。我山田君のために眞鶴、片浦の町は救はれたと言つても敢て過言ではない。

君は熊本縣の人。幼少にして平塚村小學校を出て、日比谷成城中學より明治大學に入つた。現に同大學生である。泳ぎは君の最も得意とする所である會て大毎主催の競泳にメダルを獲た事もある。

愛國婦人會臨時職員 明治大學學生 山田 嘉 量君

●變電所を守つた勇敢な二助手

東京市本所區林町三丁目六十一番地に位する東京電燈株式會社本所林町變電所は、本所深川月島の江東全町に亘る東電の光明と動力の源である。

大正十二年九月一日は、變電所の勤務は助手組長石井正太郎(三十九歳)と助手松本醇の兩人であつた。異様な音響と共にさしも堅固な鐵筋コンクリートの建物もゆら／＼として、足をすくはれ、思ふ

場所へ行かれず、危険な機械のあることゆゑ困却一方でない。けれども振動は益々烈しくなつて、所内の危険は増すばかりである。思はず外を見下すと、土煙は濛々として天に沖し、倒潰家屋も其處此處に見られた。所内からの出火、或ひは一般民家に漏電等の事あつては一大事と、兩人は勇を鼓舞して油入開閉器などに注意し、本線その他の開閉器全部を開放した。即ち受電送電全部を切り、危険を防止したのである。折しも配電盤の一部は倒壊したが、これにはさしたる損害もないので、兩人はなほ手配をして警戒してゐた。

この時、變電所の東方約一町の地點に出火を認めたので、兩人は萬一を慮り、倉庫から重要書類を取出して、機械場の適當な所に持込んだ。再び近傍を眺めると、黒煙は既に炎々たる猛火と變じて、四面に紅蓮の焰をあげて猛威をたくましくし、日本橋淺草方面及び區内の菊川町、徳衛門町、堅川岸松井町一帯は全く火の海となつてしまつた。二階の事務室から、この言語に絶する凄愴な光景を見た兩人は、刻々に迫る危険を見て取つて、互に聲を掛け合ひ防火扉の閉鎖に従つた。この防火扉は一ヶ年二回の大掃除に必ず開閉練習をして來たのであるが、地盤の柔い深川のこと故地震のために建物が傾斜したのか、兩人共に聲を勵ましく、冷靜に！沈着に！と呼びながら下ろさうとしたが、平素の如くビシヤリと下りない。

で、漸く二階全部のシャッターを終り、階下に来ると、近隣の民家から變電所を防火建築と知つてゐる人々が重要書類や家財を依頼して來たので、屋内は忽ち山をなしてしまつた。かうされては防火扉の閉鎖が甚だしく妨げらるるので、或は怒り或は宥めて人々を撃退し、漸く全部の防火扉を閉鎖することが出來た。

この時、中和小學校職員は重要書類を持つて來て依頼したので、それは民間の雜品よりも特に鄭重に扱つて机の上においた。最早數間離れた助手の住む社宅は炎々たる焰を巻き始めた。兩人が最後の扉を閉ぢ終るや社宅は倒れ、本所は一面に紅の火の海と化してしまつた。

兩人は手に手を取つて死なば諸共と避難のために駆け出した。この時は丁度四時過ぎで、堅川岸から焰熱甚だしき中を松井町に出たが進めないで、引返して伊豫橋から高橋に出た。今はもう避難民の姿は殆ど見えす、死骸は到る所に見られた。互に勇を鼓し勵まし合つて、終に不動様から越中島に出た。猛火に加ふるに恐ろしい旋風も起つて、遠く近く悲鳴叫喚は各所に起り、土塊、木片、或は眞赤に焼けたトタン板が霰のやうに頭上に降つて來る。兩人はかうした中を商船學校から海中に逃れて小栗飛行場に近づいたが、もう進退極まつたので、蘆の中に身を隠し、辛くも火焰を避けて其の夜を明かした。

二日の夜明け頃、學校や其他の建物は焼失して、火勢は衰へたので、午前四時頃二人は心にかゝる變電所の様子を探査しようとして出でては見たが、餘焰は尙まだ強く一步も進めなかつた。

暫くして飢えと渴と疲勞とに悩まされながらも、深川の南端から水道の鐵管をつたはり、焼死體、溺死體の累々たる中を、兩人は漸く午前八時頃變電所に到着した。扉を開いて見れば、嬉しや、内部は全く無事である。二人は思はず嬉し涙にむせんだ。

それから兩人は平井の實家に歸り、家族と共に無事を喜び、三日から變電所に出勤することになつた。

實に勤務上平素は周到なる用意を持ち、危急に臨んでは冷靜沈着に大事を所理して禍害を防止し得たのは、單に会社の建築物及び機械存在のため百萬圓に近い損害をなからしめたのみならず、江東全町何十萬の罹災者が今日電燈の下に愉快に働き、或ひは動力を以て振作更張に努力し得られると云ふのも、勇敢なる石井正太郎松本醇兩君が勇奮努力の結果會社變電所の多くが灰燼に歸したる中を林町變電所をして無事ならしめた其の功績は偉大であると云はなければならぬ。

東京電燈株式會社本所林町變電所 助手 石井正太郎君 同 松本 醇君

● 寢食を忘れて遂に卒倒

赤坂區表町に順天堂病院の分院がある。震災當時は多數の傷病者を收容して其の手當のため醫員、看護婦等の活動は實に目覺しいものであつた。其の一病室に島田周太郎君と云ふ重病者が居る。君が入院した事情を聞けば誠に同情に堪えない感心な事實があるのであつた。

大震災の結果物資の缺乏甚しく、之が供給は實に國家的の急務であつた。内務省には臨時震災救護事務局が置かれ、軍隊の應援を得て各地方から東京へ集つて来る救護品の整理並に配分給與に従事した。西部から来るものは主として芝浦へ、東北方面から送られた品は多くは田端驛に一旦收容されそれから市内各區、近接町村其の他へ分配されたのである。交通機關の極めて不便な然も爲すべき事務の甚だ繁激な折柄として此の配給事務は圓滑なる進捗を見る事が出来なかつた。

政府は民間の事業家に諒解を求めて配給事務を悉く之に移さんとした。乃ち郵船、三井、三菱等の大會社が代表となつて協議會なるものが成立した。十月の初めから救護事務局の囑託を受けて、此の協議會が配給事務を取扱ふことになつたのである。事務は海上と倉庫と陸上の三つに分れる。即ち海

上の輸送、陸揚してからの保管、罹災地への陸上運輸が之である。陸上の運輸配給は内國通運會社が引受けた。海上と倉庫は系統によつて趣を異にした。三井系統にあつては海上の輸送を大正運輸會社がやり、東神倉庫會社が陸上の保管に任じた。三菱系統では共同運輸と三菱倉庫が分擔して居たのである。

大正運輸株式會社は神戸に本店があり、横濱に其の出張所があつたので島田君はその出張所主任を勤めて居たのである。横濱市元濱町二丁目にあつた出張所は勿論のこと、同市内にあつた住宅さへも焼失したので君の困窮は一通りではなかつたらう。ところが右に記述されたる如く、自分の會社が此の重大責任を帯びたる配給事務を取扱ふ事になつたのだ。奉公の念に燃ゆる君は粉骨碎身以て此の重任に當り、一は社會公共のために最も緊急を要する救護事務の圓滑なる進展を圖り、一は以て我が社の名を成し、其の基礎をして更に確實ならしめんと覺悟したのである。

大正運輸の事務所を芝浦に置いた關係上、横濱から通勤することは不便であり、交通不備の場合事實に於て不可能の事であつた。品川、高輪あたりの旅館に泊つてゐたが後牛込に住む友人の親切によつて、此處から芝浦へ往復することになつた。何しろ會社の全責任を一身に擔つてゐることゝして少しの餘裕も得られない。朝は早朝から出かけて、人、船其の他の手配を定めねばならぬ。海上遙かの汽

船や軍艦から芝浦までの間を食糧、衣類、建築材料、あらゆる救護品の輸送を最も敏捷にせねばならぬ。陸揚して倉庫の方へ引渡す恰も戦場の如き激務に寸隙とても無かつたのである。忠實なる君は毫も自己の身體を顧みなかつた。斯かる事業に従事してから三十年の間、唯の一度も醫藥を用ひた事のない君は頑健を以て自ら信じ、敢へて身心の過勞を顧慮しなかつたのである。

十月二十四日、例の如く早朝から牛込を出掛けて芝浦へ行つた。何のこともなかつた。芝浦へ到着したのは八時頃である。今日の仕事をそれからそれと準備に忙しかつた。と急に頭が重くなつた。けれども自分の體を信じ切つて居た君は少しも氣にしなかつた。其の中一同僚は「危ない！ 横に寝給へ！」と叫んだ。それから後は一切夢中で何事も知らぬ。後に聞けば此の時君は卒倒したのであつた。自動車に載せられて赤坂の同僚の宅に着いた。早速順天堂分院へ交渉したが室がない。止むを得ず一日待つて二十五日漸く此の病室に入れられた。一週間程は全く意識が明瞭でなかつたといふことである。

大にしては人類救済のために、小にしては自分の會社發展のために、全く自己の身命を賭して奮闘し、遂に倒れるに至つた。島田君の誠實なる行動には神人共に感激して止まないであらう。日増に君の経過は良好である。再び君の忠實なる勤務振を見るも遠からざることであらう。

大正運輸株式會社横濱出張所 主任 島田周太郎君 (五十年)

●奇蹟の如く災厄を免れた森永の化學試験所

芝區田町にある森永製菓株式會社の第一工場にある研究部の化學試験所は何人の想像にも損害を免れなかつたらうと思惟されたが、事實は全く正反對に一點の被害もなかつた。現に早稻田大學の如き東京高等工業學校の如き、何れも化學研究室から發火してゐる。この種はなほ他にもあらうが、森永の試験所だけはその例を破つた。それは言ふまでもなく、すは地震！ と言ふ咄嗟の場合に際して高田研究部長をはじめ、部員九名が、沈着冷靜、開かれてゐる戸棚を閉鎖したり、高所にある瓶入藥品を取りおろしたり、沈着にして、周到なる努力を拂つたからである。アルコールが流れたらどうする。エーテルが流れたらどうする。金屬ナトリウムがこぼれたらどうする。そは戦慄すべき猛火を工場の一角から吐き出すより他はなかつたのである。併し幸にも前記研究部員の災害に臨むで狼狽せず、沈着冷靜、協力一致して危急に善處し得た勇氣と責任感との齎らした貴重な結果がこの安全と求め得たこと認めねばならぬ。未然の防禦に無限の價値を認めねばならぬ。

●危かつた帝國ホテル

帝國ホテルの正門を入つて右の奥、華族會館に接した所にホテルの動力室がある。煉瓦造りの中のコンクリートの土間にはモーターが凄じい唸りを立ててゐる。土間から二間許りの椅子を攀ぢた所三四本の柱によつて危げに支へられた棧敷のやう板敷の上に梯子が一つ置いてある。此處に森田傳治君といつて未だ年若い技手がゐた。大正十一年四月に神田の電機學校を卒業後直ちに此のホテルに勤務したのである。

九月一日も、例のやうに此の室に在つて三十分若しくは一時間毎にメートルのレコードを記して居つたがやがて椅子によつて読みかけの専門書を播いた。背後の窓越し舊ホテルの焼あとの廣場から涼しい風が入つて来るもう晝に近い午前十一時五十八分。

遠く地鳴りがしたと思ふ間もなく大震は襲つて來た。森田君は読みかけの本を閉ぢるや、むくつと椅子を立上つた。動力室は煉瓦造りだつた。傳治君の居た場所は棧敷の上だつた。傳治君は煉瓦造りのきしる恐ろしい中に、棧敷と共に波のやうにゆられた。スワー一大事と。傳治君は我を忘れて側にあ

つたオイルスイッチを切斷した。眞に命大事と思へば後ろの窓から飛び出せた。傳治君は此の時此の動力室のたつた一人の責任者であつたのだ。我が手を用ひずして誰れかよくメースイッチを切る考であらう。屢大災を起した此のホテルに勤める傳治君は、スイッチ——漏電——火災を聯想した。

メースイッチは椅子から二間も先きにある。板橋のやうな棧敷を渡つた二間の奥にある。此れを切らなければ如何なる惨事が出來上るかもわからない。スイッチを切らぬ上はホテル内各室に電流が送られてゐるのだ。こんなによれては漏電は何處に起るかも知れぬ。當時ホテル内には數名の外人が起居してゐるのだ。スイッチを切る者は吾れ唯一人も。斯う思つた時傳治君の勇氣は百倍した。襲ひ來る第二震を物ともせず、板の上をよろめきながら漸くスイッチに辿りついた。十二個並んだスイッチのハンドルを持つて忽ち切斷した。責任を果した傳治君は此の時窓から前へ飛び出した。ああ此の勇者がなかつたならばあの壯嚴なホテルも漏電のために火を發したかも知れない。これを未然に防いだ森田傳治君の功は没することは出來ぬ。ホテルは數日後森田君のために表彰式を行つた。

本籍 福岡縣鞍手郡中村大字八七七
現住所 在厚郡大崎町袖ヶ崎須藤方
帝國ホテル營業係技手 森田傳治君 (二十二年)

●重要書類を穴藏へ

烈風に煽られた火焰が富士見町方面から刻々に女子英學塾を襲はふとした九月一日午後一時。最早井伊侯爵邸は猛火の包む處となつた。英國大使館女子英學塾は風下にあつた。刻々に危い。

折柄英學塾には、小使井上仁三郎君（塾に勤務する事、實に二十年、塾長を始め職員生徒から「爺や」爺や」と呼ばれてゐる。職員も生徒も、其の忠實朴訥にすつかり信用してゐる。學校を全く家のやうに考へて長い間塾に起居してゐる）同堀川權吉君（十年前から勤めてゐる今年六十六のお爺さん）と書記の吉川利一君（早大文和の出身現に神田佐久間補習夜學校教諭である）三人及其の家族など十一人の人しか居らなかつた。夏の休みだつたので生徒も先生もゐない。寄宿舎はあつたが、まだ歸舎した。生徒もなかつた。

火勢は益威を逞うする、校内の消火栓を開いても涙程の水も出ない。校舎の焼失は目睫の間にある此の時、吉川君及二人の小使君は自分の荷物の事などは全く忘れてゐた。重要書類を先づ搬出しなくてはならぬと考へた。北西南の三方は家つづき、南は道一つ隔てて英大使館の裏の煉瓦塀である。

持ち出す處のないのに三人は弱つたが、忽ち吉川君は、校内、寄宿舎の端に穴藏のある事を思ひ出した。其塾の立つ前は此處は某牛乳店であつたので牛乳貯藏に使つたのが未だ現形を變せずに残されてあつた。いつもは寄宿生のための食料品等が入れてある。屈強な匿し場所と、三つの大きな箱にぎつしりと詰つた公文書、學籍簿、會計帳簿、有價證券（額一五〇〇〇圓）を此の穴藏に運んだ。穴藏の入口は幅三尺に長さが二間もあらうか長方形である。そこから地下に石段が続いて、提灯を灯さなければ一寸入れない。約一丈程斜に下つた所で石段は右の方へ捻れてゐる。それから七八段も降りたあたりが廣い室になつてゐる。五六疊も敷けやうか。入口や石段の途中に置いては火が移るかも知れないと三人は三つの箱を奥の壁にくつつけた。是なら大丈夫と、胸撫で下して夫々に避難した。學校に名残を惜んで。

吉川君は家族の者を全部まとめて半藏門前の廣場へ避難した。もう日が暮れて来る。風が變つたのか、頭の上を火の粉が猛烈な勢で飛んで行く。それがお濠を越した松の木に燃え移る。パチ／＼と云ふ音さへ聞えるやうになつた。此處に居ることの非常に危険なのを思ふた吉川君は、出産前の身重な夫人と子息を伴れて車馬、避難の人の雜然と逃げて行くに混つて麴町の大通りを四谷見附へ向つた。其の時だ、吉川君の頭に閃電の如く思ひ出されたのは校印を持ち出す事を失念してゐた事であつた。

重要書類は穴藏へ入れた。然るに校印を忘れてはこれ所謂龍を畫いて眼睛を忘れたに等しい。とつて返し搬出せんと子供等に避難の場所を教へ單身學校に馳せつけた。君の頭を支配するものは唯強い責任の威のみである。

日は全く暮れてしまつたがあたりは火焰のために晝のやうに明るい。何卒學校の類焼のしばしにて遅かれと心に祈念しつつ、無茶苦茶に學校へ飛んで行つた。人々は此時大分避難し盡したのだらう人影もないあちらこちらに物凄い焰の音が聞える。屋根の瓦の飛ぶ音が聞える。梁の焼け際ちる響が聞える。おお其の中に其の音の中に！ 其の響の中に、其の焰の中に、まだ學校は焼けずに残つてゐる！ やれ嬉しや、まだ燃えずにゐて呉れたか。これこそ天の助よとおそひ來る猛火の下、黒煙を真向からあびて敢然として校内に、ころげるやうに飛び込んだ。もとより案内知つた所、校印を入れた机の曳出し抜くより早く身をひるがへし戶外へ出ればメリ／＼といふ屋根の墜ちる音。

……
 火事が済んだ。焼けあとの灰をかきのけて穴藏へ入つた三人は、途中にあれからあとで誰れかが投げ込んだ荷物が半分燃えてゐるのに驚いた。しかし奥の壁に押しつけた三つの箱が全部無事だつたのを喜び合つた。女子英學塾は焼けた。そして今女子學院の校舎を借りて授業を繼續してゐるが、生徒

への通知にも前部との總べての交渉にも少しの困難をもしなかつた。

堂々たる官廳や會社などで、貴重な公文書類をすらも焼失したもの多い中に、老人の小使を相手に學校長の重要書類は勿論校印迄も無事に保管し遂げた英學塾は仕合せであつた。穴藏よりも、書類よりも、このやうな職員と小使とをもつた英學塾は仕合せであつたのだ。

本籍 長野縣下伊奈郡高木村 女子英學塾書記 吉川 利 一君 (三十六年)
 住所 魏町區五番町女子英學塾内 神田佐久間補習夜學校教師

住所 魏町區五番町女子英學塾内 女子英學塾小使 井上仁三郎君 (六十年)

本籍 三重縣宇治山田市市川崎町 女子英學塾小使 堀川 權 吉君 (六十六年)

● 十三の袋を水に沈めて

「アツ！ 君火が窓掛に。もうこうしては居られな」と

十三個のツツクの袋は、また／＼くひまに重要書類で一杯にされてしまつた。

「君車はないか」

「さうだ。どうにもしてこれだけは持出さなければいけないのだ。」

「とても備付の荷車一臺位では、これだけを運び出すことは出来はしない。第一もう車を引き出すべき道さへもないではないか。」

「さうだ。仕方がない水だ。水に沈めて置こうぢやないか。」

「あゝさうだ。もうそれより他にとるべき方法はなくなつた。」

「それにしても、どうしてこの四十貫つゞもあるおまけに数多い袋を流されないやうにし得やう。」

「いや今はもう思案や悲観をして居る場合ぢや無い。網はないか。綱は。」

「よしッ。これだ。」

電燈のコードは見事ブツ／＼引切られた。球も笠もたゞき破られた。……。

袋の口はしつかりと結ばれた。十三の袋の頭も離れぬために珠数つなぎにされてしまつた。

「さあよし。これで大丈夫。それッ。」

「しかし君。このまゝあの濁流に投じて若しも。」

「おゝさうた！。押し流されては何にもならない。」

「電柱の根本に結びつけやうか。」

「棒切に結びつけて、石垣の岩の間へ棒を挟んで置けば十分だ。」

「棒はないか！ 手頃の棒は。」

一同血走る眼に見出されたのは、物置にあるカマスに満ちた石炭であつた。

「あゝこれ／＼。」

「おち、三俵ばかりを結び付けやう。これより外には何もない。」

「出来た！ 出来た！」

七人の若者が渾身の力をこめて、十三個の袋の書類は辛くも紅焰流るゝ河中にと引すり下されたのであつた。

折からの烈風に木挽町八九丁目一帯はもはや猛火に包まれて身邊には危険が迫つて来た。

「兎に角君。これは大抵大丈夫だ。今逃れなければとても危い。」

「僕等一先づ八丁堀の下宿を見に行くから。じや別れるとしやう。」

「では早く！ お互に無事で又會はう。」

富田星野和田太田の四人は丸の内へ。残る三人は八丁堀へ。

◎

「おばあさん早くおにげなさい。」

「彼は僕達が引受けるから。」

「よしつ。僕が家の荷物は出来るだけ持出すから。その不自由な娘さんを脊負つてくれ。」

「さあおばあさんも早く。」

「とにかく海軍の参考館あたりへ行かうぢやないか。一分もこの邊にまご／＼しては居られない。」
下宿の老婆と、腰のたゝない不幸な娘とは、ささやかな荷物と一しよに、疲れに疲れた彼の三人の若人の強い腕に救はれやうとしてゐるのであつた。

しかし参考館も午後七時四十分には私達の不幸な友だちの假り安住の處ではなかつた。これら五人の一行は又人波にもまれて明石町聖露加病院附近へとひた走りに走るのであつた。

「おばあさん。先づここなら安心と思ふから。僕達は署が案じられる。今一度引返して見て来るから。」

「氣をつけて、まつて居て下さる。」

三人が踵をかへして、署の近くへ来た。八時四十分にはもう前の京橋郵便局は一面紅蓮の柱となつて署は今呪の火焰になめられて居る最中であつた。

「君これぢやもうだめだ。こんな所にまごつてはゐられない。引上げよう早く／＼。」

「では明石町へ。」

「ほんとにさうだ。弱い二人の親子が、どんなにふるへて居るだらう。」

三人が引返さうとした時は、すでに／＼その道は火に断たれて、どうしても行くべき術がなかつた。後に心を残しながらも、悪魔の焰に追はれ／＼と、とう／＼鍛冶橋から日比谷へと命の道を辿つたのであつた。

飢と渴と汗とにさいなまれた三人が、やうやく踏みにじられた芝生の上に、縮みのシャツ一つにふるへる我を見出したのは、それから二時間半を過ぎた十一時三十分の頃であつたのだ。

恐怖と騷擾と悲鳴の短夜に白々と明けかけた午前の五時、三人の姿は何事かを期するやうに足をひたすら署の方へと急がすのであつた。

「あゝ君たちも来たのか。」

「おぢ君も無事であつたか。」

「よくお互におお君もか。」

「あの袋はどうなつたらう。」

「全くそれが心配でたまらないから駆けつけて来た處なのだ。」

「僕もだ。早く行つて見やう。」
「アッ。浮んで焼けて居るぞッ。」

よく近寄つて、河面を見つめれば、そこには十三個の中の一つの水から出て居た半分が黒焦げとなつて居たのであつた。しかし残る全部は完全に沈んで残つて居るらしかつた。

四人の中の二人と、日比谷へ逃れた三人との五人は水の中の袋の完全なのを見届けて、兎も角成功したらしいのを喜び合つたが、これ以上どうする事も出来ないものであつた。

周囲は一面まだく、餘燼の熱さで、立つて居るさへたえられなかつた。昨日の晝から一食すらとらないこれら五人は、一先づ四谷税務署へその一切を訴へた。

翌日四谷署から二名の應援を得て、二日二夜水に浸された數百貫の十三個の袋を引上げるのに四時間あまりを費すのであつた。さうして代々木初臺にある山本京橋税務署長宅へ運ぶのであつた。

此の書類が全部乾ききるためには、署の全員が署長の宅で一ヶ月かかつた後であつた。しかし土地臺帳をはじめとしなくてはなかなぬ書類の殆んどすべては、そのまゝ無事に役立つのであつた。

かくして京橋區は勅令による減免税の調査にも、前期既納税の拂戻しにも、他の罹災區にまさつた速さと便利と正確さで區民の喜びを見ることが出来るのであつた。

しかしそれは、己れの家の灰燼となるをも顧みず、中には着て居た上着すら失くして努力した七君すべての涙ましい災害の犠牲によつてのみなされた賜なのであつたのだ。

東京市京橋區木挽町二丁目 京橋税務署員 添田直吉君 (二十六年)

同(當直)川崎俊雄君 (二十四年) 同 星野七三郎君 (二十七年)

同 太田友法君 (二十四年) 同 杉山治君 (二十三年)

同 和田要太郎君 (二十九年) 稅務監査局員 富田直耕君

●沈着なる區吏員の活躍

震災當日「午後三時までには歸所すべき」區長の命令を受けて、一旦家庭の安否を尋ねるために歸宅を許された芝區吏員百餘名は(區長及掛長意外の者)「我が家如何にと」氣づかひつゝ解散した。戸籍掛の福寝君の宅は、當時京橋區南鍋町二ノ一にある三階建ビルディングの一室にあつた。途中悲惨にも倒壊してゐる家屋を見ては「自家の家の建物も必ず、めちやく／＼に倒れてゐるであらう。さうすれば四人の家族はきつと無慘な壓死を遂げてゐるに相違ない。」心にさう思ひながらも、なほ「もしや？」